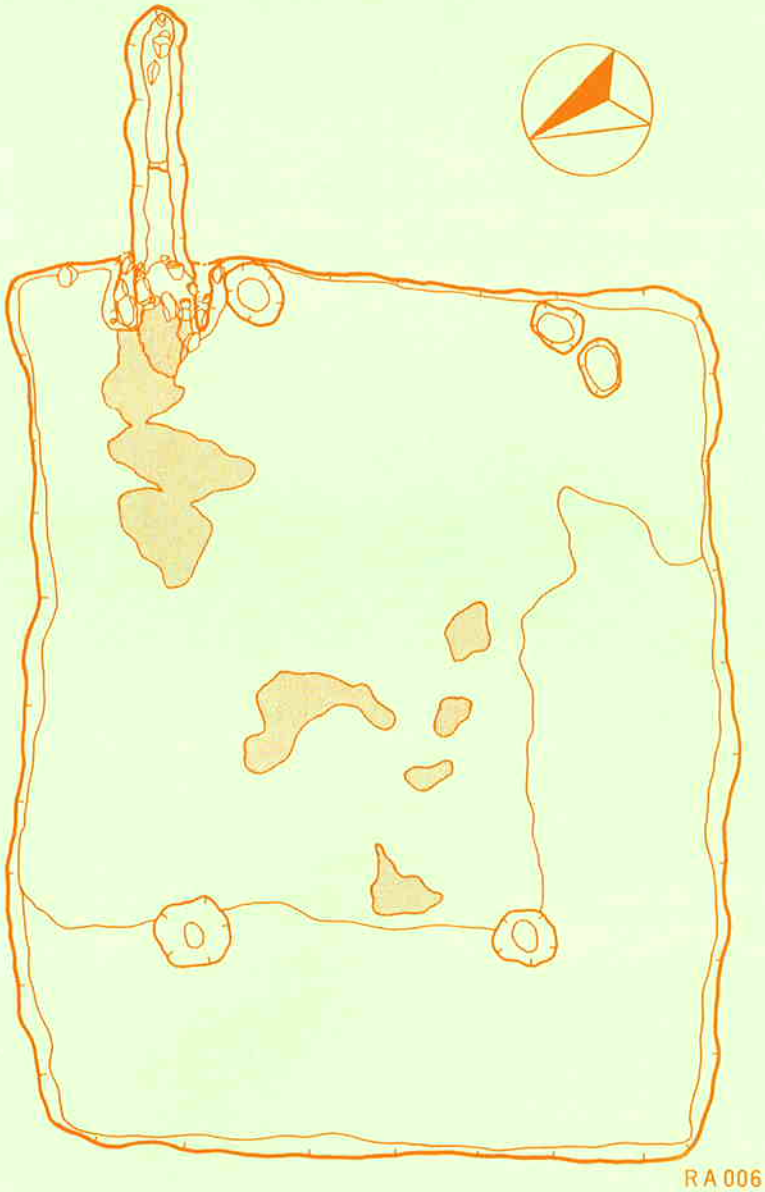
館・松ノ木遺跡

――古代の遺構編――



1992. 3

盛岡市教育委員会

館・松ノ木遺跡

――古代の遺構編――

1992. 3

盛岡市教育委員会

序　　言

秀峰北の岩手山，西の駒が岳の水脈を合した雫石川は，太古より人間の長い歩みとともに流れてまいりました。水量多く，その流れによって肥沃の地となし，またあるときは災禍の源ともなりましたが，その両岸には雫石川の恵沢をうけた人々の遺跡が数多く残されております。雫石盆地では，文字通り人間の足跡が残る縄文時代の大集落であった萪内遺跡，北上盆地にはいってからは肥沃の地に造営された陸奥国最北の城柵志波城跡などがあります。

館遺跡・松ノ木遺跡も雫石川のつくりだした沖積段丘上の遺跡で，かなり広大な古代集落跡であったと推定され，肥沃の地を裏付けるものでありましょう。また，中世の太田館跡にも擬定されており，交通・軍事的にも重要な位置であったことがうかがえます。

このたびの発掘調査は，墓地造成，個人住宅新築，農家排水等に関連して実施したものですが，消滅した遺構に代わってこの調査成果がひろく歴史を叙述する一資料となることを願うものであります。

最後になりましたが，種々のご協力をたまわった宗教法人大松院，地権者のみなさま，ならびに関係各位に対し，深甚の謝意を表するものであります。

平成４年３月

盛岡市教育委員会

教育長　**佐々木　初　朗**

例　　言

1．本書は，岩手県盛岡市上太田館・松ノ木地内に所在する館遺跡及び松ノ木遺跡の発掘調査報告書で，昭和54年から平成３年度に実施した第１～12次調査のうち第１・２・６・７・11次の古代の遺構を収録したものである。なお、８次調査で竪穴住居跡１棟を確認しているが、煙道だけの検出のため割愛した。古代の遺物編および中世以降の遺構・遺物編は別途報告予定である。

2．本遺跡の調査及び本書の執筆・編集には似内・八木・千田・小原・室野があたり、内山・中島・鹿野・小松・藤田が補助した。

3．遺構の平面位置は，平面直角座標第Ｘ系を座標変換した調査座標で示し，Ｘ・ＹにＲを冠した。

調査座標軸方向　　第Ｘ系に準ずる。

調査座標原点　　Ｘ－34 000,000　　Ｙ＋22 000,000

4．高さは標高値をそのまま使用した。

5．土層図は堆積のあり方を重視し，線の太さによって堆積の違いを表わした。土層註記は層理ごとに本文でのべ，個々の層位については特記事項のない限り割愛した。

なお，層相の観察にあたっては『新版標準土色帳』（1967）を参考とした。

6．文中の土器区分は，須恵器・土師器・あかやき土器・陶磁器に分類した。

7．本書で使用した遺構の記号は次のとおりである。

古代に関する遺構				
竪穴住居跡　ＲＡ	土坑　ＲＤ	竪穴　ＲＦ	溝跡　ＲＧ	
中世以降に関する遺構				
柱列　ＳＡ	堀・溝跡　ＳＤ	土塁　ＳＦ	竪穴　ＳＩ	土拡　ＳＫ

8．本遺跡に関わる既刊の略報・年報で使用した遺構番号は本書をもって訂正する。

目　　次

序　言
例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の環境
　1　地理的環境 ---------- 1
　2　歴史的環境 ---------- 2
Ⅱ　調査経過
　1　調査経過 ---------- 5
　2　調査体制 ---------- 9
Ⅲ　調査内容
　1　第１次調査 ---------- 10
　2　第２次調査 ---------- 24
　3　第６次調査 ---------- 42
　4　第７次調査 ---------- 47
　5　第11次調査 ---------- 52
Ⅳ　調査遺構のまとめ
　1　竪穴住居の分布と構造 ---------- 54
　2　中世以降の遺構 ---------- 59

図　版　目　次

第１図版　遺跡全景
第２図版　遺跡遠景
第３図版　館１次調査平安時代(1)
第４図版　館１次調査平安時代(2)
第５図版　館１次調査平安時代(3)
第６図版　館１次調査平安時代(4)
第７図版　館１次調査平安時代(5)
第８図版　館１次調査中世以降
第９図版　館２次調査平安時代(1)
第10図版　館２次調査平安時代(2)
第11図版　館２次調査平安時代(3)
第12図版　館２次調査平安時代(4)
第13図版　館２次調査平安時代(5)
第14図版　館２次調査平安時代(6)
第15図版　館２次調査平安時代(7)
第16図版　館２次調査平安時代(8)
第17図版　館２次調査平安時代(9)
第18図版　館２次調査中世以降(1)
第19図版　館２次調査中世以降(2)
第20図版　館３・４・５次調査中世以降・近世
第21図版　松ノ木６次調査平安時代・中世以降
第22図版　松ノ木６次調査奈良・平安時代
第23図版　松ノ木７・８次調査奈良・平安時代・中世以降
第24図版　館９次調査中世以降
第25図版　館10・11次調査，松ノ木12次調査平安時代・中世以降

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 ---------- 1
第２図　地形分類と遺跡分布 ---------- 3
第３図　館・松ノ木遺跡全体図 ---------- 7・8
第４図　館遺跡１・２次調査区全体図 ---------- 11
第５図　ＲＡ001・002・003竪穴住居跡 ---------- 13
第６図　ＲＡ004・005竪穴住居跡 ---------- 15
第７図　ＲＡ006竪穴住居跡 ---------- 17
第８図　ＲＦ007竪穴，ＲＤ001土坑 ---------- 19
第９図　ＲＡ008竪穴住居跡 ---------- 20
第10図　ＲＡ009竪穴住居跡 ---------- 21
第11図　ＲＡ010竪穴住居跡 ---------- 22
第12図　ＲＡ011竪穴住居跡 ---------- 23
第13図　ＲＡ012・022竪穴住居跡，ＲＤ002土坑 ---------- 25
第14図　ＲＡ013・024竪穴住居跡 ---------- 27
第15図　ＲＡ014・015竪穴住居跡 ---------- 29
第16図　ＲＡ016竪穴住居跡 ---------- 31
第17図　ＲＡ017竪穴住居跡 ---------- 32
第18図　ＲＡ018竪穴住居跡，ＲＧ001溝跡 ---------- 33
第19図　ＲＡ019・023竪穴住居跡 ---------- 35
第20図　ＲＡ020竪穴住居跡 ---------- 37
第21図　ＲＡ021竪穴住居跡，ＲＧ001溝跡 ---------- 38
第22図　ＲＦ025竪穴，ＲＤ003・004・005・006土坑 ---------- 41
第23図　松ノ木遺跡６次調査区全体図 ---------- 43
第24図　ＲＡ026竪穴住居跡 ---------- 44
第25図　ＲＡ027・028・029・030竪穴住居跡，ＲＤ007土坑 ---------- 46
第26図　松ノ木遺跡７次調査区全体図 ---------- 47
第27図　ＲＡ031・032・033竪穴住居跡 ---------- 49
第28図　ＲＡ034竪穴住居跡 ---------- 51
第29図　館遺跡11次調査区全体図 ---------- 52
第30図　ＲＡ036・037竪穴住居跡，ＲＧ002・003溝跡 ---------- 53
第31図　館跡の推定される縄張り ---------- 60
表　1　館・松ノ木遺跡調査の概要 ---------- 6
表　2　館・松ノ木遺跡検出竪穴住居跡・竪穴一覧 ---------- 56・57

Ⅰ 遺跡の環境

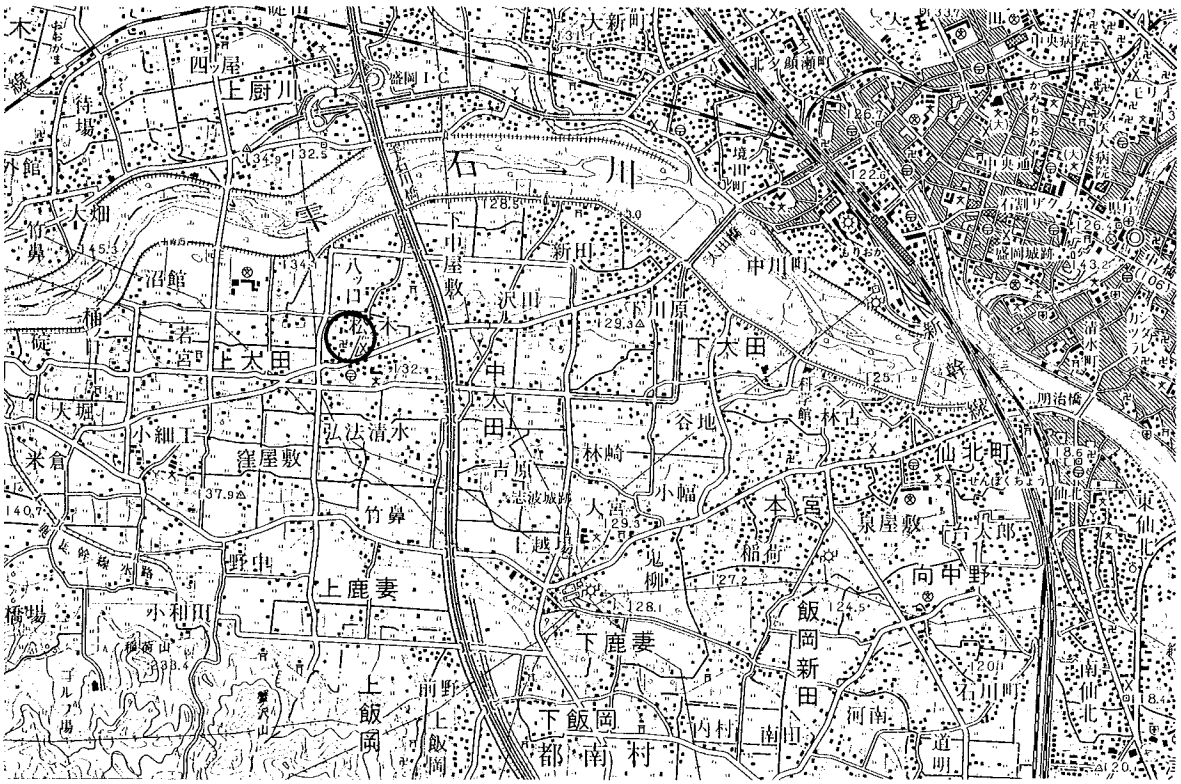
1　地理的環境

遺跡の位置

盛岡は，東の北上山地と西の奥羽脊梁山脈の間の北上川がつくりだす北上盆地の北端に位置する。北上川は南流するうちに多くの河川と合流して水量を増していくが，その最初の大河川雫石川，中津川と合流することによって幅広い盆地を形成する。その雫石川は脊梁山脈から東進し，雫石盆地を形成するが，鳥泊山と箱ケ森にはさまれた北の浦付近で急激に流路をせばめられ（北の浦狭窄部），この狭窄部をぬけて北上盆地にはいり，北上川と合流するまでの間の右岸に沖積面を形成する。遺跡はこの沖積面に立地する。

一方，雫石川左岸は，岩手火山を供給源とする火山砕流堆積物，火山灰層をのせる台地や段丘が発達しているため，雫石川による沖積面はほとんど発達していない。また北上川も生成の異なる奥羽・北上両山脈の境にそって流れ，沖積面をあまり形成させていない。つまり盛岡周辺での沖積面は雫石川右岸にだけ発達しているのである。

雫石川右岸の沖積面は，流路の転換がいちじるしく，旧河道が網状に確認される。連続する



第Ⅰ図　遺　跡　の　位　置

旧河道は，５条ほど確認され，現雫石川以南では，旧河道の右岸に比高１ｍ以下の自然堤防ともみられる河岸段丘があり，現河道以北では２～５ｍ前後の比高差をもって上位の段丘面に接している。

沖積段丘

この沖積段丘は，水成砂礫層を基底とする砂礫段丘の最下面に分類されるが，基底砂礫層までの深さは一定せず，大小のうねりがこの地区の発掘で確認されている。砂礫層の上部を水成シルトがおおっているが，そのシルトの層厚や層相が一様ではなく，シルト層内に腐植土（あるいは火山灰か）を介在する地点もあり，長期の堆積とみられる。また本遺跡の古代の住居跡を埋没せしめている例もある。このように雫石川沖積段丘は，雫石川が周辺山地から供給する砂礫やシルトによって堆積され，それをさらに流路の定まらぬ雫石川による下刻や堆積がくりかえし行なわれてきたのである。すなわちこの地域の沖積段丘は常に河川の影響をうけた不安定な地形であったといえよう。

この不安定な雫石川沖積段丘は山地のきわまでおよんでおり，山地の縁辺に小規模な扇状地や中位の砂礫段丘が若干みとめられるだけである。これが雫石川の影響の少なくなる南部では，中位の砂礫段丘や後背にひろがる扇状地が発達し，景観を異にしている。

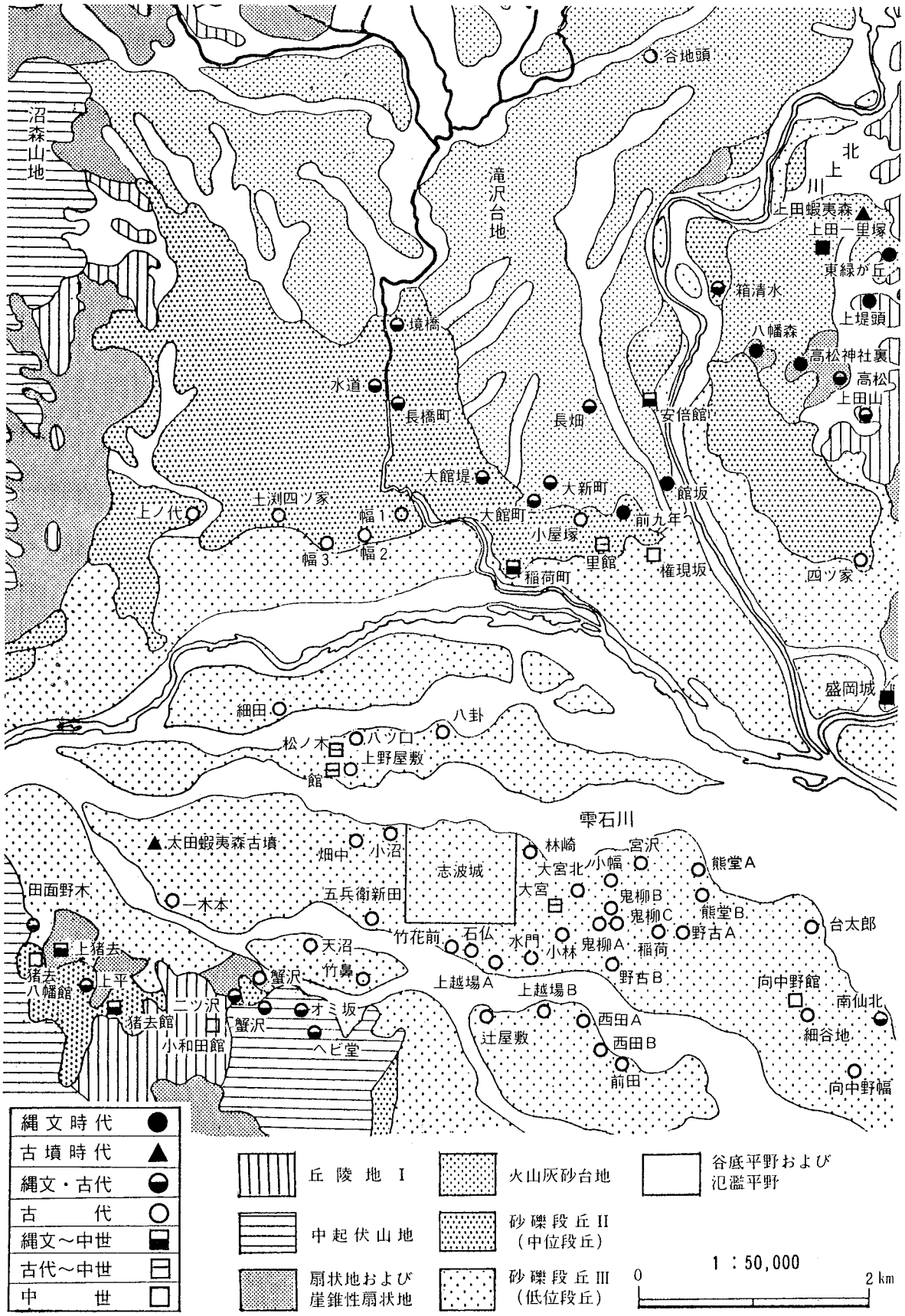
2　歴史的環境

雫石川によって形成された沖積段丘面上に縄文時代の遺跡はほとんど立地しておらず，志波城跡で土器片や土坑がようやく確認される程度である。弥生～古墳時代の遺跡も未確認で，わずかに志波城跡内で弥生土器片が検出されているだけである。

そして古代になるとこの沖積段丘上に集落などが多数立地するようになってくる。まず７～８世紀代に末期古墳群（太田蝦夷森・大道西・狄森・白沢古墳群）が築造されるが，白沢古墳群をのぞき，沖積段丘上に立地している。同時代の集落も同じ沖積段丘上に営なまれており，志波城跡内の吉原地区，百目木・稲村遺跡などが知られている。ただし雫石川以北は沖積段丘が未発達な地域のため，中位の砂礫段丘や火山灰砂台地上に幅・大館町遺跡が存在する。この時代の集落は大小の竪穴住居で構成され，大形住居に玉類や紡錘車が偏在してみられ，家父長制的な村を構成していたと考えられる。また古墳群からは多量の玉類や刀・銙帯金具・和同開珎などが出土し，やはり家父長制などを背景に造営されたものであろう。

そして平安時代にはいり，志波城（803年）や徳丹城（813年頃）が造営されるが，ともに前世紀の集落の上につくられており，この周辺の中心地をねらったものと考えられる。これ以降，今までの沖積面からさらに上位の砂礫段丘や扇状地に集落が拡散するようになる。この場合でも，扇端部や谷底平野の直上など，地形のかわりめに立地するのが一般的である。志波城徳丹城造営による地域社会の変換は比較的大きかったと思われ，古墳群の造営がなくなり大形住居への玉類などの偏在はみられなくなってしまう。また竪穴住居の大小は急激にはなくならないが，10世紀あたりには均一化してしまうようである。

７～８世紀からの集落の増加は耕地の拡大が必要であり，上位段丘面への進出はその反映であったと思われる。志波城造営などがその契機となり，さらに計画的な村落の配置もなされた



第２図　地形分類と遺跡分布

可能性もある。しかし811年建郡の志波三郡（和我・稗縫・斯波郡）が律令体制下のもとで長く存続しなかったという文献解釈からすると計画村落については検討すべき点が多い。ともあれ平安時代の集落のほとんどが9～10世紀代のものであることはこの地域の大きな特徴のひとつである。ところが11世紀以降の安倍氏や平泉藤原氏の台頭する時代の集落があまりみられなくなってしまう。これは遺跡の未発見によるものと思われ，今後の調査が期待されるところである。なお11世紀代として大新町遺跡などがあり，明らかにかまどをもつ竪穴住居跡は確認されていない。また12世紀代の遺跡として比爪館遺跡もあり、藤原氏一族の樋爪氏の居館に擬定されている。

中世にはいると，集落遺跡は他の時代の遺跡と重複して偶然に検出される例が多いが次第にその遺跡数は増してきている。志波城跡内の宮田地区や大宮・古館橋などで，張り出しをもつ竪穴が検出されている。また城館は、その性格上丘陵や山地の縁辺に立地する例が多いが，沖積段丘上の館遺跡，中位砂礫段丘上の里館（さだて）遺跡や大釜館推定地など，微高地に立地する例もある。分布の密度も隣接する尾根ごとに設置されたところもあり，また独立丘陵に点在する例もある。

中世史の概説として，盛岡周辺の地頭と城館について略述しておく。平泉藤原氏征討の際（1189年）岩手郡厨河（くりやがわ）に工藤氏を地頭とし，これと前後して北上河東に河村氏，岩手郡滴石（しづくいし）に戸沢氏，糠部郡三戸に南部氏を地頭としておき，これら鎌倉御家人が地方の実質的な権力者となったことはいうまでもない。厨河工藤氏は安倍館（厨川城）を居城とし，工藤氏を本姓とする飯岡・煙山等の名から北上川以西を領していたと考えられており，また河東河村氏は大巻城等を居城とし，やはり河村氏を本姓とする長岡（ながおか）・佐比内（さひない）・大萱生（おおがゆ）・乙部（おとべ）・日戸（ひのと）等の名から北上川以東を領有していたとされる。滴石戸沢氏は滴石城を居城としていた。

この領有関係がくずれるのは室町時代で，河村氏が衰え，代わって斯波氏が斯波郡高水寺城を居城に勢力をふるい，北上河東も現盛岡（中津川が境か）以南を斯波氏，以北を南部氏に分割されたようである。厨川工藤氏勢力範囲の南側も斯波氏に侵されたと思われる。

そして室町幕府が衰退し、戦国時代にはいると、三戸南部が他を圧倒しはじめる。この頃盛岡周辺は，雫石盆地や雫石川以南が斯波氏の領有で，厨川工藤氏とも姻戚関係を結んでいた。天文～天正年間は南部・斯波氏の抗争期であり，天正元（1573）年雫石斯波氏が太田館・大釜館を焼討，天正14（1586）年雫石斯波氏滅亡，そして天正16（1588）年高水寺城の斯波氏が滅び，南部氏が近世大名として歩み始める。

城館遺跡の多くが時代を限定できず，また固有名詞に結びつく文献に乏しく，わずかに館遺跡周辺では猪去館が斯波氏一族の猪去氏の居城に擬定され，斯波氏家臣の飯岡館に，多田氏が太田館に，多田氏の分流の大釜氏が大釜館に居を構えていたことが知られるのみである。中世の歴史叙述は今後の研究に負うところが多いといわざるを得ない。

II 調 査 経 過

1 調査経過

市内上太田館及び松ノ木地内は以前から平安時代の土器が採集される遺跡として周知されていたところで昭和51年以来，建物の建築にあたっては試掘調査及び基礎工事立会を実施しており，これまでに12次を数える（なお，立会調査によって遺構が確認されなかった地点については調査次数から除いている）。

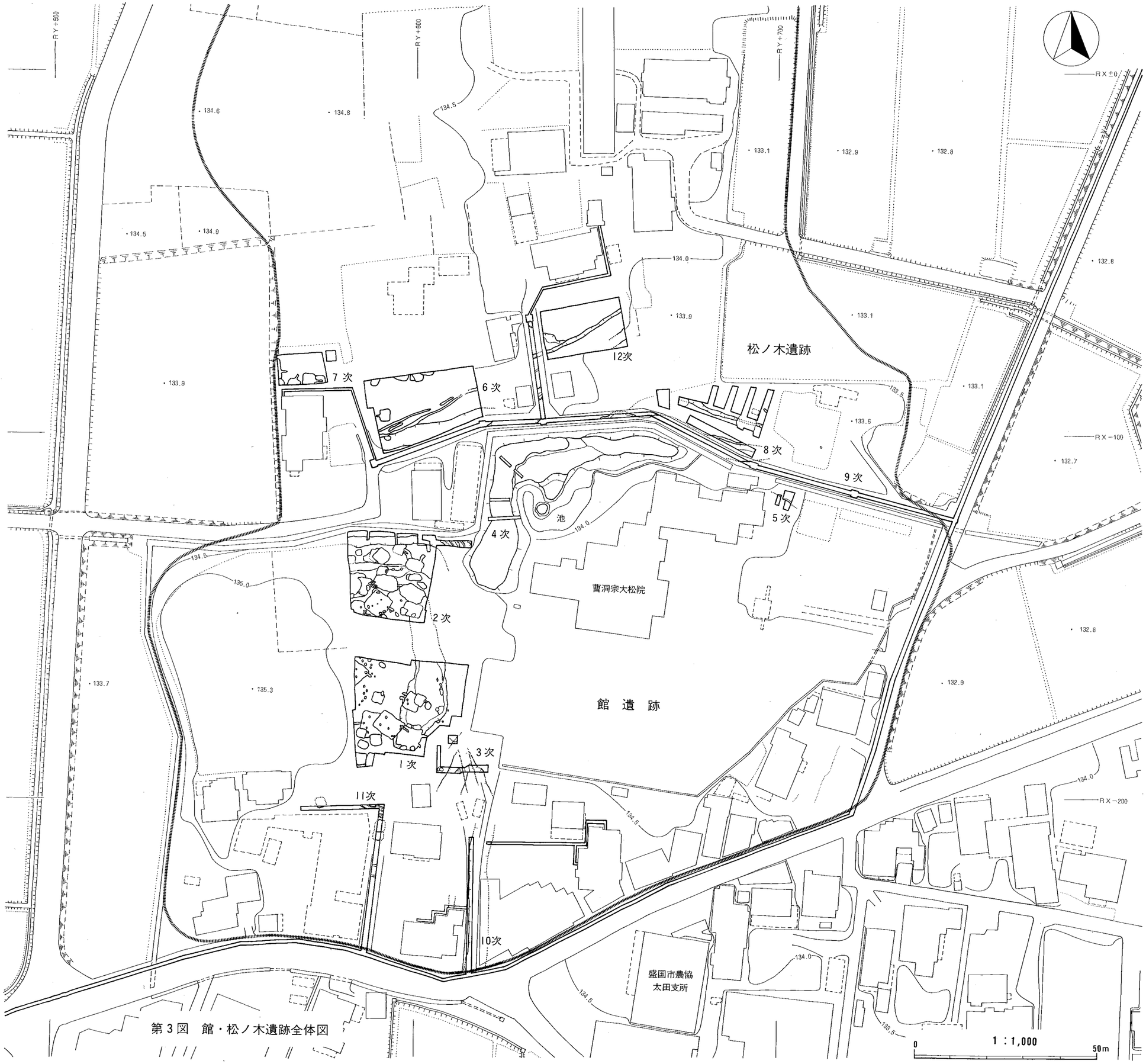
本調査としての最初の契機は，昭和53年に館遺跡地内に所在する大松院の墓地拡張計画が出され，同年秋に試掘した結果，多くの遺構・遺物が検出された事から翌54年に本調査（第１次調査）を実施した。なお，調査は造成工事中に提出された事もあり，墓域東半部は未調査である。また，56年には再度の墓地拡張計画にもとづき，翌57年に本調査（第２次調査）を実施した。墓地に隣接する住宅の増築も計画され，第２次調査終了後の調査（第３次調査）とし，また大松院境内の池北西の土塁状高まりの性格を確認するため，トレンチ調査（第４次調査）も実施した。さらに59年には大松院境内の物置新築にかかる事前調査（第５次調査）を実施した。

松ノ木遺跡にかかる調査は60年に小屋新築に伴なう試掘調査を実施し，この結果にもとづき翌61年に本調査（第６次調査）を実施している。また平成元年には，遺跡南西部の小屋新築にともなう調査（第７次調査），２年度には南東部の住宅新築にともなう調査（第８次調査）を実施している。さらに付近一帯に農水省所管の農村総合整備モデル事業が導入され，環境基盤整備として，遺跡内外の市道部分に集落排水本管が敷設される事となった。この事業にともない周知の遺跡外を立会調査，遺跡内を本調査（第９・10・11次調査）として実施し，この成果から遺跡範囲をとらえる事ができた。３年度には松ノ木遺跡南側中央部の住宅新築（第12次調査）に対応している。なお，集落排水工事にともなう各家庭への枝管も随時敷設されており，立会調査により遺構の有無と保護に努めている。

これまでの調査によって，平安時代の遺構が館・松ノ木遺跡で検出されているが，１・２次と６・７次で確認した遺構とは時間差を生じると考えられる。また中世以降，いわゆる太田館にともなう遺構として，１・２・３・５・６・８～11次で堀及び遺跡を検出している。なお、３次調査でみられるように３条の堀が重複しており，区画施設が幾度か変遷しているものの館跡の範囲は東限及び南限が市道，西限が段丘境となり周囲と画される範囲，北限は微地形で水路を境として松ノ木地域が若干の低地となる。第６・８・９次でＳＤ008・013が検出されており，これを区画施設とすると，東西約200～220ｍ，南北110～150ｍの範囲としてとらえられる。なお，第６・８・12次で規模の小さい中世以降の溝跡が数条検出されているが，時期は不詳である。一方，松ノ木遺跡の範囲及び遺構のあり方はこれまでの調査が，南半部に集中しているため北限が不明瞭であるが，東西約140～160ｍ，南北約200ｍとみられる。

表1　館・松ノ木遺跡調査の概要

次　数	所　在　地	調査原因	調査面積	調査期間	検　出　遺　構
館　1	上太田館67	墓地造成	1,600m²	54. 4.13 ～ 6.28	平安竪穴住居跡10棟（ＲＡ001～006、008～011)、竪穴（ＲＦ007)、土坑１基（ＲＤ001)、溝跡１条（ＲＧ001)。 中世以降竪穴３棟（ＳＩ001～003)、溝跡１条（ＳＤ001)、土坑９基（ＳＫ001～009)、柱列３条（ＳＡ001～003)、ほか柱穴多数。
館　2	上太田館56-3	墓地造成	564m²	57. 4.20 ～ 7.19	平安竪穴住居跡13棟（ＲＡ012～024)、竪穴１棟（ＲＦ025)、土坑５基（ＲＤ002～006)。 中世以降堀・溝跡２条（ＳＤ001・002)、土塁１条（ＳＦ001)、土坑11基（ＳＫ010～020)、ほか柱穴多数。
館　3	上太田館58	住宅増築	35m²	57. 7.19 ～ 7.26	中世以降堀跡４条（ＳＤ003～006)、土坑２基（ＳＫ021・022)。
館　4	上太田館67	土塁調査	23m²	57. 8. 4	近世墳墓１基（ＳＫ023)。
館　5	上太田館66	物置新築	120m²	59. 6.25 ～ 6.28	中世以降堀跡１条（ＳＤ007)、柱穴１口。
松ノ木6	上太田松ノ木53-1	小屋新築	600m²	61. 4.24 ～ 5.31	平安竪穴住居跡５棟（ＲＡ026～030)、土坑１基（ＲＤ007)。 中世以降堀跡１条（ＳＤ012)、溝跡４条（ＳＤ008～011)、土坑１基（ＳＫ024)。
松ノ木7	上太田松ノ木54-1	物置新築	104m²	元.10.24 ～ 11.06	平安竪穴住居跡４棟（ＲＡ031～034)。
松ノ木8	上太田松ノ木69-1	住宅新築	187m²	2. 4.26 ～ 5.14	平安竪穴住居跡１棟（ＲＡ035)。 中世以降堀跡１条（ＳＤ013)、溝跡２条（ＳＤ014・015)。
松ノ木9	上太田松ノ木地内市道	農家排水	235m²	2.10.15 ～ 10.29	中世以降堀跡１条（ＳＤ013)、溝跡３条（ＳＤ016～018)。
館　10	上太田館地内市道	農家排水	40m²	2.10.15 ～ 10.29	中世以降堀跡１条（ＳＤ019)。
館　11	上太田館地内市道	農家排水	70m²	2.10.15 ～ 10.29	平安竪穴住居跡３棟（ＲＡ036～038)、溝跡２条（ＲＧ002・003)。 中世以降溝跡２条（ＳＤ020・021)。
松ノ木12	上太田松ノ木52-7	住宅新築	308m²	3. 4. 8 ～ 4.19	中世以降溝跡１条（ＳＤ022)、土坑１基（ＳＫ025)。



第３図　館・松ノ木遺跡全体図

2　調査体制

平成３年度の発掘調査体制は次のとおりである。

総　　括	川村　滋	盛岡市教育委員会社会教育課長	
	吉田　義昭	〃	文化主幹
	山田　正誼	〃	課長補佐
事務総括	菅原　康一	〃	文化係長
	宮崎　敏史	〃	〃　主事
調査・事務	八木　光則	〃	〃　社会教育主事
	千田　和文	〃	〃　社会教育主事
	似内　啓邦	〃	〃　社会教育主事
	小原　俊巳	〃	〃　主事兼社会教育主事補
	斎藤　信次	〃	〃　社会教育主事
	室野　秀文	〃	〃　主事
室内整理	内山　陽子	〃	〃　文化財調査員
	中島　京子	〃	整理補佐員
	鹿野奈保美	〃	整理補佐員
	小松　愛子	〃	整理補助員
	藤田　友子	〃	整理補助員

また，これまでの調査の実施にあたり，下記の方々から多大な御援助・御協力をいただきました。御芳名を記して深く謝意を表します（敬称略）。

〈地権者〉

宗教法人大松院、有限会社斎藤正工務店、市産業部農林課、上田浩久、熊谷安太郎、葛巻徳次郎、斎藤キヌ、斎藤正、沢口日出雄、附田鉄蔵、藤原孝雄

〈発掘調査〉

天沼キミエ、天沼節子、天沼芳子、天沼ヤエ、市岡治義、井上勝子、岩泉トキ、岩泉弘子、大坪富子、川村昭三、川口孔子、岸本久太、久保田広治、斎藤登、佐々木糸、佐々木敬子、佐々木静代、佐々木ツ子、佐藤ヒデ子、佐藤美智子、沢口三七三、玉沢友基、田貝キミ子、田貝恵子、高橋昭晴、高橋憲太郎、高橋貞子、田上敦子、田上スノ、田上ツカ、武田将男、竹花栄子、館沢サノ、樋下六蔵、中村スミ子、中村トメ子、中村良子、中屋敷ケイ子、畠山テツ、畠山正孝、藤原カツ子、藤原キミヨ、藤原久子、藤原フミ、藤原貞子、藤原哲子、藤原裕子、藤原亮子、藤原ヤエ、南幅千代、武蔵照子、村上クニ、村上タイ子、村上信子、村上ルリ子、柳原トモ子

Ⅲ　調　査　内　容

1　第１次調査

遺構検出状況　第１次調査区は館遺跡の西半部ほぼ中央に位置する。昭和53・54年度に計画された大松院境内の墓地拡張にともなう造成に対応した調査で、調査以前の旧状は宅地と畑地である。調査は全体の対象面積 1,600㎡のうち 144㎡を昭和53年10月に試掘調査を実施し、多量の遺構・遺物が検出された事から翌54年４月から本調査として実施したものである。遺構検出面は層厚約20cmの暗褐色を呈する耕作土及び５～10cmの床土直下で、当時の生活面である遺構掘込面は既に削平されていた。また、既存の住宅にともなうと思われる撹乱が部分的に及んでいる。

第１次調査で検出された遺構・遺物は、大きく古代・中世以降・近世にわかれ、古代の遺構の多くは中世以降の遺構に削平されており、遺構の残存は良好ではなかった。また中・近世の遺構の埋土は主に黒褐色土であり、地山である黄褐色シルト層との違いは明確であるのに対し、古代の遺構埋土は、主にシルトであり、地山シルトとの区別は容易ではなく、精査は特に住居跡かまどの赤変した焼土を手がかりに調査を進めた。

検出遺構　調査の結果、平安時代の竪穴住居跡９棟（ＲＡ 001～ 006・ 008～ 011）、竪穴１棟（ＲＦ 007）、土坑１基（ＲＤ 001）。中世以降の竪穴３棟（ＳＩ 001～ 003）、溝跡１条（ＳＤ 001）、土坑９基（ＳＫ 001～ 009）、柱列３条（ＳＡ 001～ 003）ほか柱穴多数を検出した。なお、土坑９基のうちＳＫ 009は近世（江戸時代）の墓で埋土から陶磁器・鉄製品などの副葬品が出土している。

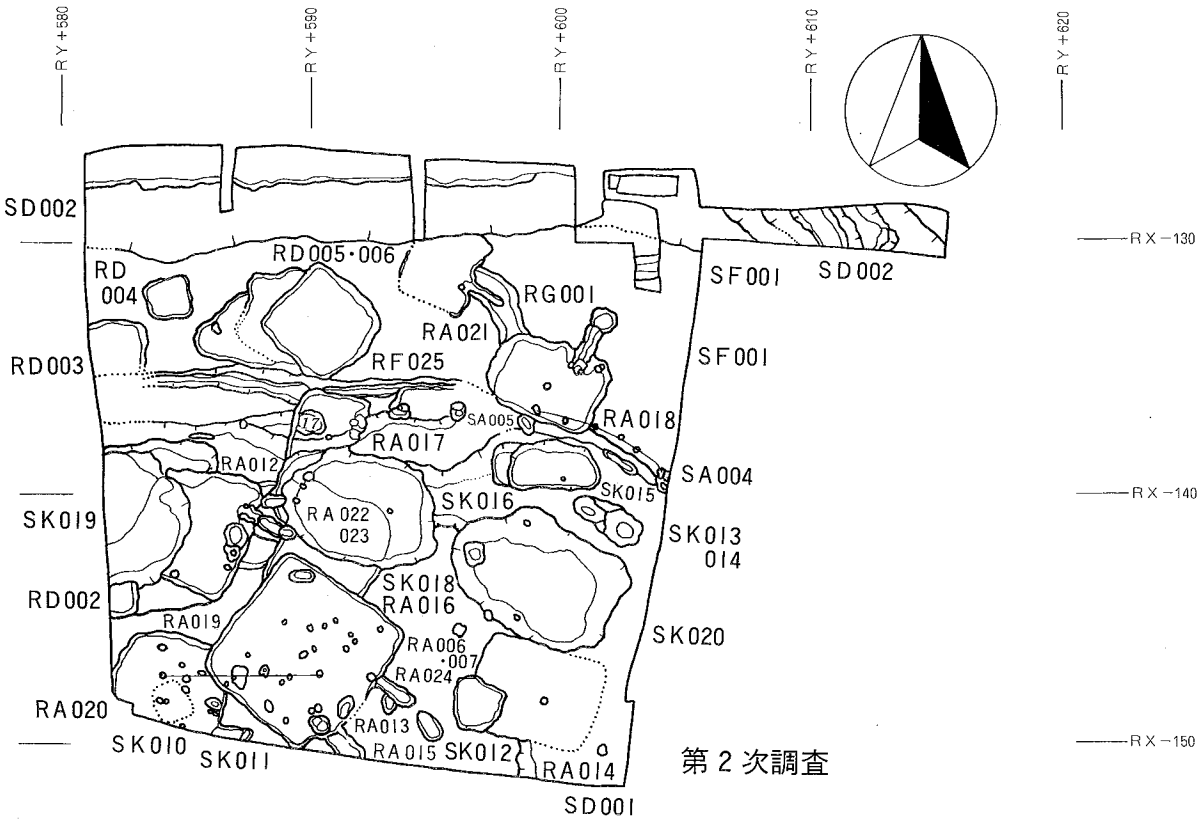
ＲＡ001・002・003竪穴住居跡（第５図）

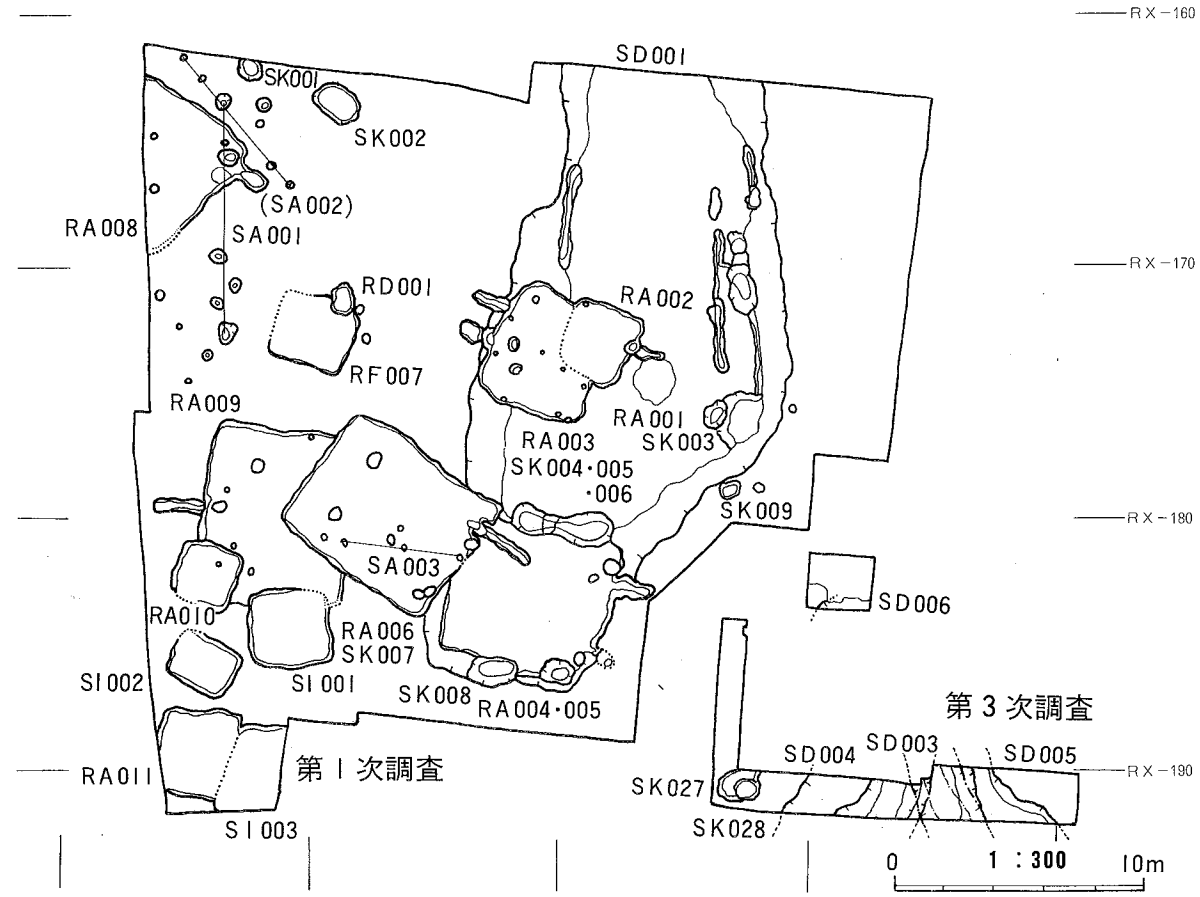
調査区中央やや東寄りに検出した３棟の竪穴住居跡で重複関係からＲＡ 001が 002を切り、さらに 002が003を切る。なお、３棟の住居跡は中世以降の溝跡であるＳＤ 001に切られている事から遺構掘込面、検出面とも大きく削平されている。以下ＲＡ 001から記述する。

ＲＡ 001は 002東壁中央に構築されるかまど煙道の南東に位置する。確認されたのは径1.70～1.84ｍの不整円形を呈する焼土の範囲で検出状況から古代の竪穴住居跡の一部と考えられるが、その詳細は不明である。出土遺物は須恵器・土師器・あかやき土器の小片がある。

規　模　ＲＡ 002は 003平面形の北東隅に重複して検出した竪穴住居跡である。平面形は、ほぼ方形を呈しており、東西2.75～2.90ｍ、南北2.85～3.12ｍをはかる。主軸方向はＥ16°０Ｓを示す。

埋　土　遺構上面はＳＤ 001に切られており残存する壁高、層厚は0.06～0.09ｍと浅い。埋土は、小粒状の黒色土をわずかに混入する暗赤褐色土で、軟質であるがしまっている。床面は、ほとんど平担で、起伏は認められない。特に堅い面はみられず、構築土もない。壁は、部分的にややゆるい傾斜となるが他は直壁に近い。なお平面形南西隅の壁は確認していない。





第４図　１・２次調査区全体図

ピットは床面北西隅に１口検出している。規模は径0.18×0.22m、床面からの深さ0.11mをはかり楕円形を呈する。埋土は住居埋土に相当する。

かまど　かまどは東壁やや北寄りに構築されている。煙道煙出しの平面形は不整形を呈し、幅0.13～0.55mをはかる。底面は焚口から煙出し方向に徐々に浅くなり、煙出しはピット状に若干凹んでいる。検出面から底面までの深さは0.06～0.17mをはかる。火床面は壁中に位置しており径0.53～0.62mの範囲で焼けている。この浸透層は厚さ0.05m程である。かまど崩壊土（Ｊ層）は暗～明褐色土シルトを粒～塊状に混入する暗褐色土でＪ$_1$層には焼土粒、Ｊ$_2$層にカーボン粒を多く含む。ともにしまりのない軟質な崩壊土である。

遺物は須恵器坏・瓶・甕、土師器坏・甕、あかやき土器坏・小形甕、長胴甕がある。床面、火床面に集中して出土しており、埋土・かまど崩壊土からの出土はわずかである。

規　模　ＲＡ003は、西壁に位置するかまど以外の竪穴平面形をＳＤ001、さらに北東隅をＲＡ002に切られる。なお、北壁中央から北寄りにも煙道が重複しており、これを切るが、本住居にともなう旧期の煙道として考えている。平面形はやや不整な方形を呈しており、規模は東西4.38～4.58m、南北4.52～4.75mをはかり、主軸方向はＷ24.5°Ｎを示す。

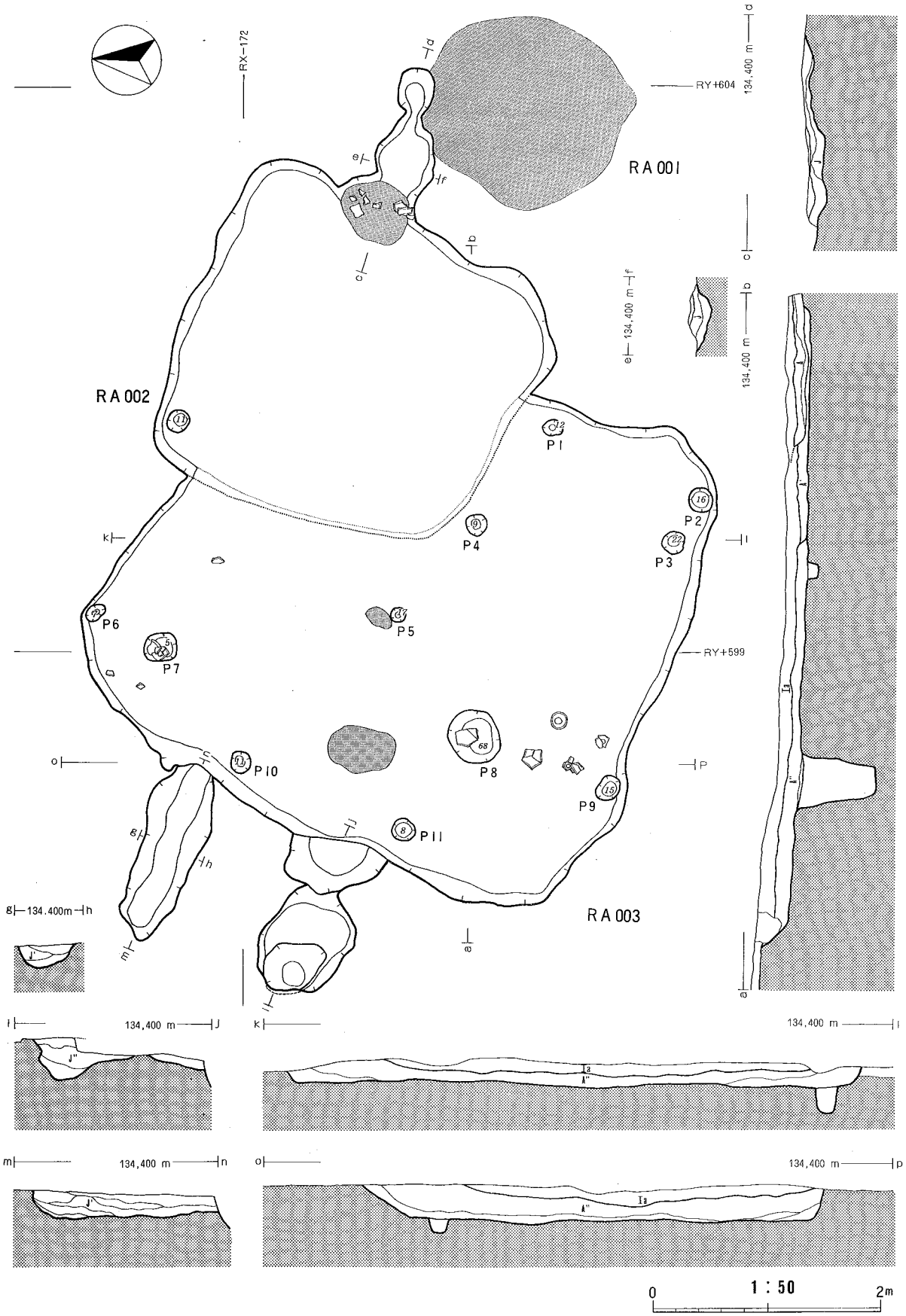
埋　土　埋土（Ａ″層）は自然堆積で黒褐色土を粒～小塊状に含む褐色～黄褐色シルトである。Ａ″$_1$・Ａ″$_2$・さらに床面直上層であるＡ″$_4$層は均一に堆積するが、Ａ″$_3$層は南壁際のみに堆積しており、細礫を多量に含む。全体にしまりがよいが、軟質である。

床は特に堅い面が検出されない。構築土はなく、シルト層下面の礫層上面をそのまま床としているが、全体にほぼ平坦である。検出面から床面までの深さは、ＳＤ001底面のため傾斜しており、0.09～0.31mをはかる。

ピット　ピットは床面上に11口（Ｐ$_1$～Ｐ$_{11}$）検出している。それぞれの径と床面からの深さは、Ｐ$_1$－0.18m・0.12m、Ｐ$_2$－0.22m・0.16m、Ｐ$_3$－0.19m・0.22m、Ｐ$_4$0.18m・0.09m、Ｐ$_5$－0.13m・0.17m、Ｐ$_6$－0.16m・0.17m、Ｐ$_7$－0.34～0.36m・0.05m、Ｐ$_8$－0.43～0.46m・0.68m、Ｐ$_9$－0.18～0.24m・0.15m、Ｐ$_{10}$－0.18m・0.11m、Ｐ$_{11}$－0.20m・0.08mをはかり、平面形は円形～楕円形を呈する。なお、土層断面の観察により本住居に伴う事が確認されたのはＰ$_3$・Ｐ$_4$・Ｐ$_8$・Ｐ$_{11}$だけで、他のピットは床面上で検出しているがその共伴関係は明らかではない。また、これらのピットのうち主柱穴となり得る規模のピットはＰ$_8$のみで他の小ピットについては性格不明である。埋土は住居埋土と近似し、黄褐色シルトを主体とする。

かまど　かまどは新旧２時期あり、新期のかまどは西壁ほぼ中央に位置する。煙道の平面形は、土坑を連ねたような不整形を呈しており、西壁から煙出しまでの長さ1.52m、幅0.30～0.82mをはかる。また底面は焚口から煙道にむかって徐々に浅くなるが平面形狭窄部を境としてピット状の煙出しへと深くなる。検出面から煙道底面までの深さは0.08m、煙出し最深部までは0.37mをはかる。かまどそでは残存していない。火床面は煙道延長上の壁内床面上に検出している。平面形は楕円形を呈し、径0.40～0.60mをはかる。なお、この東側床面上にも0.15～0.25mの楕円形の範囲に焼けた面が検出されているが性格は不明である。かまど崩壊土（Ｊ″層）は、褐色シルト塊をやや多く含む暗褐色シルトで微量のカーボンを含んでいる。

旧期のかまどは、西壁中央北寄りに位置する。平面形は溝状を呈している。規模は、西壁から煙出し端までの長さ1.62m、幅0.40～0.59mをはかる。底面は壁際から煙出しにむかってゆ



第５図　ＲＡ001・002・003竪穴住居跡

るやかに傾斜し深くなるが、平坦な面が続き煙出し様のピットは認められない。検出面から底面までの深さは0.14～0.23mをはかる。なお、このかまどにともなうそで、火床面は残存していない。かまど崩壊土（J′層）は焼土粒を相当量含む褐色～暗褐色シルトで新期かまどの崩壊土に比べて若干堅くしまっている。

遺　物　出土した遺物のうち土器の器種には須恵器坏・甕、土師器坏・甕・鉢、あかやき土器坏・高台付坏・小形甕があり、床面上から多く出土している。埋土中及び煙道からはわずかである。また、床面と埋土から刀子が各1点出土しているほか、同じく床面から3点の砥石が出土している。

ＲＡ004・005竪穴住居跡（第6図）

調査区南東に位置する竪穴住居跡である。遺構検出面は中世以降の溝跡であるＳＤ001底面の黄褐色シルト中位～小礫層上面で、さらに北壁中央を馬骨が出土したＳＫ004・005・006、南壁中央をＳＫ008、さらに北西隅をＲＡ006に切られる。本住居跡は東壁に2基のかまどをもち、さらに南壁に段差が認められた事から2時期の重複があると考えられたが、その新旧は明確ではなく、1棟の住居の中でのかまどの造り変えか共存とも考えられるものである。

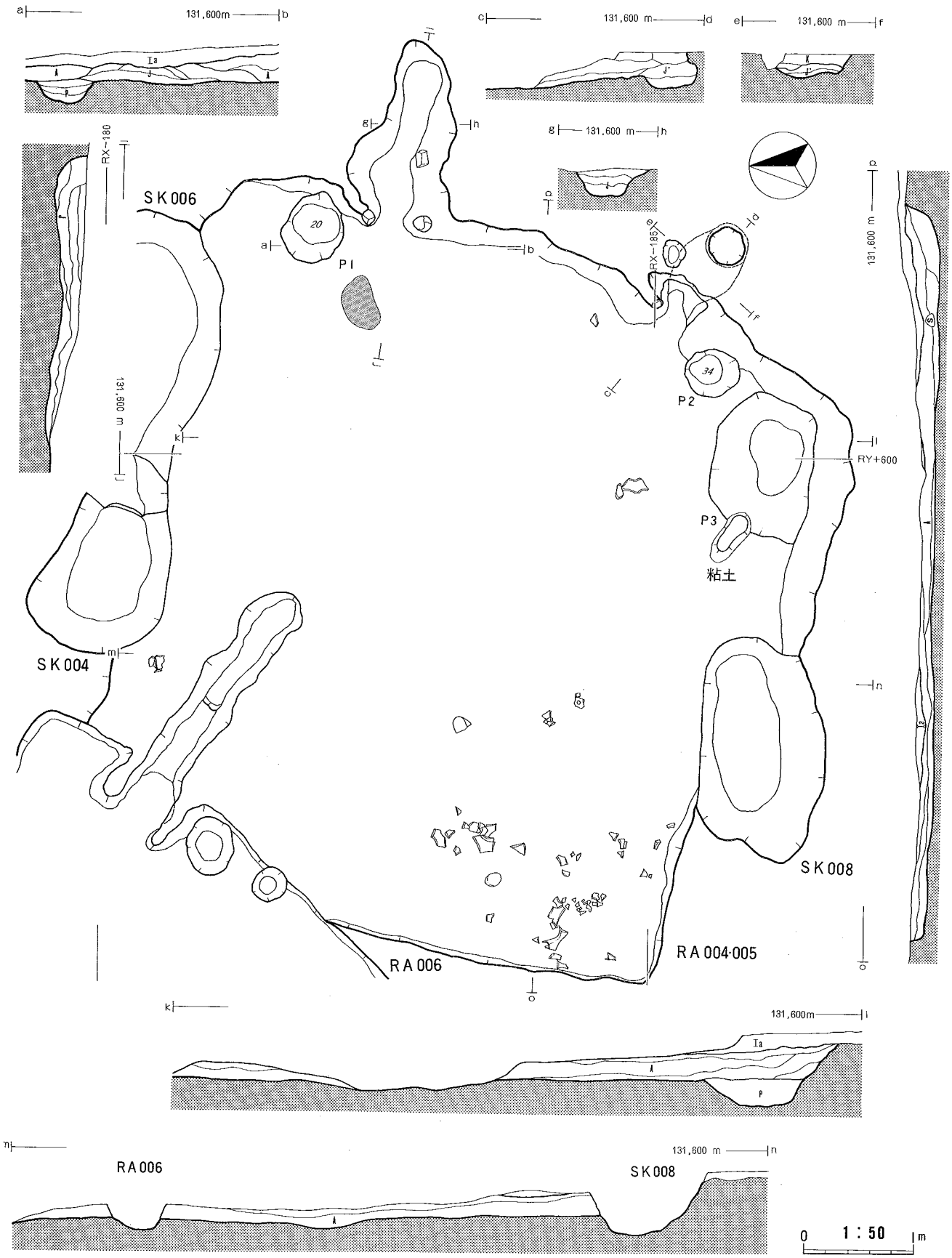
規　模　平面形は南東隅に張り出しをもつがほぼ方形を呈し、規模は東西5.40～6.50m、南北5.46～6.42m以上をはかる。主軸方向は東壁北寄りのかまどを主軸とした場合E11.5°S、東壁南寄りでE39.5°Sを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で、褐色シルトを粉～粒状で多量に混入する暗褐色～黄褐色シルトを主体としている。床面直上のA_3層は塊状の砂質シルトをやや多く含み、壁際のA_4層は一部焼土を含むが黄褐色シルトの塊が多く含まれる。全体にカーボンを含み、堅くしまっている。

床面はほぼ平坦で起伏はない。また特に堅い部分は認められず、構築土のないシルト層下面～小礫層上面をそのまま床としている。北壁と床の一部はＳＤ001により削平されるが、その他の壁の立ち上がりは、南壁の段差を境として南西が直壁、南東から東壁にかけてはゆるやかな傾斜となる。検出面から床面までの深さ及び残存壁高は0.10～0.26mをはかる。

かまど　かまどは東壁中央から北寄りと南寄りに検出している。北寄りのかまど煙道の平面形は不整な溝状を呈する。やや起伏のある底面は焚口から煙道中央にかけて浅くなり、これを境として煙出し先端に向って若干深くなる。なお煙出しはピット状を呈していない。規模は、東壁から煙出し先端まで1.49m、幅0.48～0.85m、検出面から底面までの深さ0.14～0.28mをはかる。そでは煙道の取り付き部分に自然円礫を使用した1対のそで石が残存するのみである。また、火床面と思われる焼土面が壁内に検出されている。平面形は0.39×0.51mの不整円形を呈する。かまど崩壊土（J層）は、カーボンをわずかに含む焼土と褐色～暗褐色シルトの塊～層状の混合土で、壁内の火床面上面まで覆っている。

東壁中央から南寄りに検出したかまどは煙道天井部が残存している。底面は壁内から徐々に浅くなる。煙出しはピット状に深くなり、オーバーハングする。なお、煙道天井部が残存するが、刳り貫きによるものではなく煙道構築後かぶせたものである。規模は東壁から煙出し先端までの長さ0.68m、幅0.35～0.57m、検出面から底面までの深さ0.23～0.33mをはかる。煙道取り付き部分の北壁にそでに使用されたとみられる自然円礫があるが、他はその痕跡とも認め



第6図　RA004・005竪穴住居跡

られない。かまど崩壊土（J′層）はJ層と似る埋土で住居内への流入も認められる事から 2 期共存の可能性もあるが、かまどにともなうとみられる火床面の存在から北側のかまどがやや新しいことも指摘できる。 なお、煙道J′層上層の天井構築土は黒褐色土を若干含む粘質の黄褐色シルトである。

ピット　ピットは床面上に3口（P_1～P_3）検出している。このうち貯蔵穴と考えられるのは北東に検出したP_1と南東に検出したP_3で、P_2は形態・規模から柱穴とも考えられるが、かまどに近く性格は不明である。 いずれも不整円形を呈し、P_1は径0.53×0.66m、 深さ0.20mをはかる。P_2は径0.42×0.50m、深さ0.34m。 P_3が径0.92×1.40m、深さ0.25mをはかる。埋土ははともに住居埋土と似る。なおP_3西側から床面にかけて灰白色と橙色を呈する粘土塊が検出されている。

遺　物　出土した遺物のうち土器の器種には須恵器坏・高台付坏・瓶・壺・甕、土師器坏・甕、あかやき土器坏・小形甕があり、床面および北側のかまど崩壊土から多量に出土している。鉄器は、床面から鏃・刀子が各1点、埋土から板状製品2点のほか形態不明品が2点出土している。また、砥石が床面から1点出土している。

ＲＡ006竪穴住居跡（第７図）

調査区南半中央に検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複関係は、北東からかまどにかけてＳＤ001に切られ、ＲＡ004・005を切る。さらに、中央南側をＳＡ003・ＳＫ007に切られ、南西隅がＲＡ009を切る。なお、遺構検出面はＳＤ001と重複しない部分にあっては耕作土直下の黄褐色シルト層上面であるが、重複する他の遺構の埋土に対して006埋土はやや砂質土で比較的容易に検出できた。

平面形は長方形を呈しており、 竪穴規模は、東西6.84～7.10m、南北5.47～5.79mをはかり、主軸方向はN34.0°Eを示す。

埋　土　埋土は自然堆積でA_3層に粉～粒状の暗褐色土がわずかに含まれるほかは、ほとんど混入土を含まない黒褐色～暗褐色シルトでA_1・A_3層がやや堅いほか特徴は認められない。床面には後述する4口の主柱穴が検出されているが、この柱穴に囲まれた内部からかまどの位置する北東にかけてやや堅い面が認められた。またこれから南東隅にかけてこれより堅い部分が認められ、堅い床には部分的に焼けた面がある。なお、この周囲の床面は地山の小砂礫層上面が部分的にあらわれているが全体にやわらかい。床面はほぼ平坦である。構築土（B層）は平面形南半の一部のみに認められ、構築面は若干起伏があるが平坦である。壁は比較的残存状態が良く、ほぼ直壁である。検出面から床面までの深さは0.13～0,32mをはかる。

ピット　ピットは床面上に14口検出しているが、このうち本住居に伴うのは5口（P_1～P_5）で、他は埋土を掘り込むピットである。P_1～P_5 はいずれもほぼ円形を呈しており、それぞれの径と床面からの深さはP_1－0.42～0.53m・0.30m、P_2－0.34～0.44m・0.26m、P_3－0.53～0.61m・0.40m、P_4－0.43～0.52m・0.34m、 $P_5$0.33～0.47m、0.17mをはかる。埋土は暗褐色～黒褐色土を主体とする埋土で砂礫を多量に含む。なお、埋土中央には黒色土が検出されたものもあり柱痕跡の可能性もあるが判然としない。これらピットのうち規模からP_1～P_4が主柱穴を構成するものと考えられる。

第７図　ＲＡ006竪穴住居跡

かまど　かまどは東壁北隅に構築されている。煙道平面形は溝状を呈しており、底面は煙出し部分が若干深くなる。規模は東壁から、煙出し先端まで2.02m、0.36～0.43m、検出面からの深さ0.12～0.22mをはかる。そでは黄褐色シルトを主体とした粘質の構築土（K層）と自然円～角礫を併用して構築されている。残存するそでの規模は北そでが長さ0.57m、幅0.18～0.28m。南そでが長さ0.60m、幅0.18～0.24mをはかる。火床面はこのそでに囲まれた壁内に楕円形の範囲に認められる。支脚は火床面東端に土師器甕の体部下半～底部を伏せて用いている。また、火床面下面にはかまど地業（L層）があり、焼土粒を混入する暗褐色シルトを埋土としている。

遺　物　出土した土器の器種は須恵器坏・高台付坏・瓶・甕、土師器坏・鉢・甕、あかやき土器坏・高台付坏・小形甕があり、かまど周辺の床面と埋土から多量に出土している。鉄器は床面中央付近から鏃3点、刀子3点、不明製品1点のほか鉄滓が出土している。

ＲＦ007竪穴（第8図）

調査区西半北寄りに検出した竪穴で検出面は砂質の黄褐色シルト層上面である。重複関係は北東隅に検出したＲＤ001を切る。北西隅は削平されており、床西半中央は撹乱されている。

平面形は北東隅がやや不整であるがほぼ方形を呈し、規模は東西3.04～3.22m、南北2.72～

埋　土　3.40mをはかる。埋土は自然堆積で混入土をはとんど含まない暗～明褐色シルトでやや堅くしまっている。

床面は堅くなく、ほぼ平坦である。また、床構築土はなく、地山のシルト層中位をそのまま床面としている。残存する壁はほぼ直壁である。検出面から床面までの深さは0.04～0.09mをはかる。

遺　物　出土した土器は床面北西からヘラ切無調整の須恵器坏があるほか、埋土から土師器坏・甕、あかやき土器坏がある。

ＲＤ001土坑（第8図）

ＲＦ007の北壁東側に重複して検出した土坑で007に切られる。平面形は不整円形を呈しており、規模は上端長軸1.25m、短軸0.90m、下端長軸1.01m、短軸0.74m、また、検出面からの深さは0.17mをはかり、007床面より0.09m深く構築している。底面は起伏があり一定せず、壁の立ち上がりも不規則である。

規　模

埋　土　埋土は自然堆積で暗褐色シルトを粒～塊状に混入する黒褐色シルトで、部分的にカーボン層が認められる。なお、最上層は堅くしまりがよい。

遺　物　遺物は埋土からヘラ切無調整の須恵器坏が出土している。

ＲＡ008竪穴住居跡（第9図）

調査区北西隅に位置する竪穴住居跡である。遺構検出面は耕作土直下の黄褐色シルト層上面で、遺構埋土もこれに似るが、地山層のシルトが砂質でやや暗褐色っぽいのに対し、埋土は粘性があり、やや強く明るい黄褐色シルトである。重複関係は北東隅を南北方向のＳＡ001及び小柱穴に切られる。また南端は撹乱されている。

規　模　平面形の西半は調査区外に広がっており、全体形は明確ではないが方形～長方形を呈するも

のと思われる。規模は東西4.90m以上、南北4.10m以上をはかり、主軸方向はE36.0°Sを示す。

埋土（A層）は自然堆積で、褐色シルトをやや多く含む黒褐色～黄褐色シルトで、最下層のA_3層は黒褐色土粒の混入が多く、A_1・A_2層が堅くしまっているのに対して軟かくしまりのない土質である。なおA_2層にはカーボン粒、A_3層には礫を含む。 **埋　土**

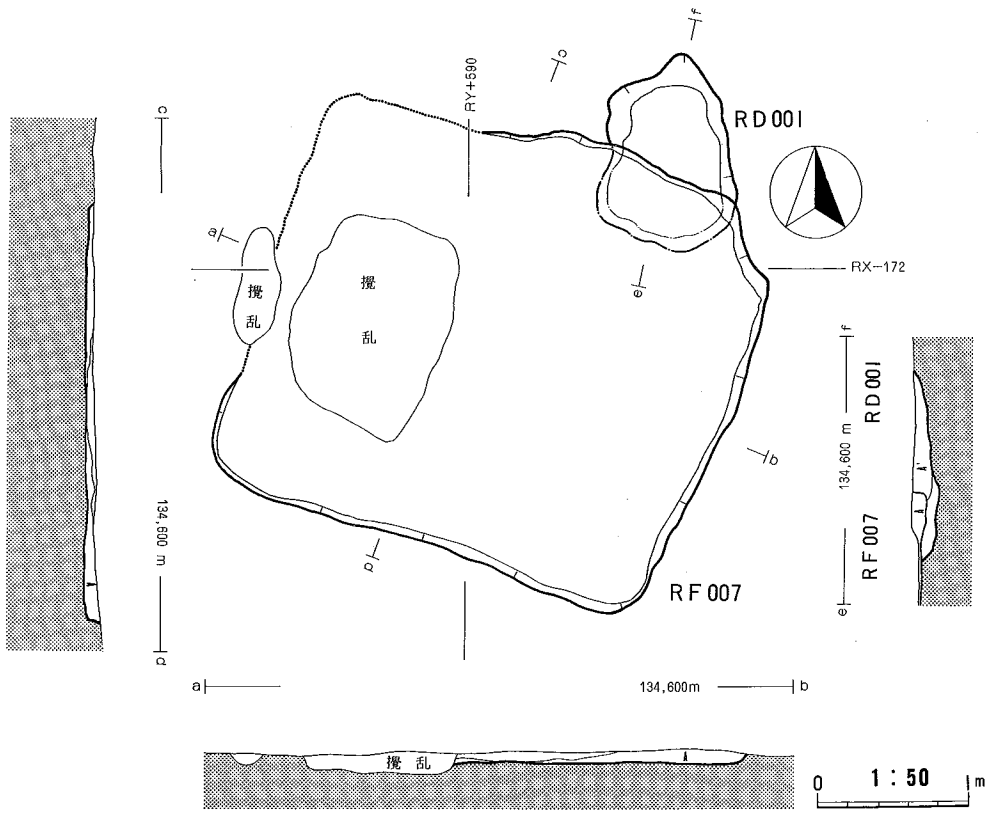
床面は若干の起伏があるがほぼ平坦で堅い部分は認められない。構築土はなく、部分的に黄褐色シルト層下面の小礫層が露出する面をそのまま床としている。壁の立ち上がりは均一しておりほぼ直壁である。検出面から床面までの深さは0.13～0.24mをはかる。

かまどは東壁北隅に構築されている。煙道平面形は卵形を呈する。底面はわずかに煙出し先端方向に深くなるが、ほぼ平坦である。規模は、東壁から煙出し先端まで1.37m、幅0.55～0.75m、検出面から底面までの深さは0.19～0.24mをはかる。なお、煙出し底面は砂質シルトで、火熱をうけて割れた自然礫が多量に検出された。この礫はかまど施設を構築していたと考えられる。そでは残存しておらず、その痕跡も認められない。火床面は、煙道延長上からやや北寄りの壁内に径0.63～0.83mの楕円形の範囲に認められた。なお、この火床面は床面から若干凹んでおり、浸透層は薄い。かまど崩壊土（J層）は焼土を粒～塊状に若干混入する暗褐色シルトで、J_1層にはカーボン、J_2・J_3層には礫を多く含む。 **かまど**

出土した土器には須恵器坏・高台付坏・甕、土師器坏・甕、あかやき土器甕があり、いずれも埋土中からの出土である。 **遺　物**

ＲＡ009竪穴住居跡（第10図）

調査区南半西側に検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複関係は中世以降の竪穴であるＳＩ001に切られ、さらに平安時代の遺構ＲＡ006・010に切られる。遺構検出にあたって遺構の重複していない北壁は比較的容易に確認できたが、西壁付近はシルト粒状土が強く遺構の検

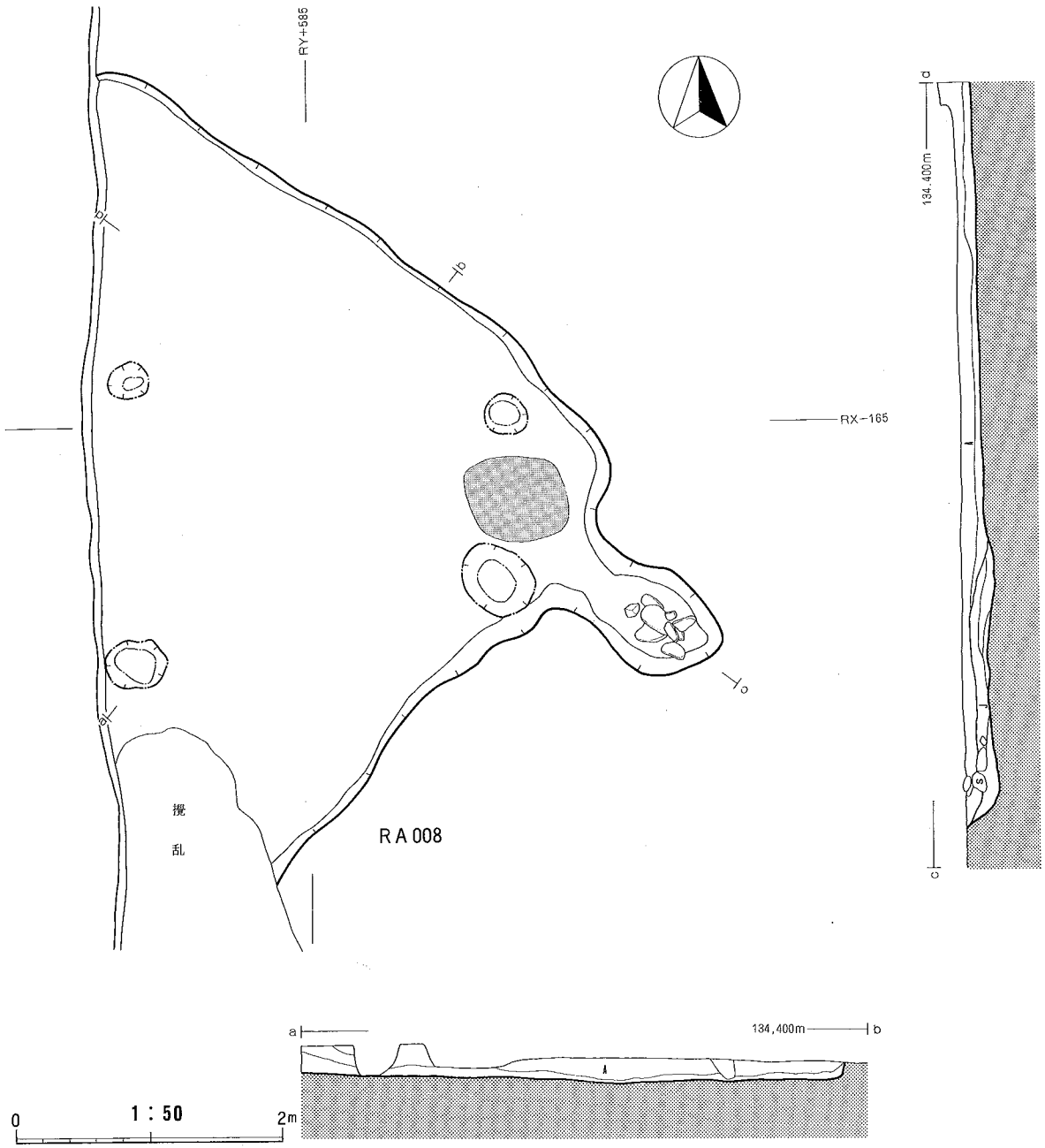


第８図　ＲＦ007竪穴、ＲＤ001土坑

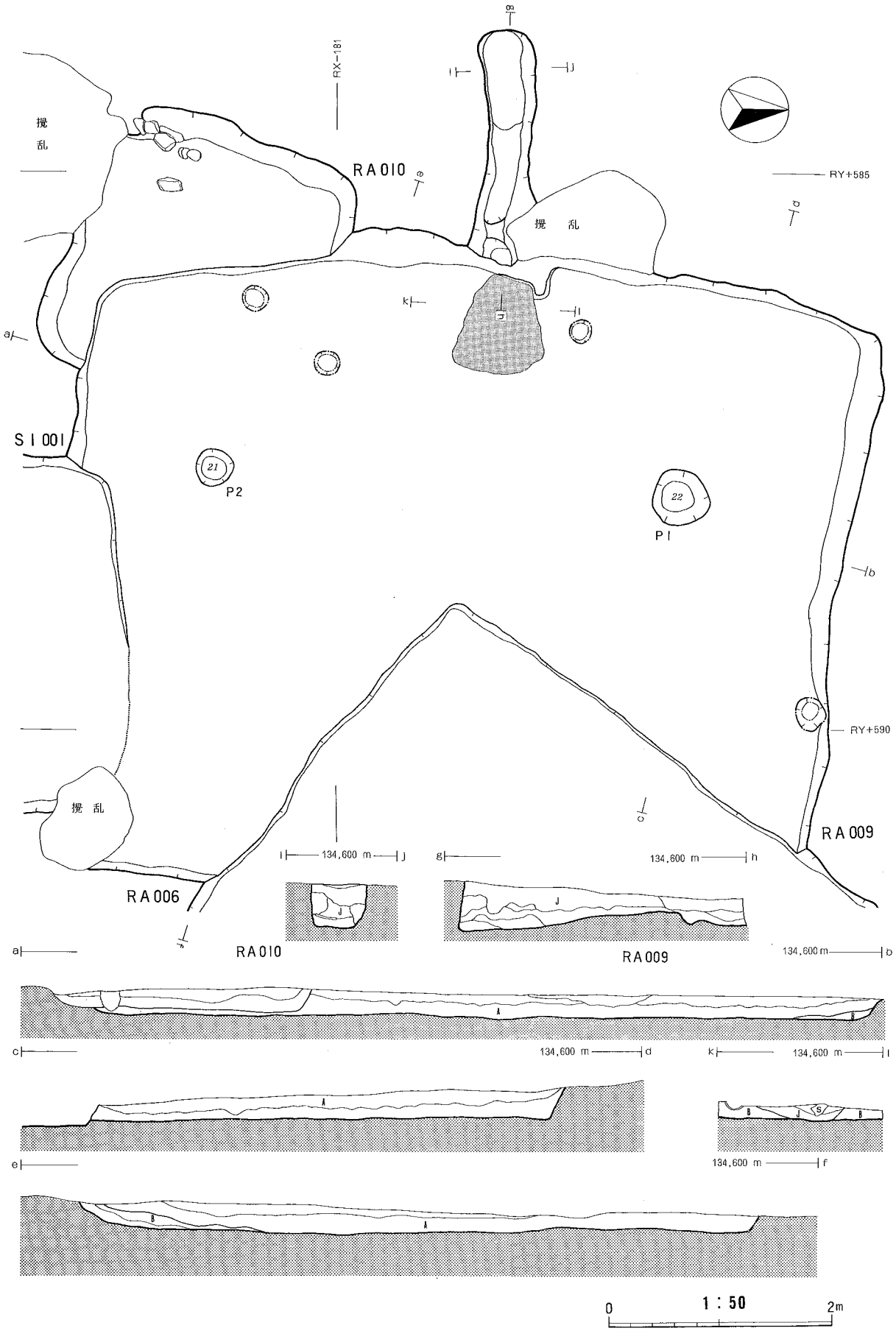
規　模　出は困難であった。竪穴平面形はやや南北に長軸をもつ長方形を呈する。規模は、東西5.92～6.00m、南北7.03～7.12mをはかり、主軸方向はW4.5°Nを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりA・B層にわかれる。A層は黒褐色土をやや多く、暗褐色土粒を微量に混入する軟質の褐色～黄褐色シルトである。B層は西壁際のみに部分的に堆積する埋土で、暗褐色土粒を微量に混入する軟質の黄褐色砂質土である。

床面は構築土をもたず、地山である黄褐色シルトの砂質シルトをそのまま床とする。また、床面はほぼ平坦で、堅い面はかまど周辺のみに限られ、他はしまりがない。壁は東西壁がほぼ直壁であるのに対し北壁はゆるやかな傾斜である。検出面からの深さは0.14～0.25mをはかる。



第9図　ＲＡ008竪穴住居跡



第10図　ＲＡ009竪穴住居跡

かまど　かまどは西壁ほぼ中央に位置する。煙道の一部を撹乱されているが、平面形は溝状を呈し、底面は、煙出し方向にむかって徐々に深くなる。煙道規模は、西壁から煙出し先端までの長さ2.10m、幅0.38～0.50m、検出面からの深さ0.13～0.45mをはかる。そで（K層）は北側だけが検出されたが、南側はその痕跡も残していない。残存する北そでの規模は長さ0.30m、幅0.15m内外で上面はかなり削平されている。火床面は煙道延長上からやや北寄りの壁内に位置し、平面形は台形を呈する。範囲は長軸0.90m、短軸0.40～0.80mで、この中央が特に焼けている。かまど崩壊土（J層）は下層ほど焼土の混入が多く、全体に暗褐色を呈する埋土となっている。また、J_3、J_4層は堅くしまっているが、他の層は軟かくしまりがない。なお煙道底面は焼けておらず、煙出し底面は砂礫層である。

ピット　ピットは床面上に6口検出しているが、このうち2口（P_1・P_2）が本住居にともなう柱穴である。いずれも円形を呈し、規模はP_1の径0.50m、深さ0.22m、P_2が径0.35m、深さ0.21mをはかる。埋土は住居埋土A層に相当する。

遺　物　出土した土器の多くは火床面から南西床面上に集中しており煙道内を含む埋土中からは多くない。器種には須恵器坏・瓶・甕、土師器坏・甕、あかやき土器坏・甕がある。鉄器、砥石の出土はない。

RA010竪穴住居跡（第11図）

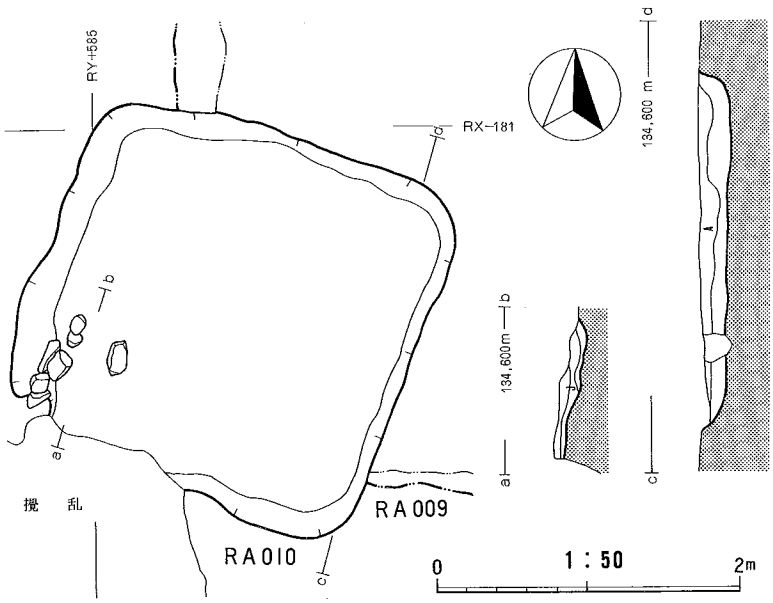
調査区南西に位置し、RA009平面形の北西隅を切る竪穴住居跡である。平面形はほぼ方形を呈しており、規模は東西2.48～2.53m、南北2.40～2.49mをはかり、主軸方向はS22.0°Wを

埋　土　示す。埋土は自然堆土でA_1層が褐色土粒をやや多く混入する暗褐色シルト、A_2層が黒褐色土塊をやや多く混入する暗褐色～黄褐色シルトである。床はほぼ平坦でさほど堅くなく構築土はない。壁はゆるやかな立ち上がりである。検出面からの深さは、0.15～0.24mをはかる。

かまど　かまどは、南壁西寄りに位置するが、煙道及び煙出しは撹乱されている。そでは西側のみが残存している。このそでは自然円礫と焼土を含むシルトで構築されている。規模は、長さ0.50m、幅0.20m程である。

遺　物　出土した土器は床面及びかまど周辺に集中して土師器高台付坏・小形甕、あかやき土器坏・甕があり、そのほか埋土中から須恵器甕、土師器坏が出土した。

鉄器及び砥石の出土はない。



第11図　RA010竪穴住居跡

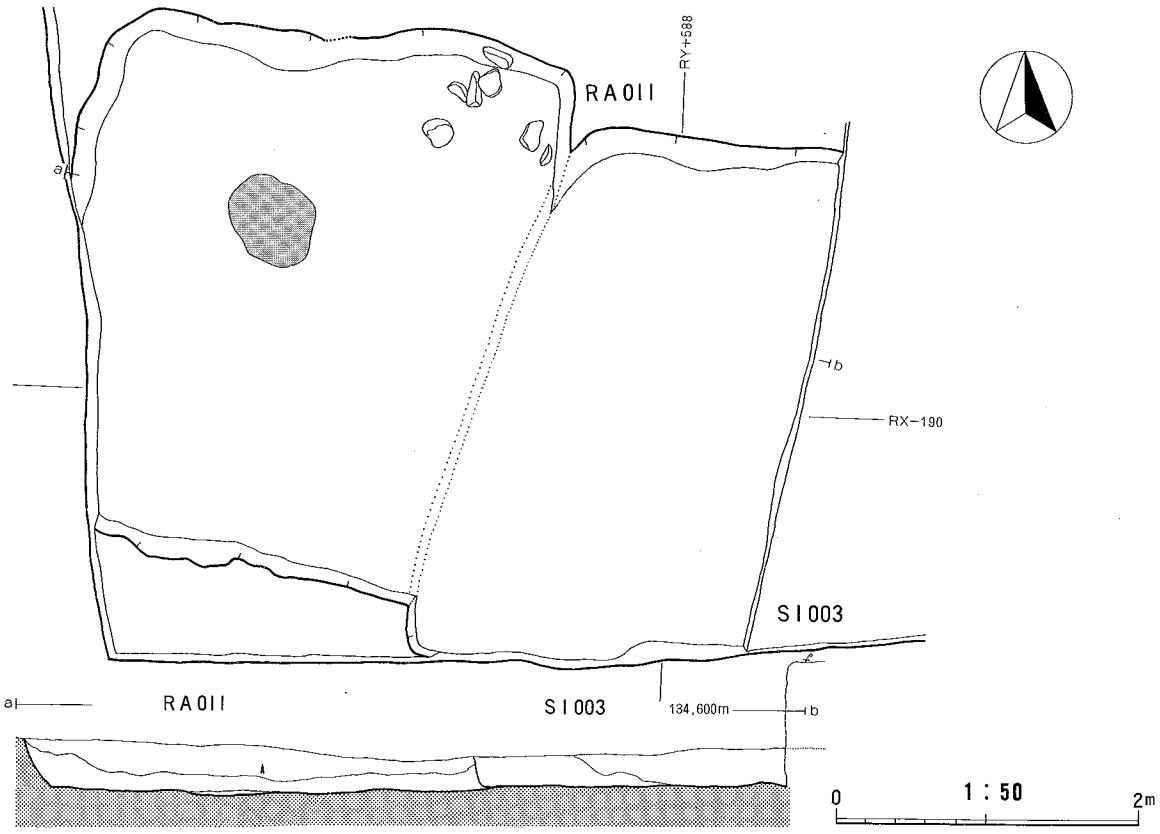
ＲＡ011竪穴住居跡（第12図）

調査区南西隅に位置する。重複関係は東壁の大半を中世以降のＳＩ003に切られる。また、西壁の南半部は調査区外に広がる。平面形はやや不整な方形を呈し、規模は東西3.15～3.20m、南北2.52～3.75mをはかる。主軸方向は東壁に構築されていたと思われるかまどが失なわれているため明確ではないが竪穴方向からおよそE8.5°～10°Sを示す。 **規　模**

埋土は自然堆積で、褐色～黄褐色シルトを主体とする。床面は南半中央から北側にむかってやや深く傾斜するが、平坦である。また、構築土はなくシルト層中位～下面を床としている。床面中央から北西には地床炉とみられる焼けた範囲が認められた。平面形は不整な楕円形を呈しており、長軸0.66m、短軸0.53mをはかる。なお浸透層は精査していない。壁の立ち上がりは検出された各辺とも不整で、特に北壁中央を境として東半と西半とでは若干のくい違いの段差を生じている。検出面から床面までの深さは0.20～0.32mをはかる。 **埋　土**

かまどはＳＩ003により削平され不明であるが、そで構築に使用されたと思われる焼けた自然円礫が床面に散乱しており、東壁北寄りに位置していたと思われる。なお、この検出されたた自然石は、長さ0.15～0.25m、幅0.05～0.21m程の円礫である。 **かまど**

出土した土器は床面から須恵器坏・甕、土師器坏・甕、あかやき土器坏・小形甕があり、埋土中からも同様の器種が出土しているが、図示できるものは少なく、細片が多い。鉄器・砥石等他の遺物の出土はない。 **遺　物**



第12図　ＲＡ011竪穴住居跡

2　第２次調査

調査区は館遺跡の北西部で１次調査区から10.3～11.7ｍ北側に位置する。調査は１次調査同様、大松院墓地拡張にともなう造成に先行して調査したもので、昭和56年に申請され、翌年４月に564㎡を対象として実施した。なお、調査前の地目は宅地と畑地で、１次の調査成果と遺物の散分状況から重機によって表土を除去した。遺構検出面は層厚約20cmの耕作土及び５～10 10cm厚の水田床土直下で黄褐色シルト上面である。遺構の掘込面は大きく削平されているが住宅基礎などの大きな撹乱ない。

検出遺構　検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡13棟（ＲＡ012～024）、竪穴１棟（ＲＦ025）、土坑５基（ＲＤ002～006）。中世以降の堀・溝跡２条（ＳＤ001・002）、土塁１条（ＳＦ001）、土坑11基（ＳＫ010～020）ほか柱穴多数である。なお、古代の遺構はそのほとんどが中世以降の遺構に削平されているため、遺存状況は良くない。

ＲＡ012竪穴住居跡（第13図）

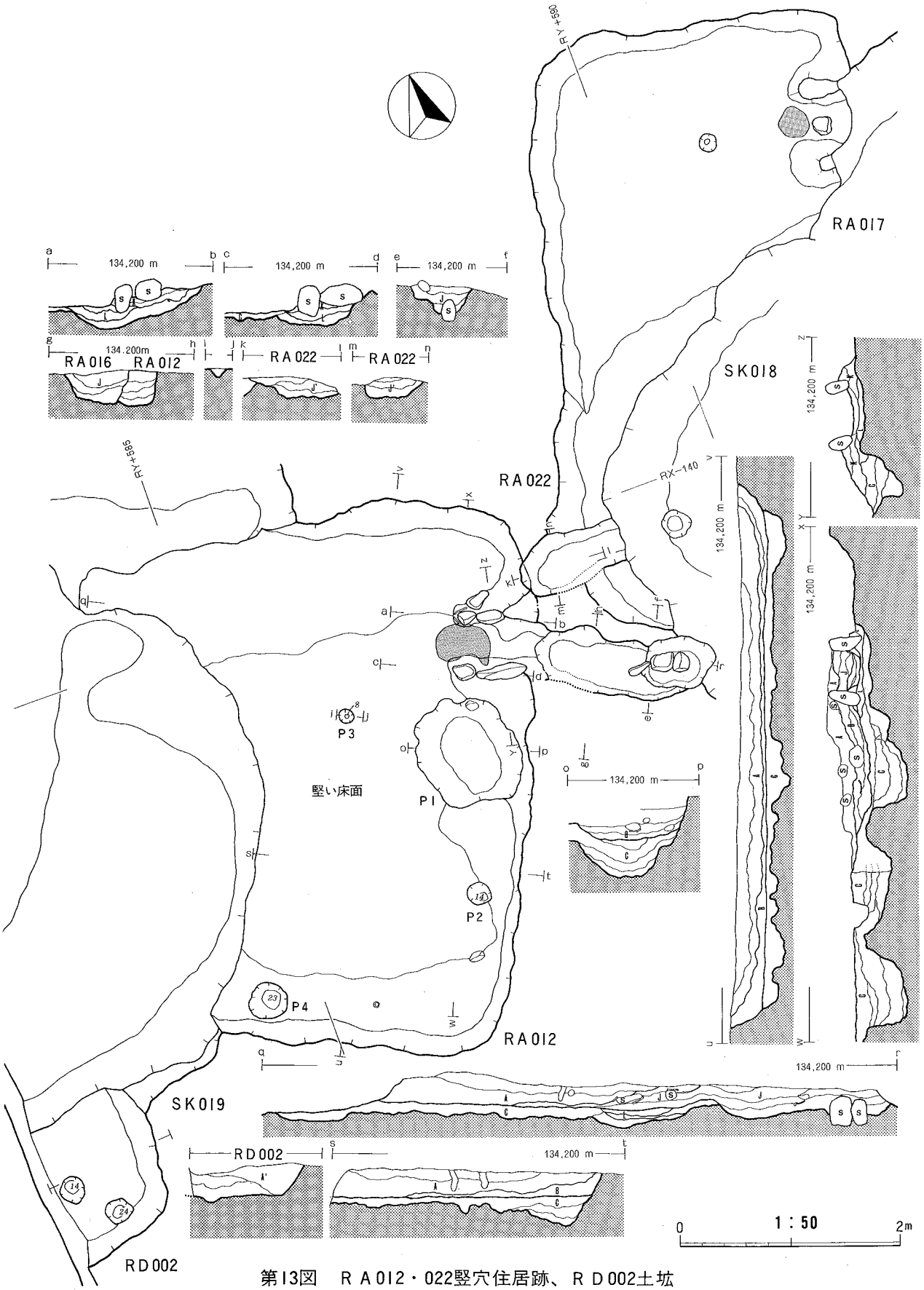
調査区西半中央に検出した竪穴住居跡で、他の遺構との重複関係は、平面形西半をＳＫ019、東壁北東隅をＲＡ022、煙出し先端をＳＫ018に切られ、同じく東壁がＲＡ016・023を切り、さらに南壁がＲＡ019を切る。

規　模　平面形は方形ないし長方形を呈すると認められる。規模は東西4.10ｍ以上、南北4.65～5.02ｍをはかり、主軸方向はＥ26.0°Ｓを示す。

埋　土　埋土は、自然堆積で層相の違いによりＡ・Ｂの２層に大別される。Ａ層は、暗褐色土粉～粒をわずかに混入する褐色シルト。Ｂ層が暗褐色土粒を若干混入する褐色シルトでともに堅くしまっているが、Ａ層が特に顕著である。床面はほぼ平坦であり、中央部が堅くなっている。構築土（Ｃ層）は暗褐色土粒～塊を微量に混入する黄褐色シルトでかなり起伏があり、部分的に土坑状に掘り込む構築面に敷きつめている。検出面から床面までの深さは0.22～0.26ｍ、構築土の厚さは0.03～0.46ｍをはかる。壁の立ち上がりはややゆるやかな傾斜となっている。

ピット　ピットは床面上に３口（P_1～P_3）検出しており、このうちP_1は貯蔵穴とみられる。P_1は楕円形を呈し、長軸1.00ｍ、短軸0.92ｍ、深さ0.15ｍをはかる。埋土はＢ層に相当する。P_2・P_3はともに円形を呈し、規模はP_2一径0.22ｍ、深さ0.14ｍ。P_3一径0.13ｍ、深さ0.08ｍ。P_4一径0.36ｍ、深さ0.23ｍはかる。ともにＢ層に近似する。

かまど　かまどは東壁北隅に構築されている。煙道は長い構造で先端はＳＫ018に切られる。平面形は不整な溝状を呈し、底面は煙出しと煙道との境が浅くなり区画される。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.68ｍ、幅0.48～0.55ｍ、検出面からの深さ0.18～0.28ｍをはかる。そでは両側とも良く残存しており、この構築土（Ｋ層）は黄褐色シルトと自然礫で構築されている。規模は北そでの長さ0.66ｍ、幅0.25～0.50ｍ。南そでが長さ0.75ｍ、幅0.40～0.62ｍをはかる。火床面はこの両そでに囲まれた内側に径0.30×0.50ｍの円形の範囲にあり、この下面にはかまど地業土（Ｌ層）が敷かれている。この地業土は床構築土を切っており厚さは0.09ｍをはかる。



第13図　ＲＡ012・022竪穴住居跡、ＲＤ002土坑

土　器　土器は床面から土師器坏・甕、あかやき土器坏・甕、さらに南壁際から手づくねの小形土器がある。また南そで構築土中には土師器とあかやき土器の坏と甕の破片が含まれ、床構築土にもこれらの器種のほか須恵器坏・甕の小片が含まれている。埋土中からはＪ・Ａ層に対してＢ層からの出土頻度が高く、土師器高台付坏・鉢がある。鉄器等の他の遺物は出土していない。

ＲＡ013竪穴住居跡（第14図）

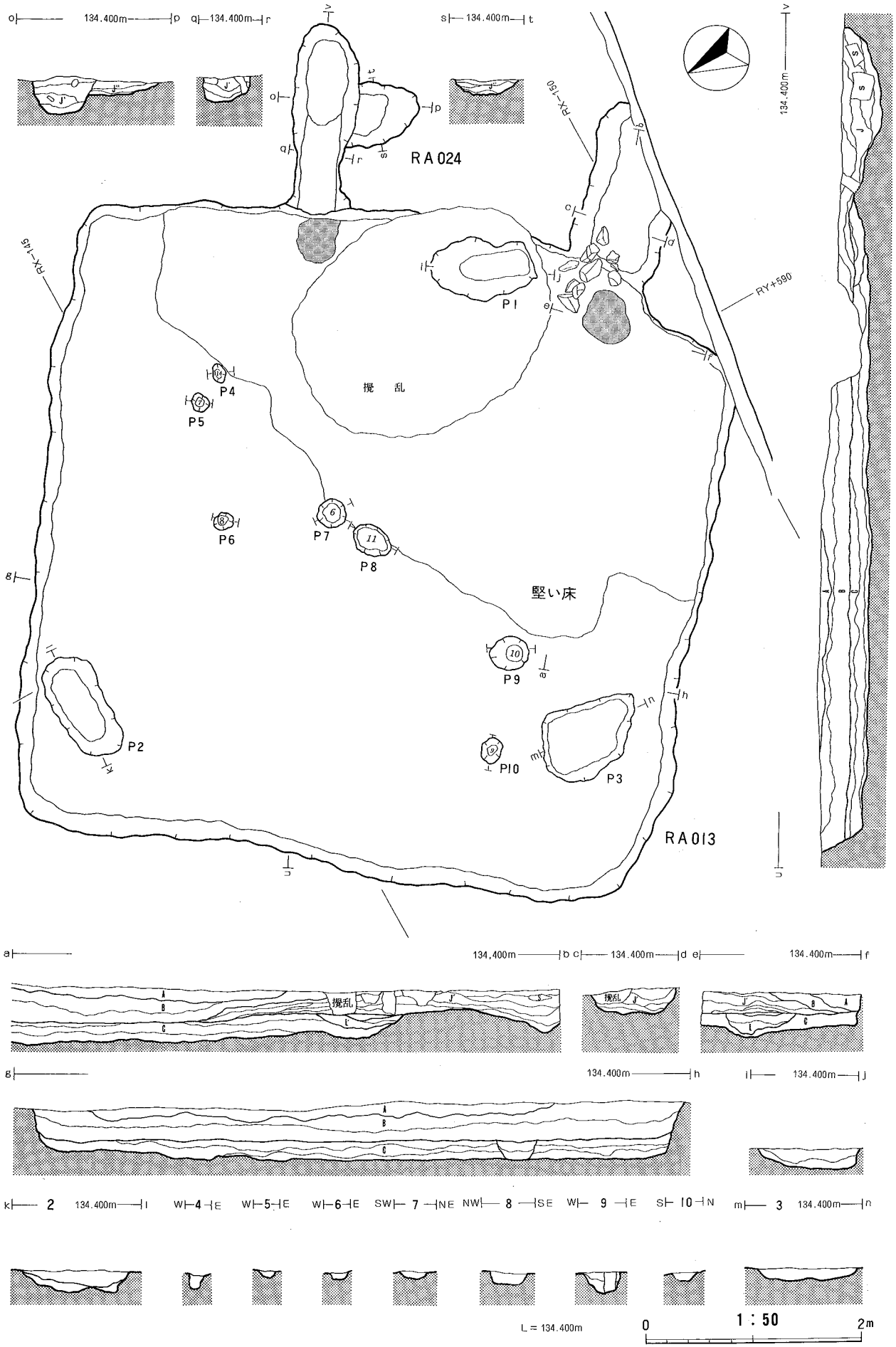
規　模　調査区南辺中央からやや西寄りに検出した。他の遺構との重複関係はＳＡ006・007と小柱穴に切られ、ＲＡ016・020・023・024を切る。平面形はやや不整な方形を呈し、規模は、東西5.90～6.05ｍ、南北6.02～6.32ｍをはかる。かまどは東壁側に２基構築されており、主軸方向は北側のかまどでＥ33.0°Ｓ、南側のかまどでＥ47.0°Ｓを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ・Ｂの２層にわかれる。Ａ層は暗褐色土粒を若干混入する褐色シルトで下面には粉状パミスが粒～塊状に含まれる。Ｂ層は黄褐色土粒を若干混入する褐色シルトで、焼土・カーボン粒を含みＡ層に比べてしまりのよい土質である。

床面は２基構築されるかまどの中央を大きく撹乱されるほかは良く残っている。なお、床面東半からかまどにかけて堅い面がみられた。床構築土（Ｃ層）は褐色シルトと黄褐色シルトとの塊状混合土で、構築面は起伏が著しい。検出面から床面までの深さは0.26～0.34ｍ、構築土の厚さは0.15～0.20ｍをはかる。壁は直壁に近い立ち上りである。

ピット　ピットは床面上に10口（P_1～P_{10}）検出している。P_1は撹乱土の下面で検出した貯蔵穴で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸0.98ｍ、短軸0.60ｍ、床面からの深さ0.30ｍをはかる。埋土はかまど崩壊土が堆積する。床面北西隅に検出したP_2も長楕円形を呈し、長軸1.03ｍ、短軸0.53ｍ、深さ0.14～0.20ｍをはかり、底面はやや起伏が認められる。南西に検出したP_3は不整形を呈し長軸1.03ｍ、短軸0.74ｍ、深さは0.07～0.12ｍをはかる。埋土は住居埋土Ｂ層に相当する。P_4～P_{10}はいずれも平面形が円形～楕円形を呈する小ピットである。それぞれの径と深さはP_4－0.12・0.18ｍ・0.14ｍ、P_5－0.16ｍ・0 07ｍ、P_6－0.18ｍ・0.08ｍ、P_7－0.26ｍ・0.06ｍ、P_8－0.28～0.38ｍ・0.11ｍ、P_9－0.36ｍ・0.10ｍ、P_{10}－0.18～0.25ｍ・0.09ｍをはかる。なお、いずれも埋土は黄褐色シルトを主体とし、床面で検出しているが、深さ等から本住居にともなうか疑問が残り重複する他の住居跡のピットの可能性も指摘できる。

かまど　かまどは東壁中央から北寄りと南寄りの２基が構築されている。北寄りの煙道平面形は溝状を呈し、ＲＡ024を切る。底面は東壁際から徐々に深くなり、煙道中央部が最も深くなっている。東壁から煙出し先端までの長さは1.76ｍ、幅0.40～0.62ｍ、深さ0.20～0.38ｍをはかる。そでは残存しておらず、火床面は煙道延長上の壁内に径0.35～0.40ｍの不整円形の範囲に焼けている。また火床面下面にはかまど地業（Ｌ層）があり、焼土を含んだ暗褐色土を敷いている。かまど崩壊土（Ｊ層）はJ_1～J_3層が煙道天井部の崩壊土とみられるしまりのよい褐色シルト、J_4層以下が焼土を塊～層状に混入する暗褐色土で軟かくしまりのない土質である。南寄りのかまどは煙出し先端が調査区外に広がる。平面形は北側煙道に比べて太い溝状を呈する。底面は床面から平坦に続き煙道中央から煙出しにかけて深くなる。東壁からの長さは1.55ｍ以上、幅0.83～0.87ｍ検出面からの深さは0.18～0.40ｍをはかる。かまどそで構築土は残存していないが、北そで付近に自然石が散乱しており、施設として使用されていたとみられる。火床面は



第14図　R A 013・024竪穴住居跡

煙道延長上の壁内に径0.45～～0.45mの不整形の範囲で検出された。なおこの下面にはやはりかまど構築土（L′層）がある。かまど崩壊土（J′層）は焼土・カーボン粒を多量に混入する暗褐色シルトで、J_1・J_2層は堅くしまりが良く、J_3層以下は軟質である。なお、北寄り・南寄りのかまど崩壊土とも住居火床面～床面を覆っており、また埋土との新旧関係が認められない事から、同時に機能していたものと考えられた。

遺　物　出土した土器の器種には須恵器坏・瓶・甕、土師器坏・椀・鉢・甕、あかやき土器坏・甕があり、床面東半からかまど崩壊土にかけて多量に出土している。埋土中からはわずかで、かまど、床構築土からもわずかに出土している。鉄器はB層から刀子が1点出土している。

ＲＡ014竪穴住居跡（第15図）

調査区南東隅に検出した竪穴住居跡で、重複関係は平面形東半をＳＤ001、南西隅をＳＫ012、北壁をＳＫ020、さらに小柱穴に切られている。特にＳＤ001に切られる東半部は床面及び構築土を削平しており遺存状態は良好ではない。

規　模　平面形は東西方向に長軸をもち、ほぼ長方形を呈し、規模は東西5.1m内外、南北3.92～4.05mをはかる。主軸方向は残るかまど痕跡からE42 0°S、竪穴平面形からE14.0°Sを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ・Ｂの２層にわかれる。A層は小礫を若干含み、黄橙～明黄褐色土粒～小塊をやや多く混入する黄褐色シルト。B層がやはり小礫とカーボンを若干含み、褐色土粒～塊をやや多く混入する黄褐色シルトである。なおＳＤ001に切られるためか埋土上面はグライ化しており、全体に堅いがしまりはない。

床面は重複遺構から残存するのは西半部のみで、この面はやや起伏があるものの平坦である。壁はほぼ直壁で、検出面から床面までの深さは0.25～0.30mをはかる。床構築土（C層）は地山の砂質土を含む褐色シルトとにぶい黄褐色シルトの粒～塊状混合土で、起伏のある構築面に堅くしき固めている。なお構築土の層厚は0.05～0.08mをはかり、床面東端は構築土も削平され、グライ化した痕跡を残すのみである。

かまど　かまどは東壁南東隅に構築されているが、煙道は削平され、この底面に残る焼土粒により、長い構造の煙道であった事がうかがい知れるのみである。この痕跡から長さは約1.0m、幅0.5m内外で煙道底面はほぼ平坦、煙出しにともなうピットは検出できなかった。そでも削平されている。火床面は煙道延長上の壁内に検出している。平面形は不整形を呈し、径1.08～1.16mと広い範囲に焼けているがこれも削平されており、確認できる浸透層の厚さは2cm内外である。なお、かまど施設にともなう構築土はない。

ピット　ピットは5口（P_1～P_5）検出している。いずれも床面上北東部に集中しており、平面形はほぼ円形を呈する。径及び床面からの深さは、P_1－0.13m・0.03m、P_2－0.22m・0.04m、P_3－0.15m・0.04m、P_4－0.20m・0.04m、P_5－0.20m・0.03mをはかる。埋土はやや黒褐色土を混入する黄褐色シルトで古代の埋土に似るが、深さが浅い事から遺構埋土上面から掘り込まれた柱穴もいくつかあると思われる。

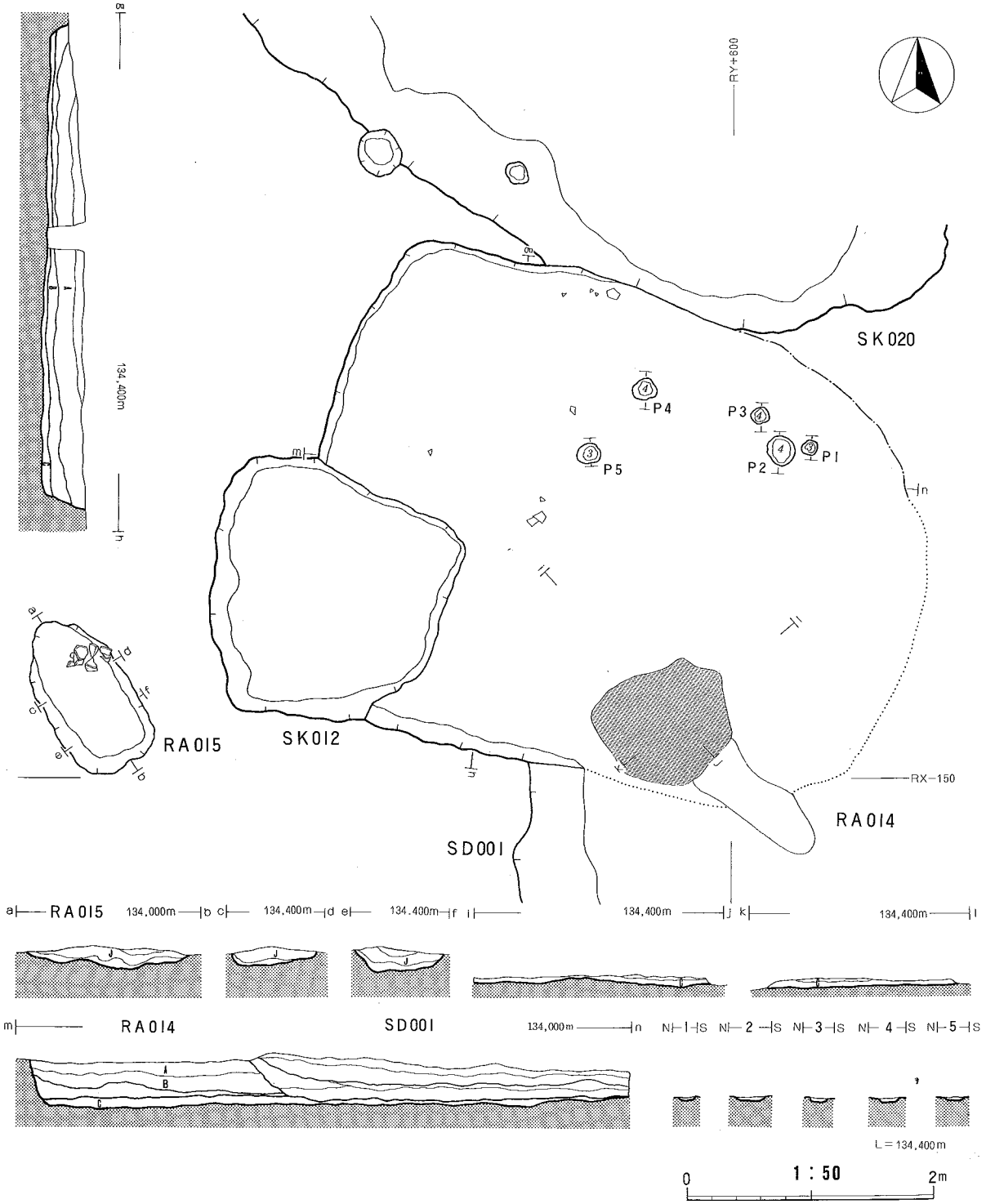
遺　物　遺物は須恵器坏・壺・甕、土師器とあかやき土器の坏・甕があり．床面西半と埋土から多く出土しているが、いずれも小片である。またかまど火床面付近から土師器甕、ピット内から坏と甕の小片が出土している。鉄器は埋土中から刀子様の破片が出土している。

ＲＡ015竪穴住居跡（第15図）

014の南西に検出した煙道で竪穴平面形は削平され確認できない。残存する規模は長さ1.33m、幅0.73m、深さ0.10～0.15mで、底面は起伏がある。埋土（Ｊ層）は焼土を粒～塊状に混入する褐色土である。土器は図示可能な個体が多く出土しており、鉄器は鏃が１点ある。

規　模

遺　物



第15図　ＲＡ014・015竪穴住居跡

ＲＡ016竪穴住居跡（第16図）

調査区中央やや南寄りに検出した竪穴住居跡である。他の遺溝との重複関係は中世以降のＳＫ018、さらに古代のＲＡ012・013に切られ、019・023を切る。なお022との新旧関係は不明である。

規　模　平面形は方形ないし長方形を呈すると思われる。竪穴規模は東西3.90～4.27ｍをはかり、南北が４ｍ内外とみられる。主軸方向はW20.5°Ｎを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｃの３層に大別される。Ａ層は粒～塊状の明黄褐色土をやや多く混入する黄褐色シルト。Ｂ層がカーボン・焼土粒を若干含み黄褐色シルト粒を多量に混入する褐色シルト。さらにＣ層が暗褐色土粒をやや多く混入する砂質褐色シルトである。

床面はほぼ平坦であるが西側から東側にゆるやかに傾斜し深くなっている。床構築土（Ｄ層）はほとんど混入土を含まない黄褐色シルトでややグライ化している。構築面は著しい起伏がない。検出面から床面までの深さは0.36～0.49ｍ、構築土の層厚は0.03～0.06ｍをはかる。壁は東・西壁の一部を残しており、ほぼ直壁である。

かまど　かまどは西壁中央付近に構築されている。煙道先端はＲＡ012に切られており、平面形は溝状を呈する。残存する規模は、長さ1.20ｍ、幅0.35～0.37ｍ、検出面からの深さ0.32ｍをはかる。底面は起伏がなく焚口から煙道先端にむかってやや浅くなる。そでは自然円礫を積重ねて構築しており、両そでともわずかに遺存している。また床面には崩壊した同様の礫が散在しており、床中央部にまで広がっている。火床面は煙道延長上からやや南寄りの壁内に位置する。平面形は不整形を呈し．長軸0.54ｍ、短軸0.36ｍをはかる。かまど崩壊土（Ｊ層）はＪ$_1$層が焼土の混入が微量であるが他は多量に含まれており、黄褐色シルトと褐色シルトの層～塊状混合土である。なおＪ層の流入は壁際までで、住居埋土への混入はほとんどみられない。また、かまど地業は煙道中央から火床面東側まで掘りこまれている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.50ｍ、短軸0.49ｍ、層厚0.07ｍをはかる。この地業土（Ｌ層）は黄褐色シルトを基本土としている。

ピット　ピットは火床面南側に１口（Ｐ$_1$）検出している。平面形は円形を呈し、径0.15～0.20ｍ、床面からの深さ0.20ｍをはかる。埋土は黄褐色シルトを基調とする。

遺　物　出土した土器は埋土最下層であるＪ・Ｃ$_2$層に集中する。Ｂ層にはまったく包含されず、Ａ・Ｄ層からはわずかな出土である。また床面からは土師器甕の小片が出土したのみである。鉄器の出土はない。

ＲＡ017竪穴住居跡（第17図）

調査区中央からやや北寄りに検出した竪穴住居跡である。重複関係はＳＫ017に床面西側中央、さらに平面形南東をＳＫ018に切られる。

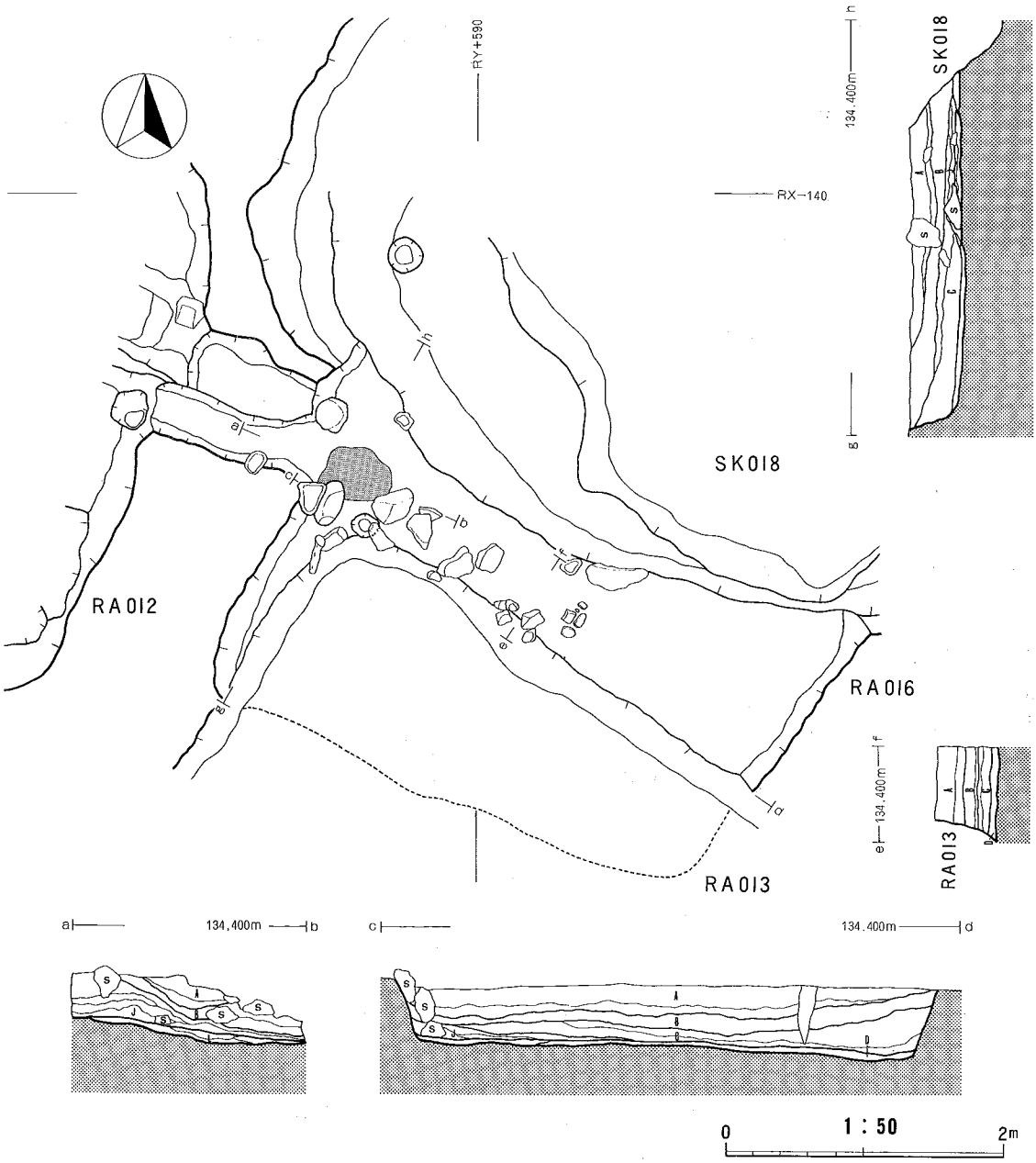
全体形は南北に長軸をもつ長方形を呈すると思われる。規模は東西2.75～2.90ｍ、南北3.3ｍ以上をはかり、主軸方向はＥ15.0°Ｓを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ・Ｂ層にわかれる。Ａ層は褐色～暗褐色シルトを粉～塊状に若干混入する黄褐色シルトで、Ａ$_3$・Ａ$_4$層には焼土粒が多く含まれる。なお全体に堅くしまっている。Ｂ層は褐色土粒をわずかに混入する暗褐色シルトでＢ$_1$層にはカーボンを含

む。また、床構築土（C層）は黄褐色シルトを基本土としており、構築面はやや起伏があるが顕著なピット等はない。この層厚は0.02～0.12mをはかる。

かまどは東壁北東隅寄りに位置する。煙道はＳＫ018に削平されるため不明である。そでは両側とも遺存しており、黄褐色シルトを基本土とする構築土（K層）である。残存する規模は北そでが長さ0.45m、幅0.35～0.50m、南そでが長さ0.37m、幅0.40～0.43mをはかる。火床面はこのそでに囲まれたやや西寄りに径0.30m内外の円形の範囲に認められた。また火床面と煙道の中間には径約15cmの円礫を立てて支脚としている。なお火床面下面にはかまど地業はなく、床構築土中に支脚の石を据えている。かまど崩壊土（J層）は、焼土粒を含む暗褐色シルトで、煙道から火床面上面まで堆積するが、住居埋土への混入はほとんど認められない。

かまど



第16図　ＲＡ016竪穴住居跡

ピット　ピットは煙道と火床面の延長上の床面中央に１口（P_1）検出している。平面形はほぼ円形を呈し、径0.16m、床面からの深さ0.07mをはかる。埋土は黄褐色シルトを基本土とする。

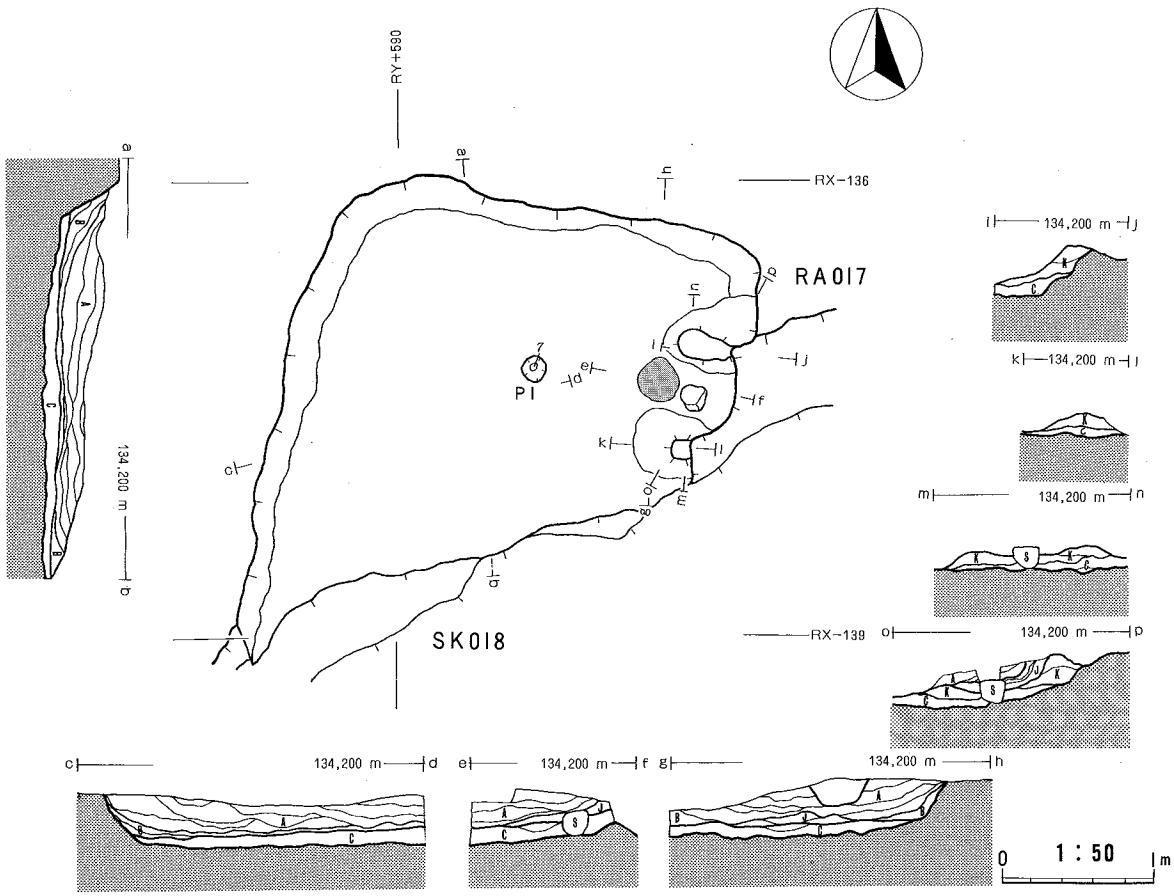
遺　物　出土した土器の器種は須恵器坏・甕、土師器坏・甕、あかやき土器坏があり、このあかやき土器坏が構築土から１片出土しているほかいずれもかまど崩壊土からで住居埋土からの出土はない。なお、須恵器坏はヘラ切無調整と糸切無調整の２者の切離しが認められる。

ＲＡ018竪穴住居跡（第18図）

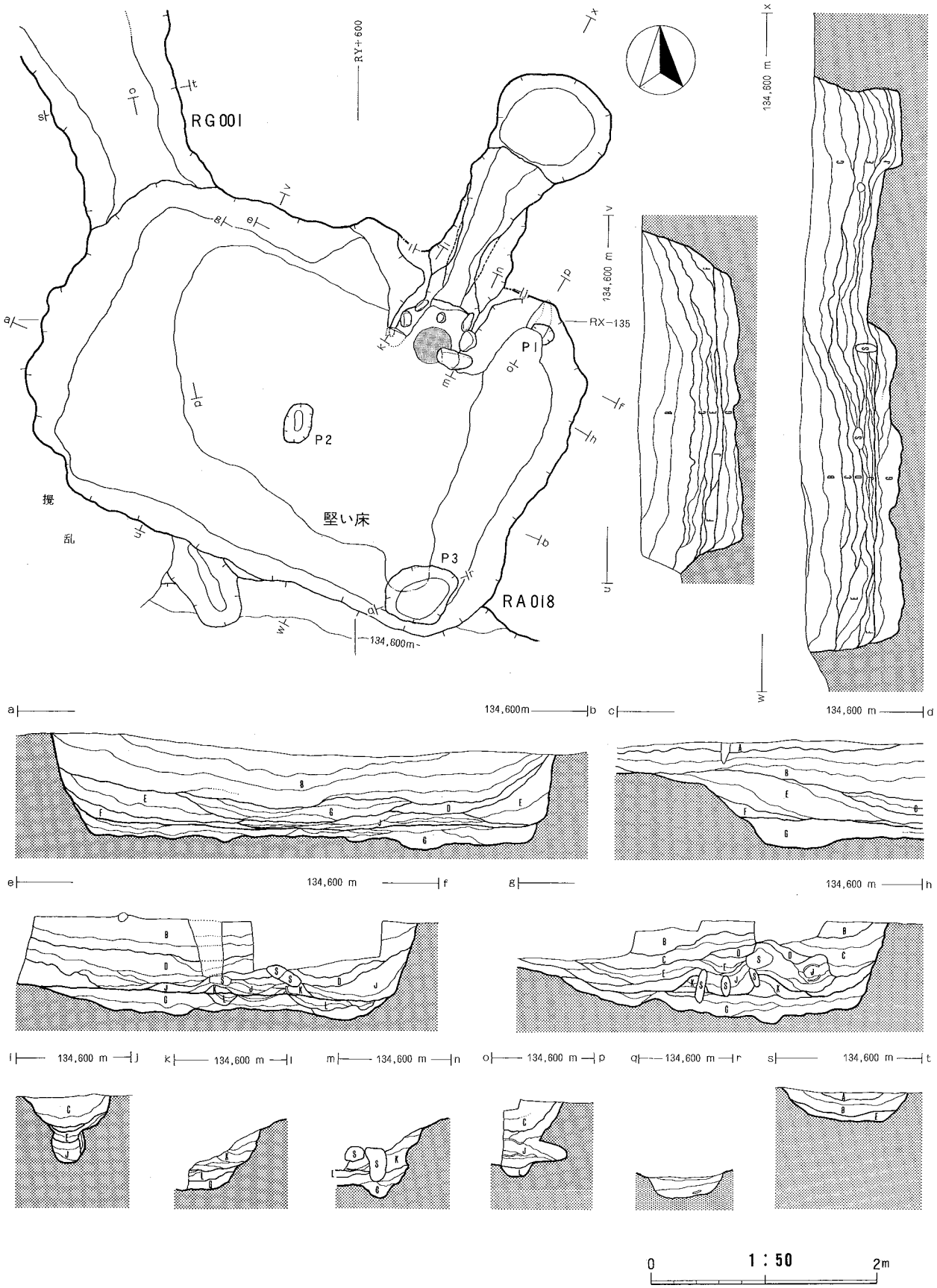
調査区北東に検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複関係はＳＡ004に平面形南端を切られる。また北西隅ではＲＧ001と重複するが両遺構の埋土の大半は同一のもので、双方の間に大きな時間差はないと思われる。

規　模　平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈し、規模は、東西4.46～4.60m、南北3.04～3.30mをはかる。主軸方向はＮ24 5°Ｅを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ～Ｆの６層に大別される。Ａ層は平面形北西からＲＧ001埋土上層のみに堆積する層で、黄褐色シルトと暗褐色土の混合土である。Ｂ層はＲＧ001から竪穴内中央まで堆積する層で混入土をほとんど含まない黄褐色シルトを主体とする。Ｃ層は焼土をやや多く混入する暗褐色シルト。Ｄ層が焼土粒を若干含む暗褐色～黒褐色の層状混合土。Ｅ層は褐色シルト層。さらにＦ層がやや褐色土が塊状に混入する黄褐色シルト層である。なお、全体にしまりはよく、上層はやや堅く、下層はやや軟かい土質である。



第17図　ＲＡ017竪穴住居跡



第18図　ＲＡ018竪穴住居跡、ＲＧ001溝跡

床はやや凹凸が認められるものの平坦に近い。なお、床中央部には堅い面が認められる。床構築土（G層）は暗褐色～褐色シルトと黄褐色シルトとの粒～塊状混合土で起伏の顕著な構築面に堅く敷き固めている。検出面から床面までの深さは0.66～0.77mと今次調査で検出した竪穴住居中最も深く遺存状況が良い。また、構築土の層厚は0.06～0.26mをはかる。壁はほぼ直壁である。

かまど　かまどは北壁中央から東寄りに位置する。煙道は溝状で、煙出しはこれより太い柱穴様である。また、煙道断面形は下半が円形、上半は皿状を呈することから、本来は地下式として構築したと見られる。底辺は北壁際から煙出しに向ってゆるやかに深くなり、さらに煙出しはこれより0.15m程の落差をもって深くなる。規模は北壁から煙出し先端まで1.96m、煙道の幅が0.56～0.68m、深さ0.56～0.69m、煙出しが径1.05m内外、深さ0.80mをはかる。かまどの精査では床面が深い事もあって天井部など焚口施設の遺存が期待されたがすでに崩壊している。なお、そでは両側とも良好に残存している。この構築土（K層）は焼土・カーボン層を介在する褐色シルトと黄褐色シルトの混合土で、自然円礫を併用して構築している。規模は東そでが長さ0.86m、幅0.28～0.35。西そでが長さ0.86m、幅0.35～0.70mをはかる。火床面はこの両そでに囲まれた壁内に配置し、径0.35m程の円形を呈する。この浸透層は0.06mの厚さである。また、火床面の北側には長さ20cm、径9cmの円柱形を呈する自然円礫を立て支脚としている。かまど崩壊土（J層）は焼土を多量に混入し、褐色シルトを粉～粒状に混入する暗褐色～黄褐色シルトで全体に堅くしまっている。なお、この崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面を中心として床面積の⅔程を覆っており壁際にみられるF層堆積後にかまどの崩壊が始まった事を示している。かまど地業（L層）は床構築土を掘り込むが、火床面直下にはみられず、両そでの下面のみに構築されるが、ともに浅く断面は皿状を呈している。

ピット　ピットは床面上に3口（P_1～P_3）検出している。P_1はかまど東側で床面北東隅の壁面を間口0.19m、奥行0.30m掘りこむピットである。埋土はJ層である。P_2は床面ほぼ中央に位置し、平面形は長楕円形を呈する。長軸0.35m、短軸0.24m、床面からの深さは0.03m内外で埋土はやはりJ層である。P_3は床面北東隅に検出したピットで平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.68m、短軸0.54mをはかる。底面は平坦で壁はこれからゆるやかに立ち上る。床面からの深さは0.18mをはかる。埋土は最下層がかまど崩壊土様の焼土層でこの上面にはやはり焼土粒を微量に混入する褐色シルトである。なお、床面にみられた堅い壁は、この埋土上面にも及んでいる事から、本住居の機能時間差の中で埋没したものと考えられたが、人為堆積か自然堆積かは判然としなかった。

遺　物　遺物のうち出土した土器の器種には須恵器蓋・坏・高台付椀・鉢・甕、土師器とあかやき土器の坏・甕がある。床面からは須恵器甕が出土したのみで、D層からは須恵器蓋、C層からは須恵器坏がそれぞれ1点出土し、E～G層の出土はない。出土土器の大半がA～C・J層からであるが相対的に多くない。鉄器はB_1層から刀子と砥石が各1点出土している。

RG001溝跡（第18・21図）

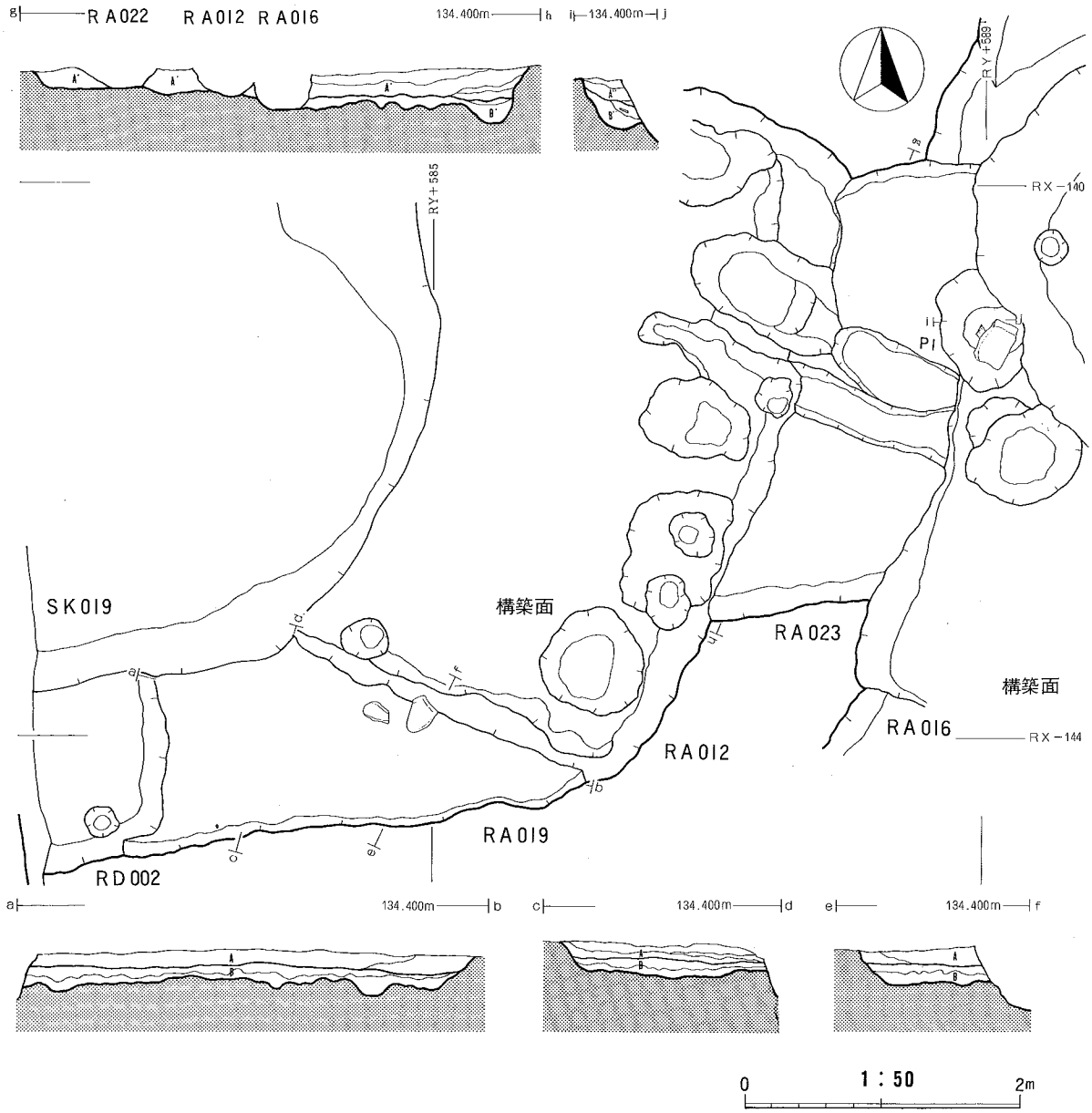
調査区北東部、RA018北西隅から021床面にかけて検出した北西～南東方向の溝跡である。重複関係は、北端をSD002を切る撹乱に切られ、021を切る。なお018との新旧関係はなく、

ほぼ同時期である。平面形は東端がやや南に振れる弧状を呈する。規模は残存する長さ約6.2m　**規　模**
上端幅0.92～1.50m、下端幅0.60～1.40m、検出面からの深さ0.25m内外をはかる。底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。なお底面レベルは北西端に比べて約0.10m南東端が低い。埋土は018埋土A・B・E層が相当する。出土遺物は平安時代土器の小片がある。

ＲＡ019竪穴住居跡（第19図）

調査区南西に位置する。重複関係はＳＫ019・ＲＡ012・ＲＤ002に切られており、検出したのは南壁と床面の一部である。平面形及び規模・主軸方向は不明である。

埋土（Ａ層）は自然堆積で、粒～塊状の褐色シルトを多量に混入する黄褐色シルトで堅くし　**埋　土**



第19図　ＲＡ019・023竪穴住居跡

まっている。床面はやや起伏があり、壁はゆるやかに立ち上がる。また床面には堅い部分は特に検出されていないが、黒褐色土粒を微量に混入する褐色シルトの構築土（B層）が認められ、かなり凹凸のある構築面に敷き固めている。検出面から床面までの深さは0.09～0.12m、構築土の層厚は0.06～0.19mをはかる。

遺　物　遺物は埋土から平安時代の土器のほか、床から刀子が1点出土している。

ＲＡ020竪穴住居跡（第20図）

調査区南西隅に検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複関係は平面形中央とかまどを中世以降のＳＡ007、ＳＫ010・011及び小柱穴に切られ、 さらに北東隅を平安時代のＲＡ013に切られる。なお全面形の南側は調査区外に広がっている、

規　模　平面形は方形ないし長方形を呈すると思われる。規模は東西4.60～4.66m、南北3.45m以上をはかり、主軸方向はＥ19.5°Ｓを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｃの3層に大別される。Ａ層は黄褐色シルトを粒状に混入する褐色シルトで全体にカーボン粒を含む砂質の埋土である。Ｂ層がにぶい黄褐色シルトを粒状に混入する褐色シルトで、カーボンを若干する。Ｃ層が褐色土粒をやや多く混入し焼土、カーボン粒をやや多く含む黄褐色シルトでＡ$_3$層からＢ$_1$層にかけて堅くしまっている。

床面はほぼ平坦で顕著な起伏は認められない。床構築土（Ｄ層）は褐色シルトと黄褐色シルトとの塊状混合土でＤ$_1$層はややグライ化している。なお、構築面は後述する火床面下面がピット状に深く掘り込まれるほかはゆるやかな起伏をもつ面である。構築土の層厚は0.16～0.36m、火床面下のピットの径は1.02mをはかる。

かまど　かまどは東壁調査区際に検出した。竪穴平面形をほぼ正方形とするとやや東壁中央からやや南側に寄っているが判然としない。 煙道平面形は長い構造で溝状を呈し、 竪穴主軸から11.5°程北に振れている。煙出しは円形のピット状を呈し、底面は煙道底面は傾斜がなく平坦で煙出しはこれから0.20mの落差をもって深くなる。なお煙道から煙出しにかけての南側壁は調査区外に広がっている。規模は東壁から煙出し先端まで長さ1.38m、煙道が幅0.32m以上0.40m内外、検出面からの深さ 0.06～0.09m。 煙出しが径0.42m、深さ0.24～0.38mをはかる。かまどそでは東壁際の煙道取り付き部分に1対の自然礫が直立して残存している。またこの西側の火床面から床面にかけて同様の礫が散在している事から礫組の施設があったとみられる。火床面は両そでから西側にかけてややピット状になるが、この中央に不整形の範囲で検出された。長軸は0.63m、短軸が0.55m、浸透層の厚さは2cm程である。支脚は火床面中で両そで石の中間に長さ0.25m、径0.12m程の自然円礫を直立させて据えている。なお火床面下には床構築土を掘りこむかまど地業のピットがある。規模は径0.80m、床面からの深さ0.12mで断面は皿状を呈する。埋土（Ｌ層）は焼土粒を含む暗褐色シルトで、残存するかまど両そでの礫及び支脚はこのＬ層下面の地山シルト層につき差し、さらにＬ層で固めて据えている。かまど崩壊土（Ｊ層）は焼土・カーボン粒を多量に含む暗褐色シルトで煙道、煙出しから火床面西側の崩壊した礫及び後述するＰ$_1$南側に堆積する。また、住居埋土への混入はほとんど認められないが火床面から東壁付近の床面上には広くカーボン粒が広がっている。

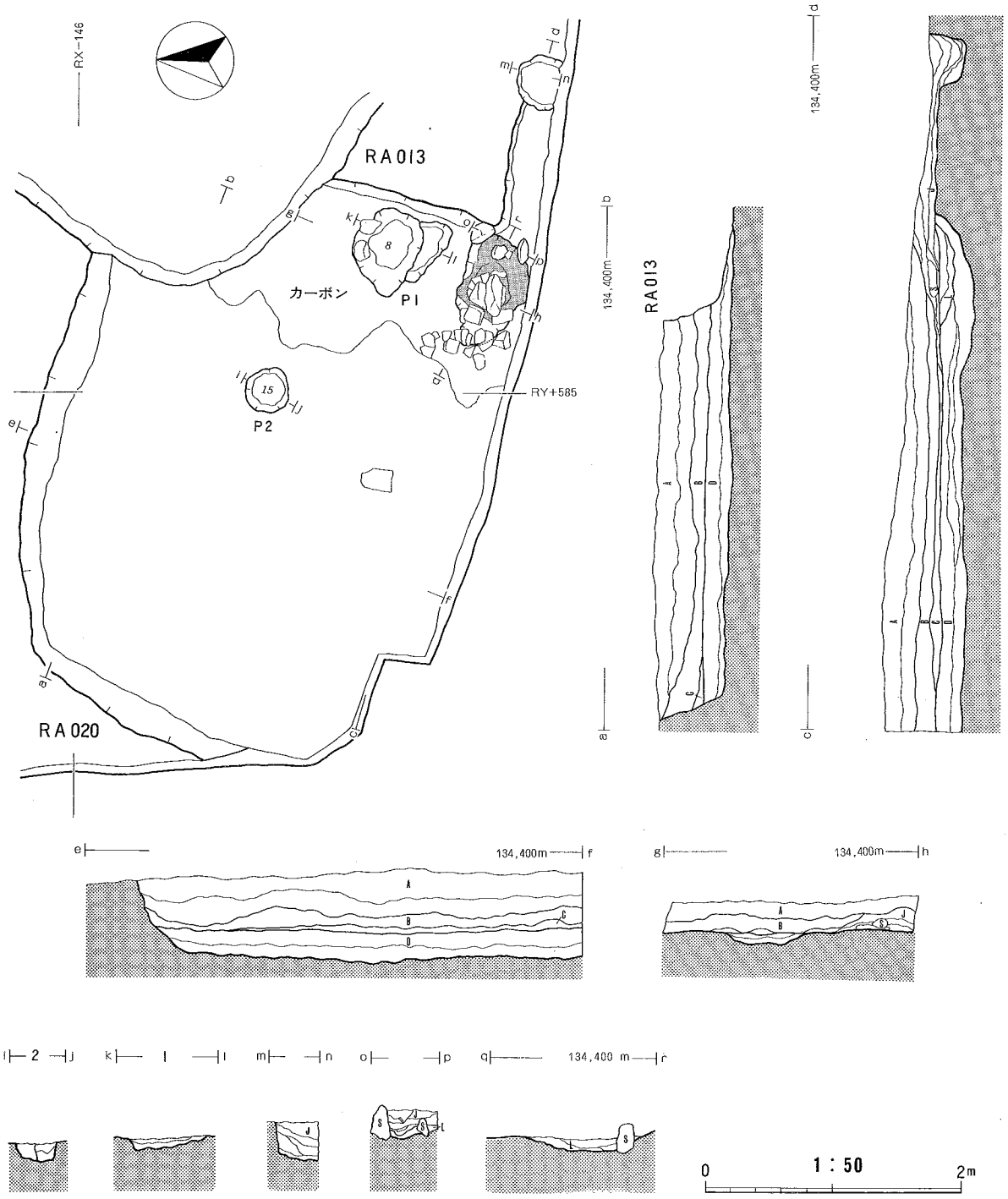
ピット　ピットは床面上に2口（Ｐ$_1$・Ｐ$_2$）検出している。Ｐ$_1$は火床面北側に隣接しており貯蔵穴と

みられる。平面形は不整形を呈し、長軸0.79m、短軸0.69m、床面からの深さ0.10mをはかる。

埋土は焼土粒がやや混入するがC層に相当する。P_2は検出した床面のほぼ中央に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、南壁寄りには住居跡が検出された。規模は掘方が径0.32m、柱痕跡が径0.16m、深さ0.15mをはかる。埋土は柱痕跡が褐色土、掘方が粗い黄褐色シルトである。

遺　物

出土した土器は須恵器坏・高台付椀・甕のほか土師器・あかやき土器の坏・甕があり、火床面周囲とP_1・J層からまとまって出土している。鉄器はD層から刀子が1点出土している。



第20図　ＲＡ020竪穴住居跡

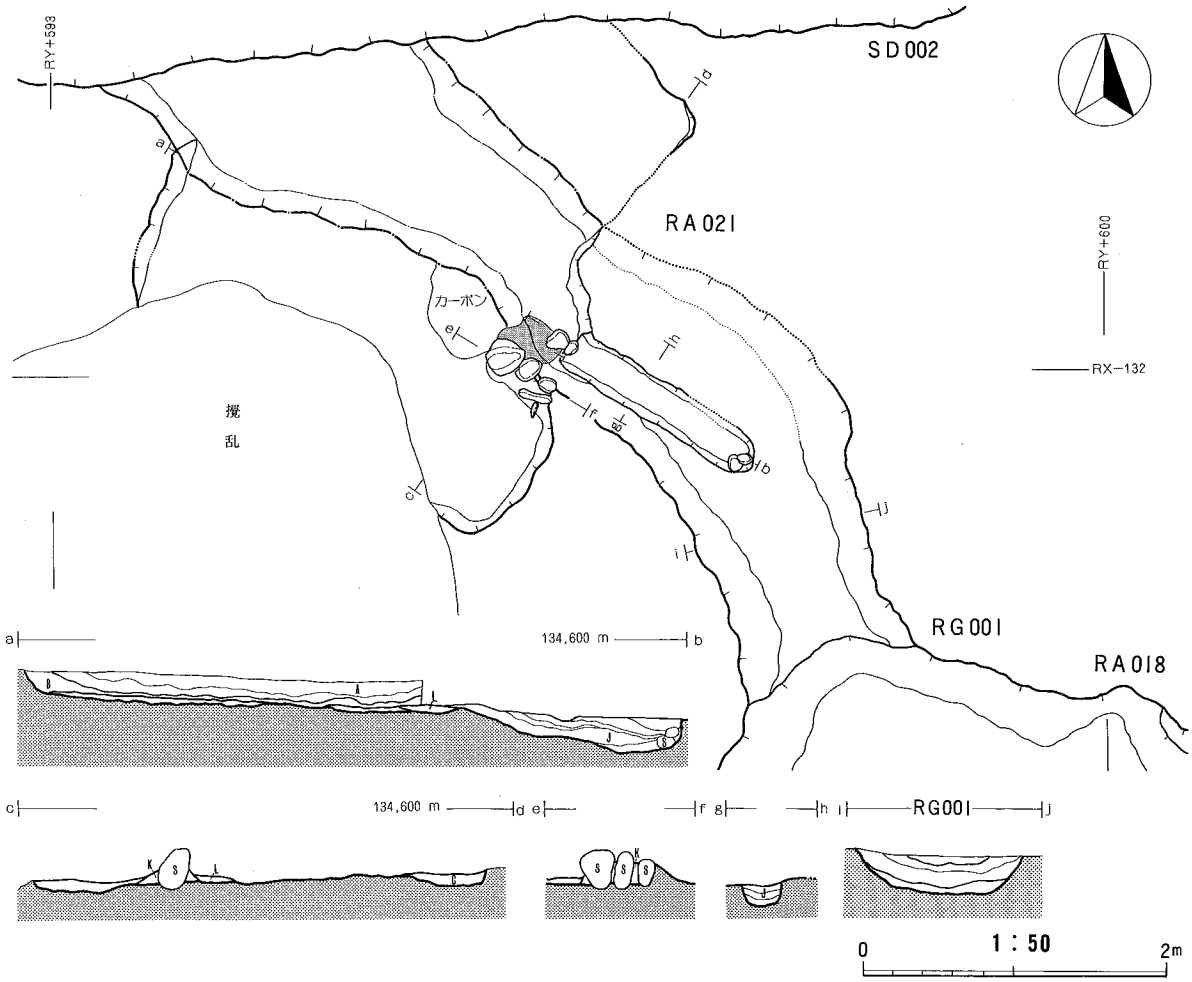
ＲＡ021竪穴住居跡（第21図）

調査区北辺中央に検出した竪穴住居跡である。重複関係は北東部をＳＤ002、中央部ではＲＧ001と重複するが新旧関係は微妙である。なお南西部は樹木の抜根により撹乱されるほか、北半部がかなり削平されている。

規　模　平面形はやや不整な方形を呈する。規模は、東西2.94～3.05m、南北3.15mをはかり、主軸方向はＥ33.0°Ｓを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ・Ｂの２層に大別される。Ａ層は暗褐色土粒を若干混入する褐色シルト。壁際から床面直上に堆積するＢ層がほとんど混入土を含まない粉状の褐色シルトである。いずれの層も堅くしまりのよい土質である。

床面は若干の起伏が認められるもののほぼ平坦で、特に堅い面は認められない。壁は南東隅と北東隅、さらに西壁の一部が残存するのみで、床面からゆるやかに立ち上がる。検出面から床面までの長さは0.15～0.17mをはかる。構築土（Ｃ層）は黒褐色土粒をわずかに含む褐色シルトで、やや不規則で平坦に近い構築面に敷き固めるが、床面は地山のシルト層が部分的にのぞく。構築土の層厚は０～0.07mをはかる。



第21図　ＲＡ021竪穴住居跡、ＲＧ001溝跡

かまどは東壁中央からやや南寄りに位置している。煙道平面形は溝状を呈し、底面は火床面から煙出しに向ってやや急激に深くなっており、煙出しはピット状を呈していない。規模は、東壁から煙出し先端まで1.46m、幅0.27～0.30m、ＲＧ001底面の検出面からの深さは0.15～0.24mをはかる。そでは煙道延長上の壁際からやや南に寄った位置に検出した。両そでとも自然円礫とそで構築土（Ｋ層）によって構築されている。なお北そでは２個、南そでは３個の礫を連立させた状況で残存している。また構築土は堅くしまった暗褐色をわずかに混入する褐色シルトで、さらにかまど構築土（Ｌ層）が補強するように覆っている。Ｌ層は黄褐色シルトを基本とする。火床面は両そでに囲まれた壁内にあり、不整形を呈する。規模は、長軸0.42m、短軸0.28mをはかり、浸透層の厚さは２cm程である。支脚及びピット・貯蔵穴はない。 **かまど**

遺物のうち土器の器種は須恵器坏、土師器坏・甕、あかやき土器坏・甕があるが、床面からはなく、床構築土とかまど崩壊土からのみの出土である。鉄器は、やはり床構築土から刀子が１点出土している、 **遺　物**

ＲＡ022竪穴住居跡（第13図）

ＲＡ012北東隅を切り、さらにＳＫ018に切られる。煙道から煙出しのみが残存している。平面形は溝状を呈し、底面はやや起伏があるが平坦に近く、煙出しはピット状にはならない。残存する規模は長さ0.98m、幅0.38～0.54m、検出面からの深さは0.08～0.20mをはかる。 **規　模**

かまど崩壊土となる埋土（Ｊ′層）は焼土粒を若干混入する褐色～黄褐色シルトで最下層は焼土の混入が少ない。なお、全体に堅くしまっている。 **埋　土**

遺物は埋土から体部内外面にヘラナデを施す土師器甕が出土している。 **遺　物**

ＲＡ023竪穴住居跡（第19図）

調査区南西に検出した竪穴住居跡である、他の遺構との重複関係はＳＫ018、ＲＡ012・016・023に切られており、確認されたのは北壁と南壁の一部、さらに貯蔵穴様のピット１口である。残存する竪穴規模は東西2.55m、南北3.05mをはかり、全体形は方形ないし長方形を呈するものと思われる。主軸方向は竪穴方向およびピットを東かまどに伴うものとするとおよそＮ82.0°Ｅを示す。 **規　模**

埋土（Ａ層）は自然堆積で黒褐色～暗褐色土粒をやや多く混入する黄褐色シルトで全体に堅くしまっている。 **埋　土**

床面はやや起伏がある面で特に堅い部分はなく、壁はゆるやかに立ち上がる。床構築土（Ｂ層）は褐色シルトと黄褐色シルトの粒～塊状混合土で堅い。なお構築面は検出した床面の東半のみを掘りこんでおり、かなり起伏のある面となっている。検出面から床面までの深さは、0.51～0.23m、構築土の層厚は0.03～0.17mをはかる。

ピット（P_1）は床面東端中央からやや北寄りに検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.87m、短軸0.61m以上、床面からの深さは0.36mをはかり、断面は摺鉢状を呈する。埋土は焼土粒を多量に混入する暗褐色土で、かまど崩壊土様である。なお、底面には焼けた板状の自然礫が落ちこんでいる。 **ピット**

出土遺物ない。

ＲＡ024竪穴住居跡（第14図）

調査区南辺中央に位置するＲＡ013東壁北寄りの煙道に重複して検出した竪穴住居跡で、検出されたのは煙道のみで住居平面形は既に削平されている。なお、新旧関係は013に切られる。

規　模　検出した煙道から北側に竪穴をもつ南かまどの住居跡で残存する煙道の規模は長さ0.62ｍ、幅0.60ｍをはかり、底面は平坦で南側先端にむかってゆるやかに立ち上がる。検出面からの深さは0.10～0.13ｍをはかる。

埋　土　埋土（Ｊ″層）は焼土粒を多量に混入する褐色シルトである。出土遺物はない。

ＲＦ025竪穴（第22図）

調査区北辺中央からやや西寄りの土塁痕跡（ＳＦ001）上に検出した遺構でかまど施設をもたない竪穴である。新旧関係は西側に重複するＲＤ006を切る。

規模・埋土　平面形はほぼ方形を呈し、規模は東西3.65～3.90ｍ、南北3.76～3.90ｍをはかる。埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｃ層にわかれる。Ａ層は褐色シルト粒をわずかに含む暗褐色シルト、Ｂ層が同じく褐色シルト粒を若干混入する黒褐色シルト。さらにＣ層が混入土のない褐色シルト層で、各層とも堅くしまっている。床は若干の起伏はあるがほぼ平坦で、これから壁はゆるやかに立ち上がる。出土遺物は平安時代の土器でいずれも埋土中からである。

ＲＤ002土坑（第13図）

調査区南西に位置し、重複関係はＳＫ019に切られ、ＲＡ019を切る。なお、全体形西半は調

規　模　査区外に広がる。平面形は方形～長方形を呈すると思われ、規模は東西1.03ｍ以上、南北1.30ｍ以上をはかる。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。深さは0.28～0.30ｍをはかる。

埋土は自然堆積で黒褐色土粒を微量に混入する暗褐色～褐色シルトである。出土遺物はない。

ＲＤ003・004・005・006土坑（第22図）

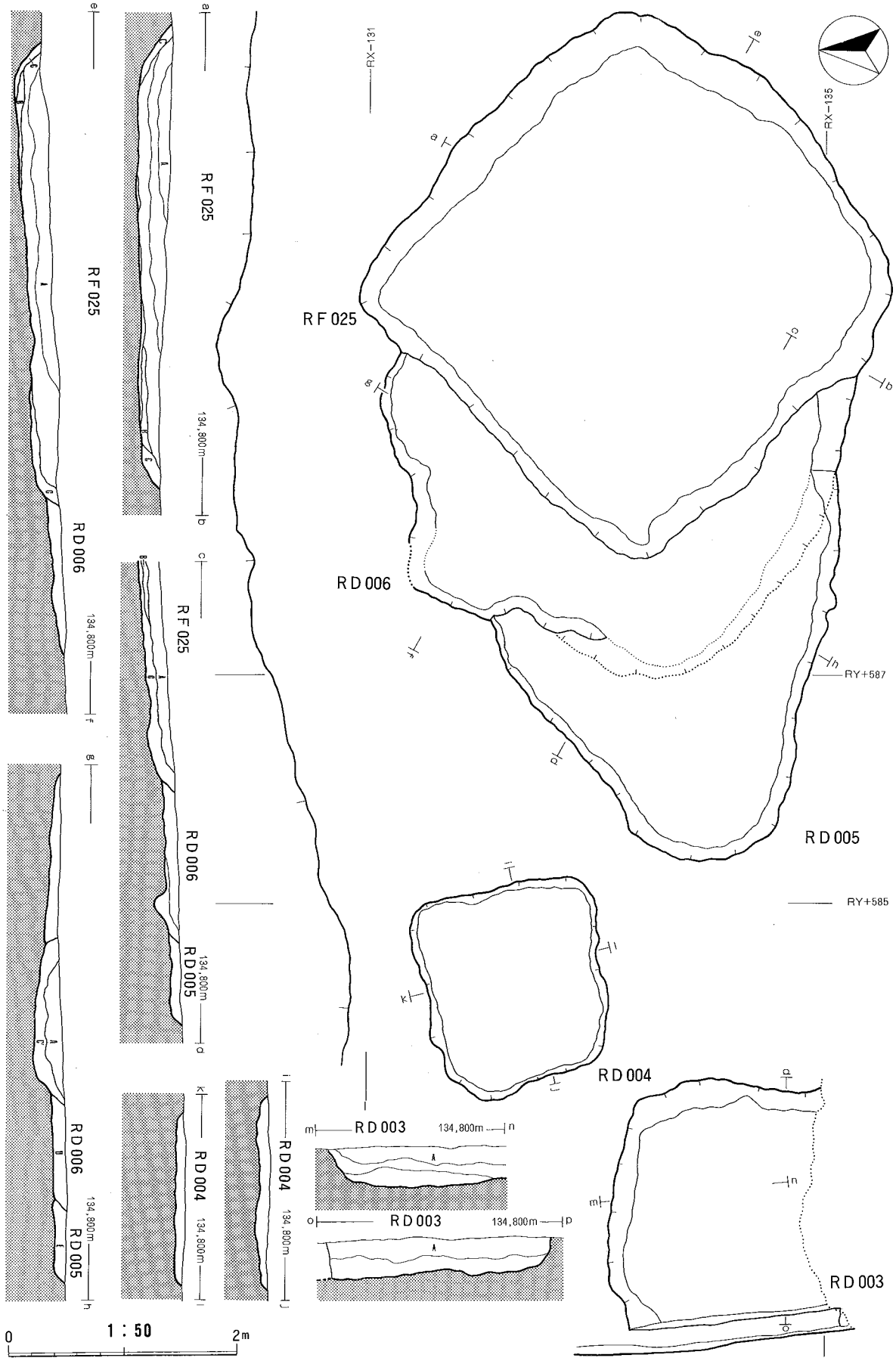
003調査区北西に位置する。全体形南側は削平され、西端は調査区外に広がる。平面形は方

規　模　形～長方形を呈すると思われ、規模は東西2.1ｍ以上、南北1.74ｍ以上をはかる。底面はやや起伏があり、壁はほぼ直壁である。深さは0.25～0.32ｍをはかる。埋土は暗褐色土粒を微量に混入する褐色シルトである。出土遺物はない。

004は003の北東に位置する不整方形を呈する土坑である。規模は東西1.65～1.80ｍ、南北1.50～1.65ｍで深さは0.09～0.12ｍと浅い。底面はやや起伏があり、壁は直壁である。埋土は003と同様である。出土遺物はない。

005は004の南東に位置し、006に切られるため全体形は不明である。残存する平面形は不整形を呈し、底面はほぼ平坦で壁は直壁である。埋土（Ｅ層）は混入土をほとんど含まない褐色シルトである。出土遺物はない。

006は005 の東半を切り、さらにＲＦ025に切られる。平面形は不整な方形ないし長方形を呈すると思われる。残存する規模は東西3.20ｍ以上、南北3.20～4.00ｍをはかる。底面はほぼ平坦、壁は不規則でゆるやかに立ち上がる。埋土（Ｄ層）は褐色シルトを主体とする。



第22図　ＲＦ025竪穴、ＲＤ003・004・005・006土坑

3　第６次調査

調査区は松ノ木遺跡の南西部に位置する。農作業小屋新築にかかる申請に伴ない昭和60年10月事前の試掘調査を実施し、その結果を受けて翌61年４月に本調査を実施した。なお、土捨場との関係から調査区を南北に分割して精査した。調査前の旧状は畑地で、遺構検出面は層厚30cmの耕作土直下、黄褐色シルト層上面である。遺構掘込面は既に削平されている。

検出遺構　調査の結果、平安時代の竪穴住居跡５棟（ＲＡ026～030）、土坑１基（ＲＤ007）。中世以降の堀跡１条（ＳＤ012）、溝跡４条（ＳＤ008～011）、土坑１基（ＳＫ044）を検出した(第23図)。なお、調査区南半部に集中し、北東～南西に走向する堀・溝跡のうち重複関係の認められたＳＤ010・011・012の新旧関係は、ＳＤ012が010・011を切り、さらに010が011を切る。またＳＤ012の北側壁中に検出したＳＫ026土坑は012に切られている。

ＲＡ026竪穴住居跡（第24図）

規　模　調査区西端中央に検出した竪穴住居跡で、平面形はほぼ方形を呈する。規模は東西2.80～2.92m、南北3.10～3.25mをはかる。主軸方向はW6°Nを示す。

埋　土　埋土（Ａ層）は自然堆積で、カーボン粒が微量に含まれるが、ほとんど混入土を含まない黄褐色シルトである。床面は部分的に凹凸が認められるがほぼ平坦で北西部に堅くしまっている。なお、床構築土はなく、壁は床面からゆるやかに立ち上がる。検出面から床面までの深さは0.08～0.14mをはかる。

かまど　かまどは西壁中央に溝築されており、西壁から煙道先端まで1.09m、幅0.25～0.36mをはかる。底面は溝状に平坦になっており、煙出しにともなうピットはない。崩壊土（Ｊ層）は、径0.5～1.0cmの焼土塊を混入し、全体的に黒褐色を呈する埋土である。かまどそでは残存しておらず、火床面は径0.44mの範囲に認められた。この火床面にともなう浸透層は厚さ１cm程でさほど焼けてはいない。なお、火床面は煙道方向から若干傾斜しており、煙道底面とは段差が認められる。床面上及び竪穴周囲には柱穴・貯蔵穴はない。

遺　物　遺物は床面北西から口縁部内外ヨコナデ、体部外面不定方向のヘラミガキ、内面体部がヘラナデの後ヘラミガキを施す土師器甕、埋土Ａ層から底部切離しヘラ切りで、外部体部下端に手持ちのヘラケズリ調整を施す須恵器坏、さらに内外面全体にヘラミガキで内面に黒色処理を施す土師器小形坏などが出土している。なお土師器坏と甕はロクロ未使用のものである。

ＲＡ027竪穴住居跡（25図）

規　模　調査区北西隅に位置する竪穴住居跡で平面北半は調査区外にのびる。規模は東西2.08～2.20m、南北2.05m以上と小規模である。なお、遺構の掘込面は既に削平されており、調査区際と埋土の一部は撹乱されている。

埋　土　埋土は自然堆積で、層相の違いにより大きくＡ・Ｂの２層にわかれる。Ａ層は白色粘土粒とカーボン・焼土を多量に混入する褐色～黄褐色土でA_2層に焼土粒やや多く混入する。また、最下層のＢ層は混入土をほとんど含まない黄褐色土である。ともにしまりはあまり良くない。

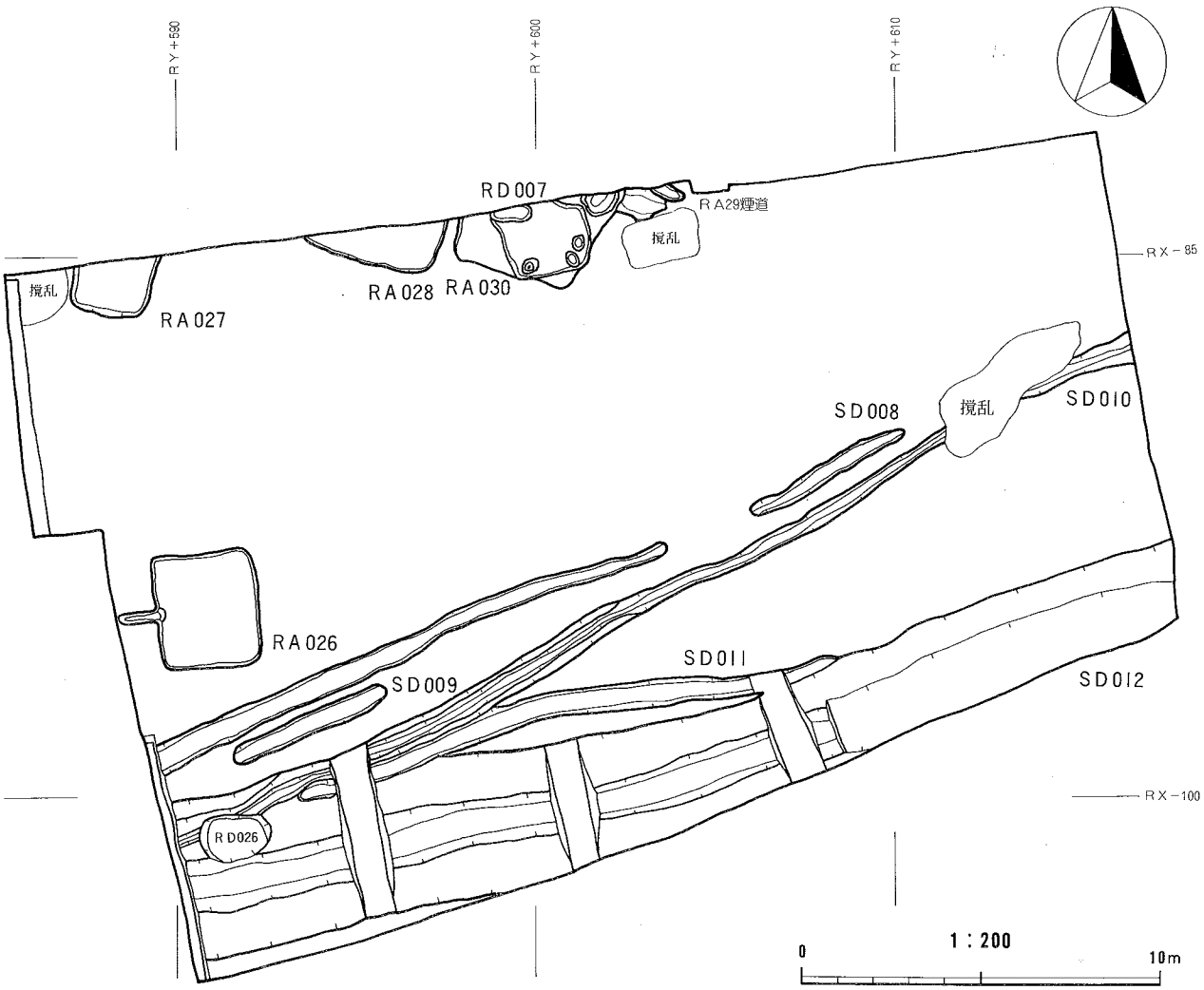
床面は全体に堅くしまっているが構築土は認められない。また床面は平坦ではなく中央部が最も深く壁際が浅い。いわゆる断面がレンズ状を呈する。検出面から床面までの深さは0.16～0.26mをはかり、壁は床面からゆるやかに立ち上がる。

かまどは未検出であるが、埋土中の焼土粒・カーボンはかまど崩壊土様であり、また堅い床面などから竪穴住居跡としてとらえたが、竪穴及び土坑の可能性も否定できない。

遺　物

本住居跡からは多くの図示可能な土器が出土している。床面上からの出土はないがB層からロクロ未使用の土師器長胴甕・小形甕がまとまって出土しており、口縁部ヨコナデを施し、体部外面にはヘラケズリ、ヘラミガキ様の細かい単位のヘラナデ、さらに内面にはハケメが多用されている。

また、A層からは、ヘラ切無調整と糸切無調整の須恵器坏、さらに磨滅が著しいが底部に糸切痕を残すあかやき土器坏が出土している。ともに底径は7～8cmと大きい。なお、このほかかにも小片が出土しているが、A・B層から出土する土器の様相は同じである。鉄器はA層から刀子が出土している。



第23図　松ノ木遺跡6次調査区全体図

ＲＡ028竪穴住居跡（第25図）

規　模　調査区北辺西寄りに位置する。平面形北半は調査区外にのびる。平面形規模は東西2.7ｍ以上、南北1.3ｍ以上をはかり．竪穴の主軸方向はＲＡ026・027に比べて大きく東側に振れている。遺構掘込面は大きく削平されており、遺構検出面は黄褐色シルト層上面である。

埋　土　埋土は自然堆積で、焼土粒とカーボン粒を微量に混入し、やや粘質の黄褐色シルトである。床面はほぼ平坦で壁はほぼ直壁に立ち上がる。なお、床面は均一に堅くなっているが、さほどしまりはよくなく、構築土は認められない。検出面から床面までは0.05～0.14ｍをはかる。

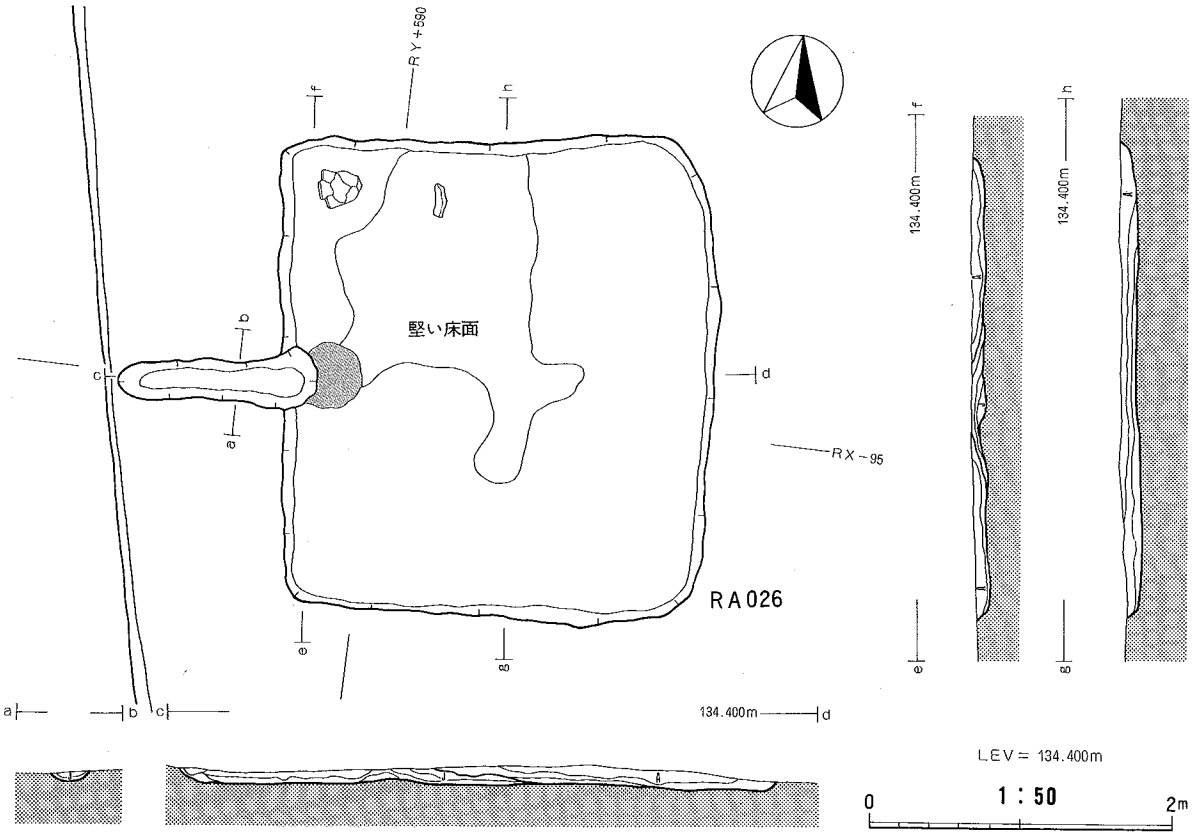
かまどは調査区外とみられるが、住居埋土へのかまど崩壊土の混入が認められず位置は確認されなかった。なお、床面上に柱穴、貯蔵穴はない。

遺　物　出土した遺物は、床面上中央から土師器甕の底部、南側壁際から自然礫が出土したほか、埋土からロクロ未使用の土師器坏の口縁部及び体部、外面にヘラケズリ調整を施す土師器甕の体部、さらに須恵器坏の体部が出土している。

ＲＡ029竪穴住居跡（25図）

調査区北辺中央に検出した竪穴住居跡である。煙道のみを検出しており、重複関係は隣接するＲＡ030煙道に切られる。なお竪穴の平面形は調査区外にのびる。

規　模　確認された煙道の規模は長さ1.04ｍ、幅0.40～0.43ｍ、検出面からの深さ0.15～0.18ｍをは



第24図　ＲＡ026竪穴住居跡

かる。埋土（Ｊ層）は焼土粒を多量に混入する暗赤褐色土で、底面には粒～小塊状の炭化材を混入している。なお、煙道底面は平坦で煙出し様のピットはない。 **埋　土**

出土した遺物は、埋土からかまど施設の構築に使用されたとみられる焼けた自然円礫のほか体部外面にヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ヘラミガキで黒色処理を施すロクロ未使用の小形の坏、さらに須恵器坏・甕、土師器甕の小片が出土している。 **遺　物**

ＲＡ030竪穴住居跡（第25図）

調査区北辺中央に検出した東かまどをもつ竪穴住居跡で、重複関係は北東に隣接するＲＡ029煙道を切り、竪穴中央部をＲＤ007に切られる。全体形の北半部は調査区外に広がり、規模は東西3.52～3.70ｍ、南北3.25ｍ以上をはかる。平面形は方～長方形を呈すると思われる。主軸方向はＥ10.5°Ｓを示す。遺構掘込面は大きく削平されており、遺構検出面は黄褐色シルト層上面で、さらにこのシルト層下面の小礫層が露頭している。なお検出面は耕作層より北から南側にかけて傾斜している。 **規　模**

埋土は自然堆積で、層相の違いによりＡ′・Ｂ′の２層にわかれる。Ａ′層は、カーボン粒を微量に混入し、暗褐色土粒をわずかに含む黄褐色土。Ｂ′層がやはり黄褐色土を主体とするが、焼土・カーボン粒をやや多く混入する埋土である。 **埋　土**

床面はほぼ平坦で特に堅い面は認められず、床構築土はない。壁は南側が大きく削平されるが、東・西の残存する壁高は0.15ｍ内外をはかり、床面からゆるやかに立ち上がる。

かまどは東壁調査区際に位置する。煙道の規模は長さ1.45ｍ、幅0.95ｍ、検出面からの深さは0.09～0.16ｍをはかる。底面はやや起伏があるもののほぼ平坦で煙出しはゆるく立ち上がる。

かまど崩壊土（Ｊ′層）は塊状の焼土を多量に混入する暗赤褐色土で施設構築に使われたとみられる赤変した自然円礫が混入している。そでは残存していない。火床面は煙道の前方に径0.40×0.53ｍの不整な範囲に認められた。なお、この火床面は床面を径1.0ｍ内外、深さ0.08ｍ掘り込んだかまど地業部の上面であり、地業部埋土（Ｌ′層）は黄褐色シルトと焼土粒との混合土である。柱穴及び貯蔵穴はない。 **かまど**

出土した遺物は火床面と南東Ｂ層から体部外面に平行タタキ後ヘラケズリ、内面はヘラナデを施すあかやき土器甕、同じく体部両面に平行タタキを施すあかやき土器甕の破片が出土している。 **遺　物**

ＲＤ007土坑（第25図）

調査区北辺中央に位置し、ＲＡ030を切る土坑である。全面形の北端は調査区外に広がる。平面形は不整形を呈しており、規模は、東西2.10～2.42ｍ、南北1.84～2.07ｍ以上、さらに検出面から底面までの深さは0.07～0.14ｍをはかる。掘込面はRA030同様大きく削平されている。 **規　模**

埋土は、自然堆積で層相の違いによりＡ″～Ｃ″の３層にわかれる。いずれも黄褐色シルトを主体とする埋土でＢ″層には多くの焼土粒が混入し、Ｃ″層は暗褐色土粒の混入土が多く含まれる。 **埋　土**

底面はやや起伏があり、壁の立ち上りは一様ではない。また底面には４口（P_1～P_4）のピットを検出している。底面からの深さはP_1－0.10ｍ、P_2－0.15ｍ、P_3－0.12ｍ、P_4－0.05ｍをはかる。埋土はＡ″～Ｃ″層が相当する。

遺物は、P_1～P_3の底面から土師器甕の破片が出土している。 **遺　物**

第25図　ＲＡ027・028・029・030竪穴住居跡、ＲＤ007土坑

4　第７次調査

調査区は松ノ木遺跡の南西部に位置し、６次調査区から北西に10.0ｍの距離をはかる。調査は平成元年、物置小屋新築申請が提出され、同年10月に本調査を実施したものである。調査以前の旧状は既存の小屋が建てられており、調査区内はこれにともなう撹乱のほか、調査区南西部に大きな撹乱が及んでいる。　**検出状況**

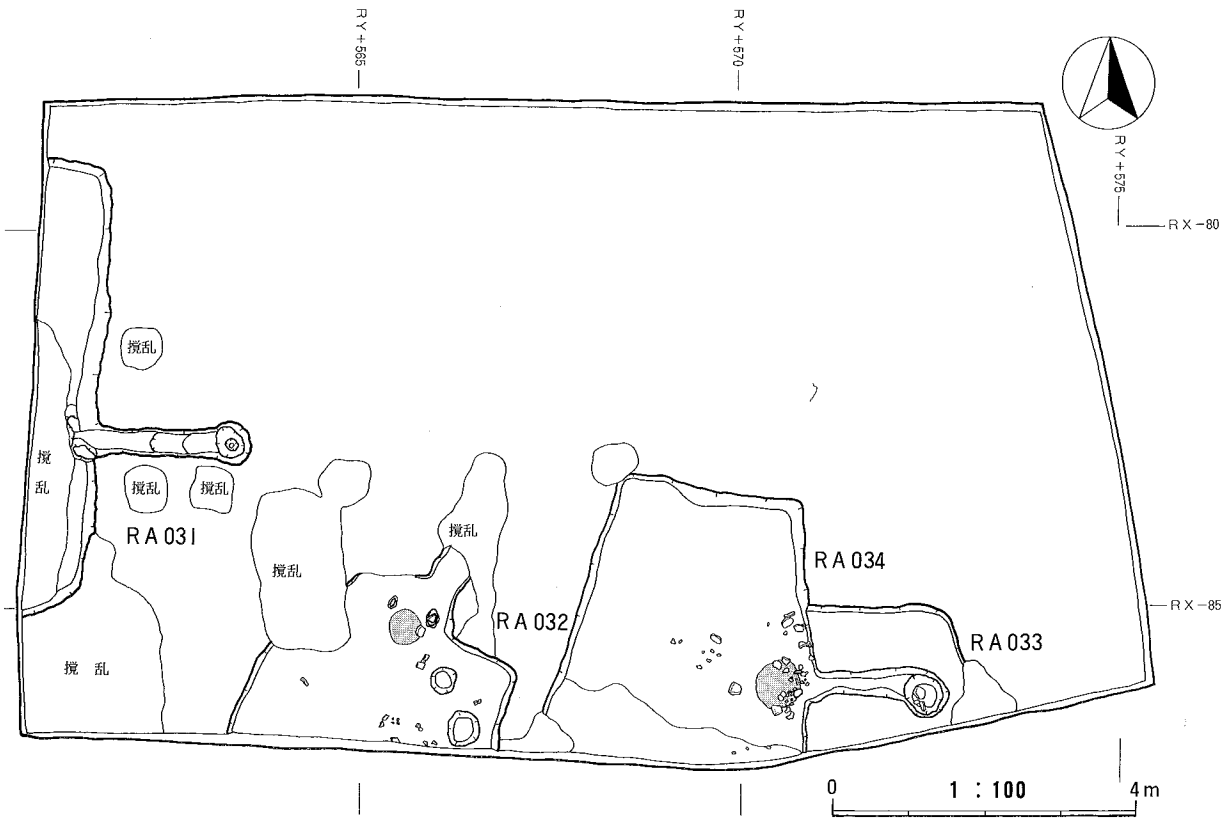
遺跡の掘込面は大きく削平されており、検出面は厚さ0.4ｍ内外の表土層直下の黄褐色シルト層上面である。

調査の結果、平安時代の竪穴住居跡４棟（ＲＡ031～034）を検出した。なお、その遺構分布は調査区南西に集中している。

ＲＡ031竪穴住居跡（第27図）

調査区西端に検出した竪穴住居跡である。平面形の大半は調査区外にのびており、この西側の調査区から0.7ｍ程低い田は遺跡範囲の西限ではなく、後世の削平によるものと確認された。

竪穴の規模は、東西0.5ｍ以上、南北3.40ｍ以上をはかり、平面形は方形ないし長方形を呈するものと思われる。主軸方向はＥ3.5°Ｓを示す。　**規　模**



第26図　松ノ木遺跡７次調査区全体図

埋　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ～Ｃの３層に大別される。Ａ層は粒状の褐色土を若干混入する黄褐色シルト。Ｂ層が褐色土粒をやや多く混入する黄褐色シルト。さらにＣ層が暗褐色土を若干混入する褐色土である。なおＢ層はＡ層に比べて堅くしまっており、カーボン粒も多く含まれている。特に床面直上層であるB_2層には焼土の混入が多くみられた。

床面南半部と南壁の一部は大きく撹乱されている。残存する北半部の床面はほぼ平坦で、壁はこれからゆるやかに立ち上がる。検出面から床面までの深さは0.05～0.30ｍをはかる。床構築土（Ｄ層）は粒状の褐色土と黄褐色土との混合土で堅くしまっている。なおＤ層はかまど火床面付近には構築されていない。

かまど　かまどは東壁やや南寄りに構築されており、長い煙道をもつ構造である。煙道底面は、煙出しに向かって徐々に深くなり、煙出しはピット様に深くなっている。規模は、東壁から煙出し先端まで2.05ｍ、幅0.29～0.57ｍ、検出面からの底面までの深さは0.07～0.47ｍをはかる。崩壊土（Ｊ層）は塊状の焼土を多く含む暗赤褐色土である。残存するそでの規模は南側で長さ0.34ｍ、幅0.25ｍ。北側が長さ0.36ｍ、幅0.17ｍをはかり、火床面ともに撹乱によって削平されている。そで構築土（Ｋ層）は焼土・カーボン粒を混入する赤褐色土と暗赤褐色土の互層で、Ｋ層中には、あかやき土器甕の破片がわずかに含まれる。

遺　物　出土した土器は床面からはなく、そでＫ層、煙出し・煙道Ｊ層、Ａ・Ｃ層から出土している。器種は、須恵器坏・甕、あかやき土器坏・甕、土師器坏・甕がある。鉄器はＡ層から刀子１点、B_2層から形態不明製品が２点出土しているほか鉄滓がある。

ＲＡ032竪穴住居跡（第27図）

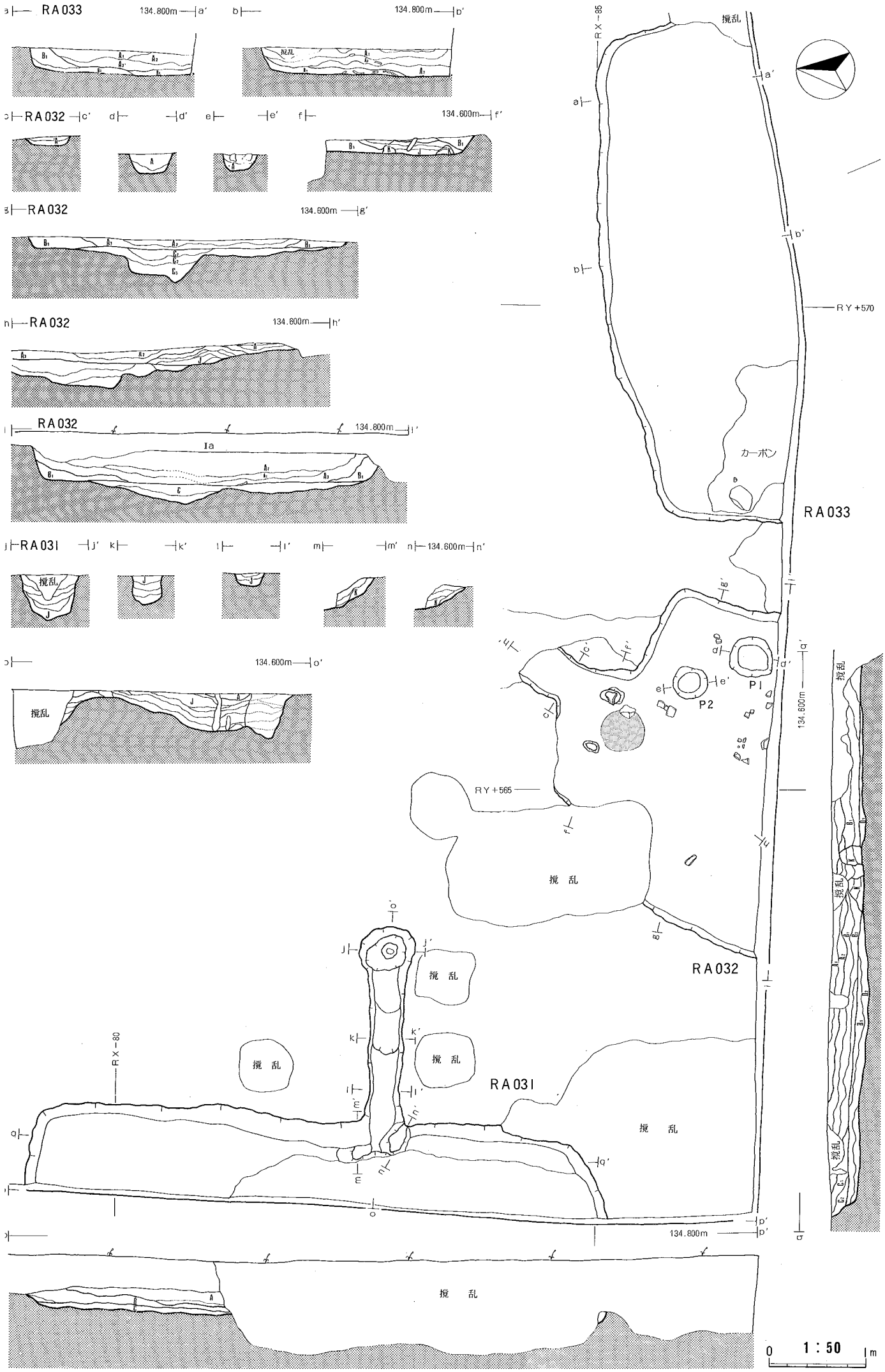
調査区南辺西寄りに検出した竪穴住居跡である。全体形の南半は調査区外に広がっており、竪穴北西部と煙道先端は撹乱されている。規模は東西3.22～3.40ｍ、南北2.30ｍ以上をはかり、平面形は方形～長方形を呈すると思われる。主軸方向はＮ25°Ｅを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で層相の違いによりＡ・Ｂの２層にわかれる。Ａ層は、褐色土粒～塊をわずかに混入する黄褐色シルト。壁際のみに堆積するＢ層は褐色土塊をやや多く混入する黄褐色シルトで、ともにカーボン粒を若干含む。

床面はさほどしまりが良くなく、特に堅い面はない。構築土（Ｃ層）は小塊状の黄褐色シルトと褐色土との混合土である。なお、この構築面は床面中央部がピット様に深くなるほかは浅く起伏のある面となっている。壁は直壁に近い立ち上がりを呈する。

床面上北東には２口のピット（P_1・P_2）を検出している。南側に位置するP_1は径0.42×0.46cm、深さ0.21ｍをはかる。また北側のP_2は径0.34×0.36ｍ、深さ0.16ｍをはかる。ともに底面は平坦で、埋土はＡ層に相当する自然堆積土である事から柱穴とはならない様である。

かまど　かまどは北壁やや西寄りに位置しており、煙道先端は撹乱されている。また、煙道の取り付く北壁は非対称の構造となっており、精査段階でも問題点として残されていたところである。煙道底面は、火床面から煙出し方向にむかって徐々に浅くなる構造である。残存する煙道の規模は長さ1.03ｍ、幅0.44～0.52ｍ、検出面からの深さは0.07～0.18ｍをはかる。かまど崩壊土（Ｊ層）は粒～小塊様の焼土が層状に堆積する暗赤褐色土で住居埋土への混入はほとんど認められない。なお煙道先端方向の埋土はＡ層に相当するが、煙道天井部の構築土の可能性もある。



第27図　ＲＡ031・032・033竪穴住居跡

かまどそでではわずかに残存しており、規模は南そでが長さ0.24m、幅0.16m。北そでは長さ0.18m、幅0.11mをはかる。ともに煙道部分との取り付き部分はすでに削平されている。構築土（K層）は黄褐色シルトを主体としており、混入土はほとんど含まない。なお、南そで中にあかやき土器甕の破片が補強材として用いられている。火床面は両そでの南側に径0.45mの円形の範囲に認められた。浸透層の厚さは0.06m程で堅く赤変している。なお、火床面下のかまど構築土は認められなかった。

遺　物　遺物の出土状況は、床面上東半部から須恵器坏、土師器甕がまとまって出土しているほか、埋土からはA・J層に小片が多く包含されている。器種では上記のほか須恵器甕、あかやき土器坏、土師器坏・埦がある。なお坏はいずれも底部切離しは糸切で再調整を施していない。鉄器はA_2層から1点出土しているが形態不明である。

RA033竪穴住居跡（第27図）

調査区南辺東寄りに検出した竪穴住居跡で、全体形の南半部は調査区外に広がる。なお、平面形の西半部は後述するRA034に切られる。また、東壁と西壁上端の一部は撹乱されている。

規　模　規模は東西5.00～5.16m、南北2.05m以上をはかり、全体形は方形～長方形を呈すると思われる。

埋　土　埋土は、自然堆積で層相の違いによりA・Bの2層にわかれる。A層は粒状の褐色土をわずかに混入する黄褐色シルト。B層が粒～小塊状の褐色土を若干混入するやはり黄褐色シルトである。なおB層にはカーボン粒が若干含まれるが、この頻度が高いB_2層は東半部のみに堆積している。床面はほぼ平坦で特に堅い面が認められず、全体にさほどしまりは良くない。なお、西端床面上には不整形の範囲にカーボンが分布している。検出面から床面までの深さは0.25～0.29mをはかる。床構築土はなく、壁はほぼ直壁に立ち上がる。かまどは未検出で、住居埋土への崩壊土の混入も認められない。

遺物は、床面西壁際から安山岩製の自然石、あかやき土器甕の小片のほかはいずれも埋土中からで、特にB層にまとまって包含されている。いずれも小片である。

RA034竪穴住居跡（28図）

調査区南辺中央に検出した竪穴住居跡で、かまどから東半部はRA033に切られる。なお全体形の南側は調査区外にのびており明確ではないが、北辺に対し南辺が広い事からやや不整な

規　模　台形を呈するものと思われる。規模は、東西2.46～3.50m以上、南北3.75m以上をはかり、主軸方向はE0.5°Sを示す。

埋　土　埋土は自然堆積で、層相の違いによりA′・B′の2層に大別される。A′層は粒状の褐色土を若干混入する黄褐色シルト、B′層が同じく褐色土粒をわずかに混入する黄褐色シルトで、ややグライ化気味である。各層とも堅くしまりがよく、カーボン粒を若干混入する。

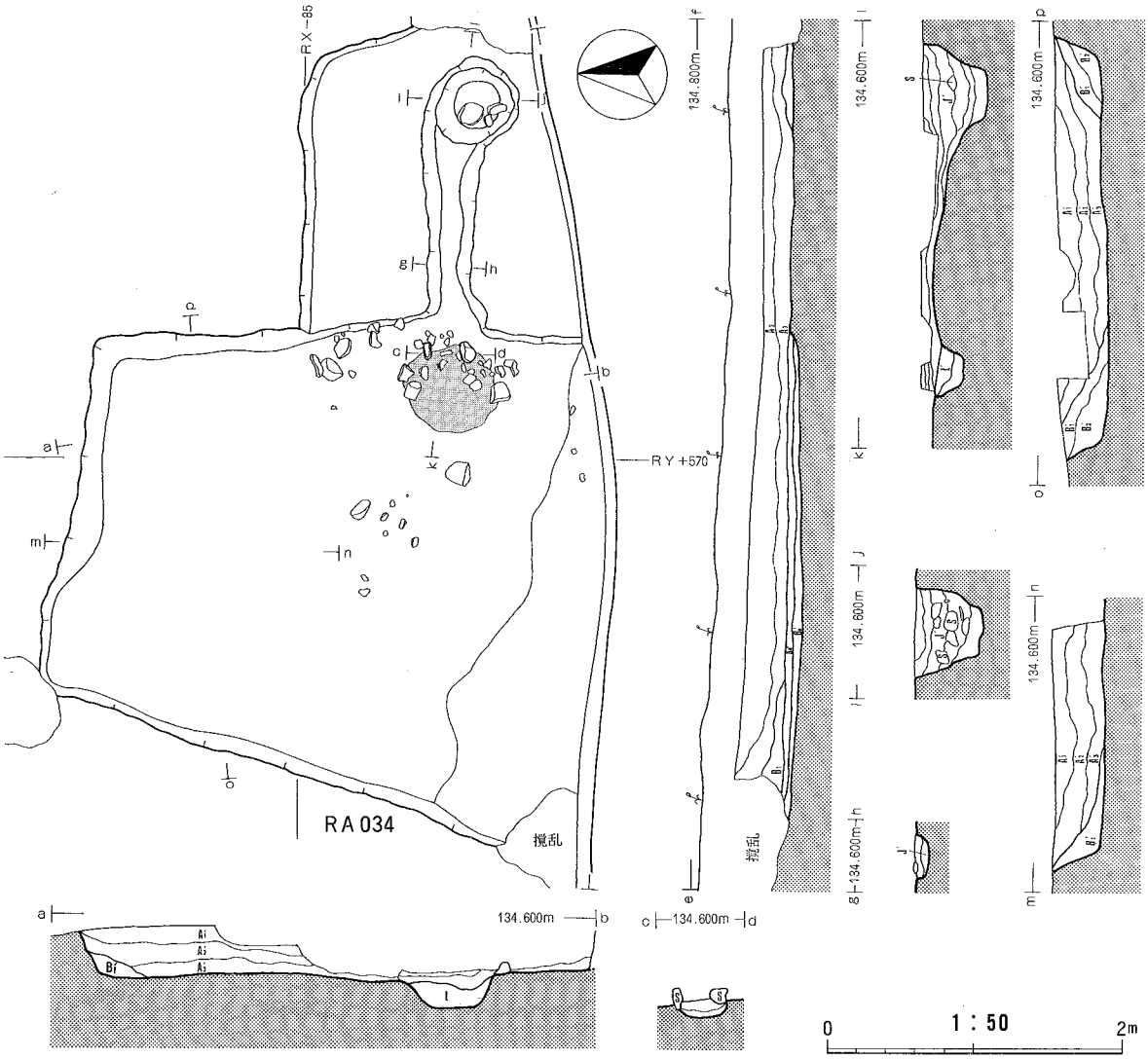
床面はほぼ平坦で顕著な起伏はない。床構築土はなく黄褐色シルト層中位をそのまま床面としており、検出した床面積の北側約⅔がやや堅くしまっている。壁は北東側がゆるやかな傾斜であるが他はほぼ直壁である。検出面から床面までの深さは0.30～0.35m、RA033の床面からの深さは0.05～0.08mをはかる。

かまどは検出した東壁南寄りに位置しており、長い煙道をもつ。煙道底面は煙出しに向って徐々に深くなり、この煙出しはピット状に深くなる。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.85m、幅0.29～0.62m、検出面から底面までの深さ0.07～0.44mをはかる。そでは残存していない。火床面は壁内に径0.6m内外の円形の範囲に認められ、この浸透層は厚さ0.01m程でさほど焼けていない。また、火床面東端には円礫を直立させた1対の支脚があり、この下面にはかまど地業にともなう径0.35×0.60m、深さ0.18mの楕円形のピットが構築されている。構築土（L′層）は焼土粒を若干混入する暗褐色土で堅くしまっている。かまど崩壊土（J′層）は黄褐色土粒をやや多く混入する褐～暗褐色土で、焼土・カーボンを多く含むしまりのよい土質である。

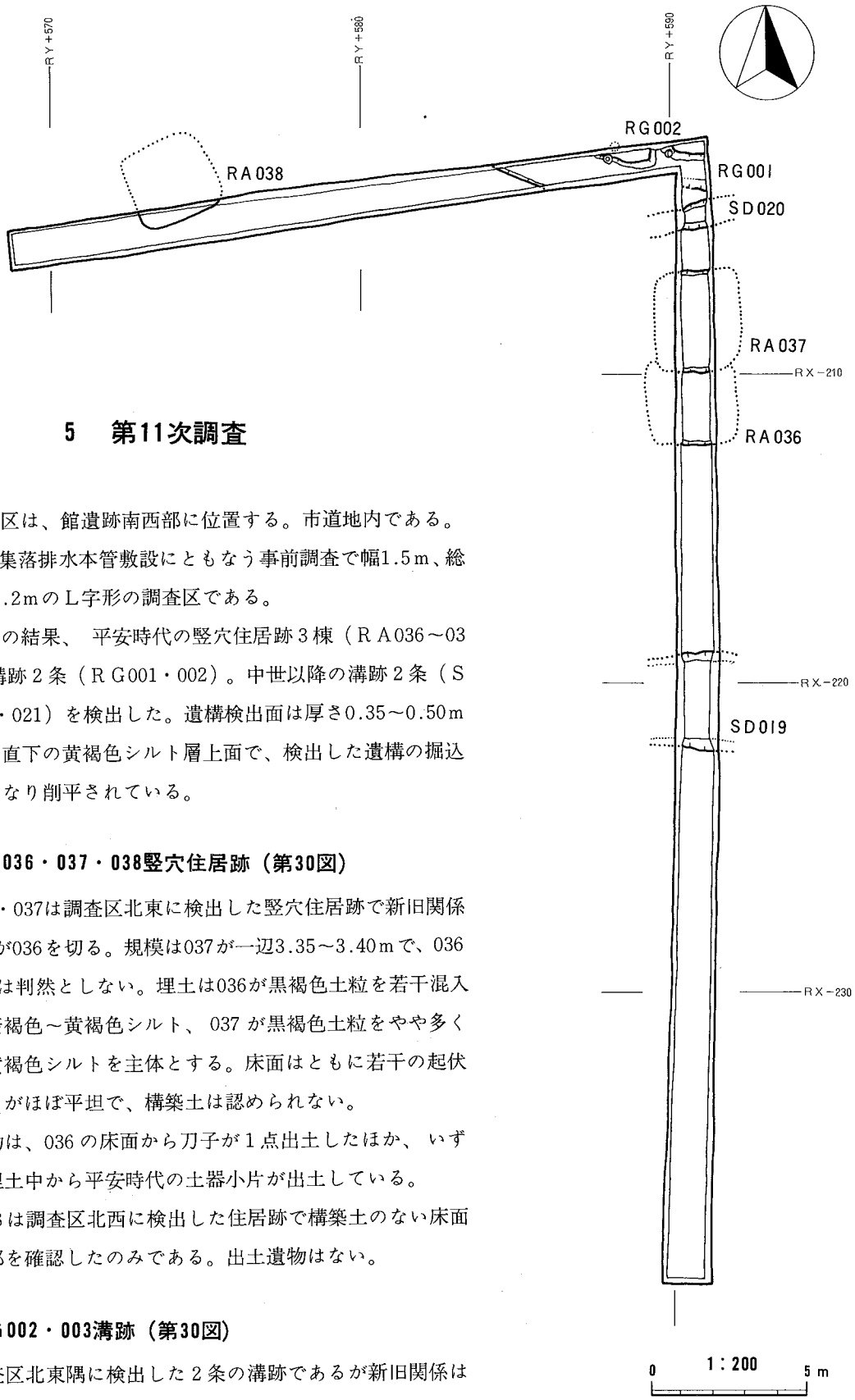
かまど

火床面を中心とする床面からは、かまど施設に使用されたと思われる赤変した自然円礫とともに多くの土器が出土しているほか、J′・A′層にも小片が多く包含されている。出土した土器は多種にわたり、底部切り離しヘラ切無調整の須恵器坏、あかやき土器小形甕のほか体部外面ヘラナデ、内面にはハケメを施す土師器甕がある。鉄器はA層から2点出土している。

遺　物



第28図　ＲＡ034竪穴住居跡



第29図　館遺跡11次調査区

5　第11次調査

調査区は、館遺跡南西部に位置する。市道地内である。調査は集落排水本管敷設にともなう事前調査で幅1.5m、総延長58.2mのL字形の調査区である。

調査の結果、平安時代の竪穴住居跡3棟（RA036～038）、溝跡2条（RG001・002）。中世以降の溝跡2条（SD020・021）を検出した。遺構検出面は厚さ0.35～0.50mの表土直下の黄褐色シルト層上面で、検出した遺構の掘込面はかなり削平されている。

RA036・037・038竪穴住居跡（第30図）

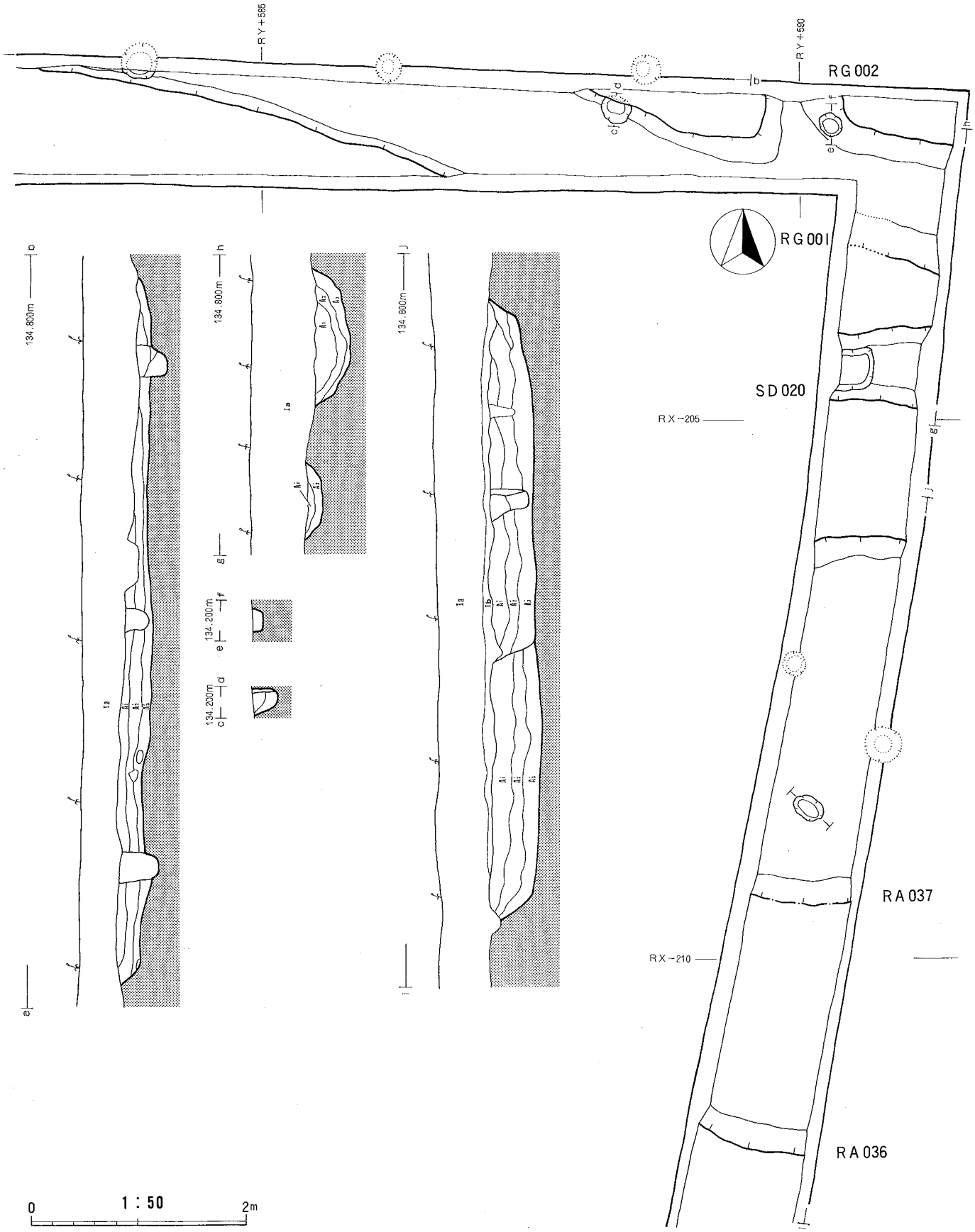
036・037は調査区北東に検出した竪穴住居跡で新旧関係は037が036を切る。規模は037が一辺3.35～3.40mで、036・038は判然としない。埋土は036が黒褐色土粒を若干混入する暗褐色～黄褐色シルト、037が黒褐色土粒をやや多く含む黄褐色シルトを主体とする。床面はともに若干の起伏があるがほぼ平坦で、構築土は認められない。

遺物は、036の床面から刀子が1点出土したほか、いずれも埋土中から平安時代の土器小片が出土している。

038は調査区北西に検出した住居跡で構築土のない床面の一部を確認したのみである。出土遺物はない。

RG002・003溝跡（第30図）

調査区北東隅に検出した2条の溝跡であるが新旧関係は不明である。埋土は竪穴住居跡と共通し、やはり平安時代の土器が多量に出土している。



第30図　ＲＡ036・037竪穴住居跡、ＲＧ002・003溝跡

Ⅳ　調査遺構のまとめ

1　竪穴住居跡の分布と構造

これまでの館・松ノ木遺跡第１～12次とこれにともなう補足調査によって遺跡の範囲が明らかになりつつある。両遺跡は水路を境として約0.7ｍの段差をもち微高地となる南側の館遺跡と北側の松ノ木遺跡にわかれる。なお松ノ木遺跡は西側の雫石川による浸食面と約1.0～1.7ｍの比高差をもつ段丘上に立地している。また、本書で報告したように両遺跡には古代の集落がまたがって営なまれる。一方､館遺跡は古来から中世（元亀・天正年間）を通じてこの地に居を構え、天正六（1573）年に雫石斯波氏によって焼討された南部氏家臣太田氏の城館「太田館」があったところと伝えられ、大松院を中心とする小字名「館」の一帯が考えられていた。

調査によって堀・溝などの曲輪を区画する遺構が確認され、館跡がおよそ東西200～220ｍ、南北110～150ｍの範囲であった事が徐々に解明されつつある。しかしながら館跡にともなう建物跡が未検出で、出土遺物も中世まで上るものは現在のところ確認されていない。

また、「太田館」跡と別な性格をもつ古代の集落としての両遺跡は12次までの調査によって竪穴住居跡38棟（ＲＡ001～038）、竪穴２棟（ＲＦ007・025）、土坑６基（ＲＤ001～006）、溝跡３条（ＲＧ001～003）の遺構を検出し８世紀末から９世紀末までのおよそ100年間にわたって営続された集落であった事が判明した。これらの遺構の分布は第８次調査区東端に竪穴住居跡１棟（ＲＡ035）が位置するものの、これ以外は遺跡群西半部の第１・２・６・７・11次調査区だけからの検出であり、この中でも１・２次調査区に密集している。なお、遺跡一帯における調査面積はわずかであるが、かなり大規模な集落であった事が窺える。ここでは検出した遺構のうち集落の中で主要をなす竪穴住居跡の構造について概観することとする。

規　模

竪穴住居跡の規模をみると、最も小さいのは１次調査区南西検出の010で東西2.51ｍ、南北2.45ｍをはかり、次いで東西2.83ｍ、南北2.99ｍの002がある。また最も大きいのは010に北東を切られる009で東西5.96ｍ、南北7.08ｍをはかり、次いで一辺６ｍ規模の006・013がある。009は010の床面積でおよそ７倍の広さで大きな格差をもつが、これ以外の住居跡は一辺３～４ｍの規模にまとまっている。

平面形

平面形は検出した住居跡の半数以上にあたる21棟が重複関係や削平、または調査区外への広がりによって全体形が不明であるが、残る18棟は、034が台形でやや特異であるほか002～005・007・010・011・013・021・025・026の11棟が方形、006・009・014・017・018の５棟が長方形を呈する。なお形状と規模との相関関係はない。

かまど位置・主軸方向

かまどの位置は、38棟中007・025の２棟の竪穴を除く36棟中11棟がかまど未検出である。東壁に構築される16棟のうち北寄りは002・006・008・011～013・017の７棟、南寄りが004（005）・013・014・020・021・031の７棟、位置のみの確認が029・030の２棟、北壁に構築されるのは２棟で、018が東寄り、西寄りが032であるが、これを主軸方向でみると東から南に振れるの

が002・004（005）・008・011～014・017・020・021・030・031の13棟で8.5°～47°の範囲を示す。また北から東に振れるのは018と032で24.5°～25°を示す。西壁に構築されるのは5棟で035は竪穴が未検出のため不明であるが、残る003・009・016・026の4棟はいずれも西壁ほぼ中央に位置し、主軸方向は西から北へ4.5°～24.5°の範囲を示している。さらに南壁に構築されるのは010のみで西寄りに位置し、南から西へ22°の振れを示している。

ピット

次に竪穴の溝造をみると住居にともなうピットを検出したのは002～006・009・012～014・016～018・020・032の14棟で約4割を占める。このうち003・006・009と013の一部のピットは柱穴を構成するもので、003を除いて比較的規模の大きな住居に検出されている事が特筆される。特に006は4本の柱穴が規則的に配置されている。なお、この4棟以外の住居跡床面に検出した小ピットは比較的浅く、調査では確認できなかったが遺構埋土を掘り込む新しい時期の柱穴であった可能性がある。

貯蔵穴

貯蔵穴が検出されたのは004・005・012・013・018・020・023の7棟でいずれも火床面脇の壁際に構築されるが、この火床面に対しての左右の位置にはバラエティがあり一定していない。また、018で認められた壁を袋状に構築する貯蔵穴は他の遺構にはなく、竪穴の掘り込みが深い竪穴の特徴であろう。

構築土

次に床構築土（貼床）をみると、検出されたのは006・012～014・016～021・023・031・032の13棟で、床面が未検出の6棟を除く32棟の約4割にあたる。この中で火床面地業の下面にピット状の構築面をもつのはRA012・013・019の3棟のみで、他は起伏はあるがこれも顕著ではなく、むしろ平坦に近い構築面に構築土を貼っている。また006や021にみられるように床面全域を掘りこまず、一部分のみに構築する遺構も認められた。なお各調査区で検出した住居跡に比較して1次調査で検出した構築土をもつ住居跡は006の1棟と少なく、隣接する調査区の遺構と様相を異にしているが、これは地山であるシルト層下面の砂礫層が1次調査区では浅く、これをそのまま床としているのに対し、2次調査区では砂礫層が深くなっており、このような地形的要因に左右された事も考えられるが判然としない。

煙出し

かまどは38棟中16棟が重複関係などの削平によって不明で、残る22棟中造り変えまたは共存関係が認められたのは003・004と005・013の4棟である。かまど施設の構造は煙出し、煙道底面、支脚、そで、さらに火床面の位置について分類し、表2に記号であらわした。このうち煙出しは個々の住居跡で特徴が認められる。表2で1－ピット状を呈するもの、2－煙道から煙出し先端にかけて深く傾斜するもの、3－煙道底面は傾斜がなくほぼ平坦なもの、4－煙道底面から煙出し先端にかけて浅く傾斜するものにわけると、1は003・004・012・018・020・031・034の7棟、2が005・009・013・021の4棟、3が006・008・014・026・030の5棟、さらに4が002・013・015・022・024・029・032の7棟と、多様な構造を呈する。なお竪穴規模とは関連しない。

煙　道

煙道はA－溝状に長いものとB－土坑状に丸味を呈し斜面を呈するものに分類すると、残存する23基中003新期と008の2基が土坑状を呈し、他はいずれも溝状の煙道であるが、003・008も基本的には溝状の平面形を意図して構築したと考えられる。

支　脚

支脚が検出されたのは8棟9基のかまどで、他の住居跡はかまど天井部とともに崩壊している。なお施設として、a－甕底部と礫を併用するもの。b－坏と礫を併用するもの。さらにc－礫のみと分類すると、aは004と006のみで、他の6基は礫のみの検出であるが、礫はかまど地業中に据えられ固定されているのに対し、土器は礫上に不安定な状態で伏せられているため

表 2　　館・松ノ木遺跡検出

番号		竪穴規模（数値は平均値）					竪穴構造		
図番号	遺構名	平面形	主軸方向	かまど位置	東西	南北	ピット	貯蔵穴	構築土
5	RA001	—	—	—	—	—	—	—	—
5	RA002	方形	E16.0°S	東壁北寄り	2.83	2.99	1	—	—
5	RA003	不整方形	W24.5°N	西壁中央	4.48	4.74	11	—	—
6	RA004 005	方形	E11.5°S E39.5°S	東壁南寄り	5.95	5.94	1	2	—
7	RA006	長方形	N34.0°E	東壁北隅	6.97	5.63	5	—	0
8	RF007	方形	—	—	3.13	3.06	—	—	—
9	RA008	方形～長方形	E36.0°S	東壁北隅	4.90以上	4.10以上	—	—	—
10	RA009	長方形	W 4.5°N	西壁中央	5.96	7.08	2	—	—
11	RA010	方形	S22.0°W	南壁西寄り	2.51	2.45	—	—	—
12	RA011	方形	E8.5°～10.0°S	東壁北寄り	3.18	3.64	—	—	—
13	RA012	方形or長方形	E26.0°S	東壁北隅	4.10以上	4.84	2	1	0
14	RA013	不整方形	北E33.6°S 西E47.0°S	東壁中央北・南寄り	5.98	6.17	9	1	0
15	RA014	長方形	かまどE42 0°S 竪 穴E14 0°S	東壁南東隅	5.1 内外	3.99	5	—	0
15	RA015	—	—	南壁	—	—	—	—	—
16	RA016	方形or長方形	W20.5°N	西壁中央	4.09	4.0 内外	1	—	0
17	RA017	長方形	E15.0°S	東壁北東隅	2.83	3.3 以上	1	—	0
18	RA018	長方形	N24.5°E	北壁東寄り	4.53	3.17	2	1	0
19	RA019	—	—	東壁	—	—	—	—	0
20	RA020	方形or長方形	E19.5°S	東壁調査区際	4.63	3.45以上	1	1	0
21	RA021	不整方形	E33.0°S	東壁南寄り	3.00	3.15	—	—	0
13	RA022	—	—	西壁	—	—	—	—	—
19	RA023	方形or長方形	N82.0°E	—	2.55以上	3.05	—	1	0
14	RA024	—	—	—	—	—	—	—	—
22	RF025	方形	—	—	3.78	3.83	—	—	—
24	RA026	方形	W 6.0°N	西壁中央	2.86	3.18	—	—	—
25	RA027	—	—	—	2.14	2.05以上	—	—	—
25	RA028	—	—	—	2.70以上	1.30以上	—	—	—
25	RA029	—	—	東壁	—	—	—	—	—
25	RA030	方形～長方形	E10.5°S	東壁調査区際	3.61	3.25以上	—	—	—
27	RA031	方形or長方形	E 3.5°S	東壁南寄り	0.50以上	3.04	—	—	0
27	RA032	方形～長方形	N25.0°E	北壁西寄り	3.31	2.30以上	2	—	0
27	RA033	方形～長方形		—	5.08	2.05	—	—	—
28	RA034	不整台形	E 0.5°S	東壁南寄り	2.98	3.50	—	—	—
—	RA035	—	—	西壁	—	—	—	—	—
30	RA036	—	—	—	—	—	—	—	—
30	RA037	—	—	—	—	3.3	—	—	—
—	RA038	—	—	—	—	—	—	—	—

竪穴住居跡、竪穴一覧

かまど構造						重複関係		鉄器・砥石	時期
煙出し	煙道	支脚	そで	火床面	地業	新しい遺構	古い遺構		
—	—	—	—	—	—	SD001	RA002		—
1	A	—	—	II	—	SD001	RA003		9後
1	B	—	—	I	—	SD001		刀子2、砥石3	9後
2 1	A A	a c	イ	I —	—	SD001、SK004～006・008 RA006		刀子等8 砥石1	9後
3	A	a	ア	I	0	SD001、SA003、SK007	RA004・005・009	刀子3、鏃4	9後
—	—	—	—	—	—		RD001		9前
3	B	—	イ	I	—	SA001、小柱穴			9前
2	A	—	エ	I	—	SI001、RA006・010			9前
—	—	—	ア	—	—		RA009		9後
—	—	—	イ	—	—	SI003			9前
1	A	c	ア	I	0	SK018・019、RA022	RA016・019・023		9後
2 4	A	—	イ	I	—	SA006・007、小柱穴	RA016・020・023・024	刀子1	9後
3	—	—	—	—	—	SD001、SK012・020 小柱穴		刀子？1	9後
4	A	—	—	—	—			鏃？1	9前
4	A	—	イ	I	0	SK018、RA012・013	RA019・020		9前
—	—	c	エ	I	—	SK017・018			9前
1	A	c	ア	I	0	SA004（RG001と重複）		刀子1、砥石1	9前
—	—	—	—	—	—	SK019、RA012、RD002		刀子1	—
1	A	c	イ	I	0	SA007、SK010・011、RA013		刀子1	9後
2	A	—	ア	I	0	SD002、RG001？		刀子1	—
4	A	—	—	—	—	SK018	RA012		—
—	—	—	—	—	—	SK018、RA012・016・022			—
4	A	—	—	—	—	RA013			—
—	—	—	—	—	—	SF001	RD006		—
3	A	—	エ？	I	—				8末
—	—	—	—	—	—			刀子？1	8末
—	—	—	—	—	—				8末
4	A	—	—	—	—	RD007、RA030			8末
3	A	—	—	I	0	RD007	RA029		9後
1	A	—	ウ	—	—			釘1、不明2	8末
4	A	—	ウ	I	—			不明1	9後
—	—	—	—	—	—		RA034		—
1	A	c	—	I	0	RA033		不明2	8末
—	A	—	—	—	—				—
—	—	—	—	—	—	RA037			9後
—	—	—	—	—	—		RA036		9後
—	—	—	—	—	—				—

め失なわれた可能性が強い。

そで　そでの構造は礫とシルト、礫のみ、シルトと土器、シルトの４分類とし、それぞれア・イ・ウ・エとした。残存するかまどは16基で支脚同様、既に失なわれている住居跡が多い。内訳はア－006・010・012・018・021の５棟、イ－005・008・011・013・016・020の６棟、ウ－031・032の２棟、エ－009・017・026の３棟である。なお、このように礫のみの施設が多く検出されているが、シルトは欠失したと考えられ、むしろ施設の強度からはシルトを多用したと考えられる。

火床部　火床部は残存・検出状況から確認できたのは002～004・006・008・009・012・013・016～018・020・021・026・030・032・034の18棟でⅠ－構築される壁面より内側の壁内、Ⅱ－壁から煙道にまたがる壁中とに分類すると002だけが壁中で、他はいずれも壁内に位置する。なおこの火床面下に構築される地業をみると18棟中で006・012・013・016・018・020・021・030・034の７棟をかぞえる。

かまど地業

遺構年代　検出した竪穴住居跡から出土した土器などの遺物は紙数の都合により掲げられないため個々の遺構年代の説明が不十分であるが、概要を記すると８世紀末葉から９世紀末葉までの時間幅で集落が存続したものと考えられる。検出した住居跡で最も古い様相を呈するのは松ノ木遺跡６次調査で精査した026・027・028・029である。底部ヘラ切後再調整を施すものと糸切無調整の須恵器坏とともに、ロクロ未使用で内外面ヘラミガキし内面黒色処理を施す土師器小形坏と、ヘラミガキとハケメ調整多用の土師器甕などが出土している。９世紀初頭の志波城跡出土の土器より古い特徴を備えている。次いで１・７次で検出した007・008・031・034ではヘラ切無調整の須恵器坏とともに丹塗の土師器甕があり、８世紀末葉に位置付けられるものと考えられる。なお、001・019・021～025・033・035・038の10棟が時期不詳であるが他の住居跡を盛岡周辺の土器組成により大きく前半と後半に分類すると前半が009・011・016～018の６棟、後半が002～006・010・012～014・030・032・036・037の14棟にわかれる。さらに遺構の重複関係や坏の調整・法量・甕類のあり方から細分が可能であるが、詳細は土器編に総括することとする。

以上の大まかな時期区分により各期の住居跡の特徴をみるとその分布は最も古い一群は６次調査区北半に限定して集中し、次いで９世紀初頭段階の住居跡は１次の北西部と７次の南端に位置している。さらに９世紀前半から後半・末葉にかけては集落の主体が段丘面で松ノ木遺跡より一段高い館遺跡へと移行している。規模をみると９世紀前半以前の竪穴は一辺２～４ｍと小さく、唯一009が大きい。９世紀後半以降には004～006・013など大形が増え、小規模な住居跡と混在する。なお盛岡周辺の奈良時代以前の集落では小規模な住居跡を主体とし大きな住居が象徴的に含まれる。また10世紀以降には住居跡は４～５ｍ規模に均一化され、大きな住居跡にかわって掘立柱建物跡にその役割が移行する傾向が認められ、社会構造の転機があったとみられる。次にかまどの構造をみると方向は９世紀前半以前の時間幅の中でかなり個性をもち、逆に後半以降になると003・010以外の竪穴の主軸は南東方向に集約される。この事は盛岡周辺の８～10世紀の集落と一致するが、031等８世紀末葉の住居跡にみられる東かまどは多くない。またかまど構造からは各期の特性が認められず、さらに遺物による時間帯の中で検討を要する。

2　中世以降の遺構

館・松ノ木遺跡の12次までの調査のうち７次調査を除く調査区で中世以降にかかわると思われる遺構が検出されている。これらの遺構の埋土は本文中で述べたとおり暗褐色～黒褐色を呈しており、古代の埋土が黄褐色シルトを主体とするのに対し、明らかに時間差としてとらえられるものである。しかしながら出土遺物は現在のところ中世まで上るものはなくすべて近世以降の遺物であるが、堀・土塁などの遺構のあり方は中世にまで上る事が可能である事から本文中での遺構区分はこれに従っている。なお、本書では古代の遺構のみの報告のため、中世以降の報告は別書とするが、各次数の調査区で検出した遺構のうち太田館との関係から区画施設となる堀・溝跡を中心として概要を記する（表１・第３図参照）。

１次調査で検出した遺構のうち東半部で検出した南北に走向するＳＤ001溝跡は幅7.0～11.6ｍ、深さは検出面からが最深部でも0.7ｍ程の浅い溝跡である。南端は調査区内で浅くなり途切れるが、北側は２次調査区内東側へと続く。なお２次では調査区北端で東西方向のＳＤ002堀跡を検出しており、北東隅ではこれから南方で屈曲し浅くなる事を確認している。この堀跡は旧水路に重複しているため大半が撹乱されているが壁際から底面にかけて埋土が遺存していたものである。復元される規模は深さ約2.1ｍ、幅６～７ｍで箱薬研堀とみられる。また、この南側の高まりにはＳＦ001土塁が検出されている。ＲＤ003から021にかけては薄層の黒色土がわずかに認められる程度であったが、東端では高さ約0.4ｍの高まりが残存していた。これも樹木によって北半が撹乱されているが、基底幅は３ｍ前後であったと推定される。前述のＳＤ001はこの土塁の南側に沿い、さらに南側に屈曲しておりＳＤ001・002・ＳＦ001は一連の区画施設として考えられる。

1次調査

2次調査

１次調査区の南東で実施した３次ではＳＤ003～006の４条の堀跡を検出している。南側調査区中央に検出した003は最も新しい北西～南東走向の小規模な堀跡で、規模は幅約2.6ｍ、深さ0.8ｍをはかる。003の西側に検出した北東～南西方向の004は003に切られ。005を切る。重複遺構のため規模は明確でないが、幅約6.5ｍ、深さ約1.4ｍをはかる。また東側に検出した北西～南西走向の005は003・004に切られる。全幅は７ｍ前後と推定され、壁中位に段を設ける立ち上がりを呈する。深さは約1.4ｍである。さらに北側で検出した006は大半を撹乱されるが、壁の傾斜から北東～南西走向の堀跡である事を確認している。深さは約1.3ｍで埋土は004に似るが溝方向の違いから別遺構としたが004と同一の可能性もある。

3次調査

３次調査区の南側では10・11次及びこれにともなう補足調査により堀・溝跡を検出している。10次調査で検出した南北走向の019堀跡はこの東側で実施した補足調査とあわせ幅約5.5ｍ、深さ約1.5ｍの規模である事を確認している。なお埋土は005と似るが判然としない。また、10次調査の西側の立会調査でも小規模な堀跡の平面形を一部確認しているが未精査である。11次では調査区南側で検出した。ともに東西走向の020と北東隅の021がある。このうち020は幅3.1ｍ、深さ0.5ｍをはかりやや幅広く浅い溝跡である。

10･11次調査

２次調査区の北東では４次を実施している。大松院境内の池北～西に認められる高まりを土

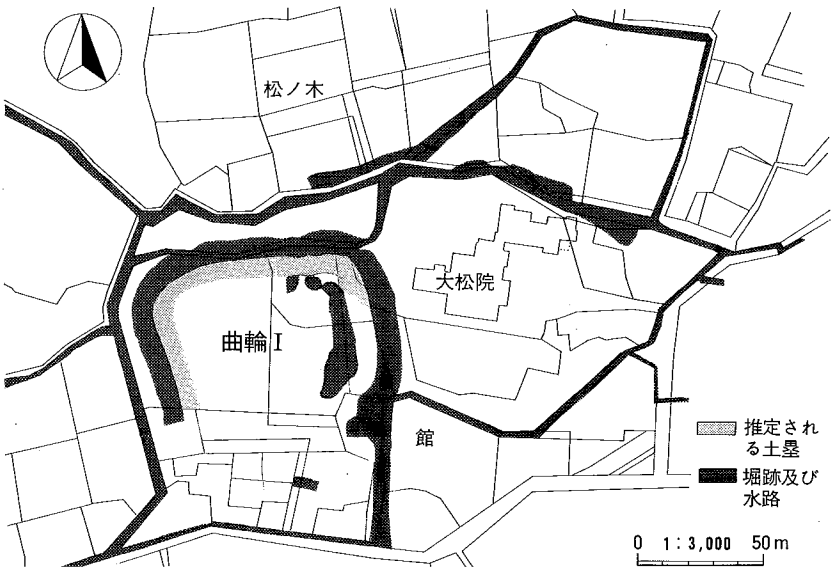
4次調査

塁との関連からトレンチによる確認調査を実施した。その結果、1.5～2.2mの盛土層下面から約 0.1m厚の人骨包含層とこの下面から人骨頭部とともに「寛永通寶」や煙管を副葬する近世墓が検出され、盛土層はこれより新しい構築であるこが判明している。この東方５次では007堀跡を検出している。松ノ木遺跡では６次調査区南端で東西走行の012堀跡、８・９次でもやはり東西走向の013堀跡を検出している。なお007と013は埋土から別の区画となる堀である。

5・6・8・9次調査

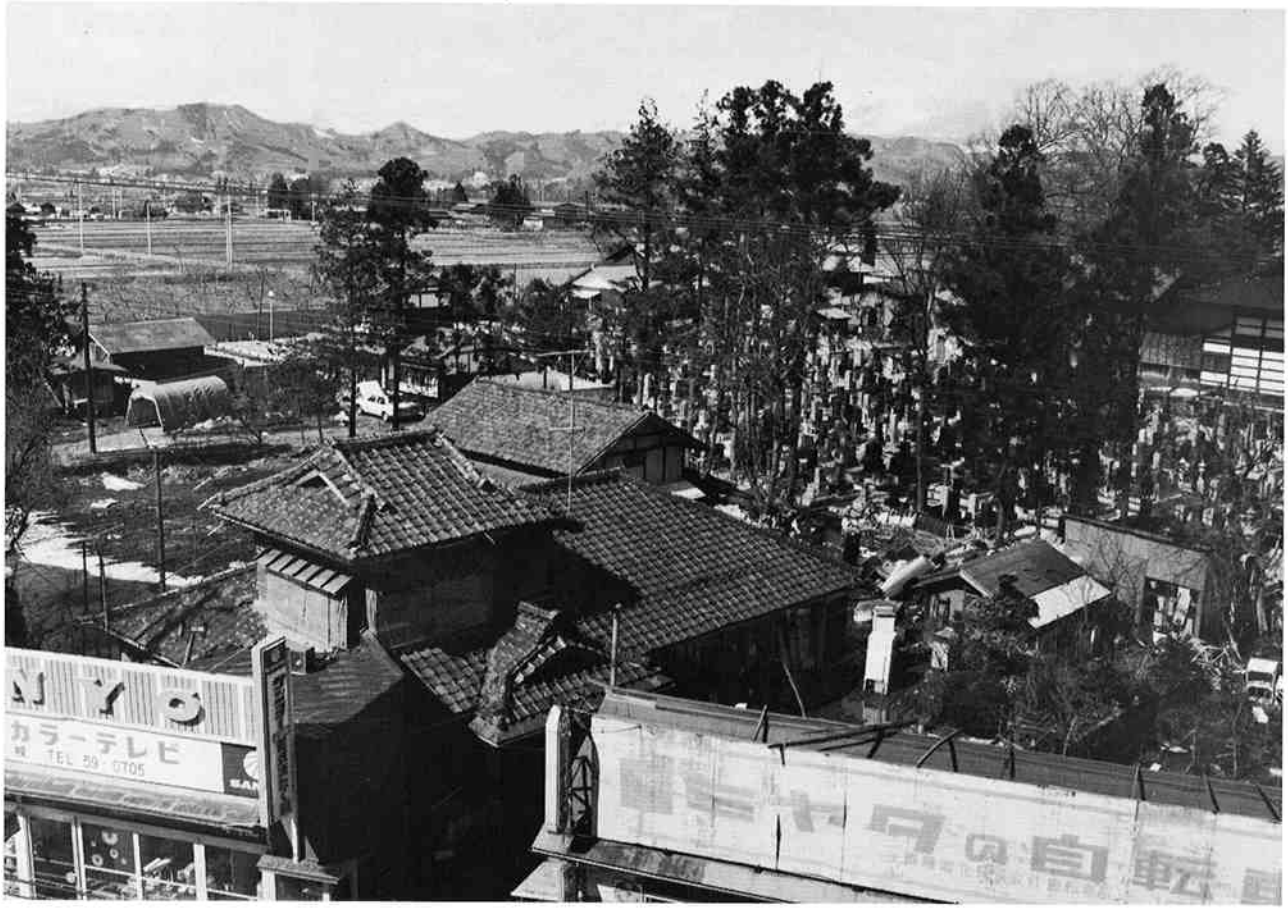
館遺跡は古代の集落であるとともに中世の城館跡でその一部は近世以降から大松院が存続してきた。城館跡の遺構は近世以降の耕作と宅地化により、現地表面ではほとんど観察できず、１・２次調査区の西方に曲輪の北西隅を形成する土手がみられるのみであった。これまでの調査によって、少しづつではあるが城館跡の縄張りを知る手がかりが得られつつある。ここではこれまでの調査成果を圃場整備以前の地割に重ねて、城館の構造を可能な範囲で復元したい。

まず第１・２次調査では、曲輪の北辺を画す土塁（ＳＦ001）、堀跡（ＳＤ002）、東辺土塁内側の堀跡（ＳＤ001）があり、第３次調査では北辺の堀跡から東辺の堀跡コーナー部分、曲輪の南東部分の堀（ＳＤ003～006）が確認されている。調査区西側の残存地形とあわせて考えれば第１～３次調査は曲輪のほぼ東半部を中心に実施したことになり、東西80～90m、南北約60m以上の曲輪が復元される（曲輪Ｉ）。南辺の現況は平坦な地形で遺構も未検出のため不明確であるが、北辺の土塁から約60mのところに東西方向の細長い地割りがあり。このあたりに塁濠の存在が推定される。東辺土塁の推定位置も南北の細長い地割りとなっている。周辺部の調査では、圃場整備前の用水堰や堰に併行する堀跡が検出されている。大松院北側では用水堰と重複する堀跡が確認され、17世紀後半から18世紀初頭の肥前磁器が出土している。曲輪Ｉの西から北にかけては堀のさらに外側に大形の用水堰がめぐっており松ノ木遺跡第６次調査ではこれに併行する大溝（堀）が確認されている。これら周辺部の用水堰は堀跡を通じている可能性が強い。曲輪Ｉは内郭の可能性があり、周辺部の用水堰や堀は外郭部を構成する曲輪の堀と考えられる。城館にともなう遺物としては陶磁器は皆無である。ＳＤ001コーナー部分から小刀の縁金が出土しているのみであり、明確な遺構の年代は不明である。５次調査で出土した17世紀後半から18世紀初頭の肥前磁器は国産磁器の消費が拡大する以前の年代であり、隣接する大松院との関連で考えるのが妥当であろう。

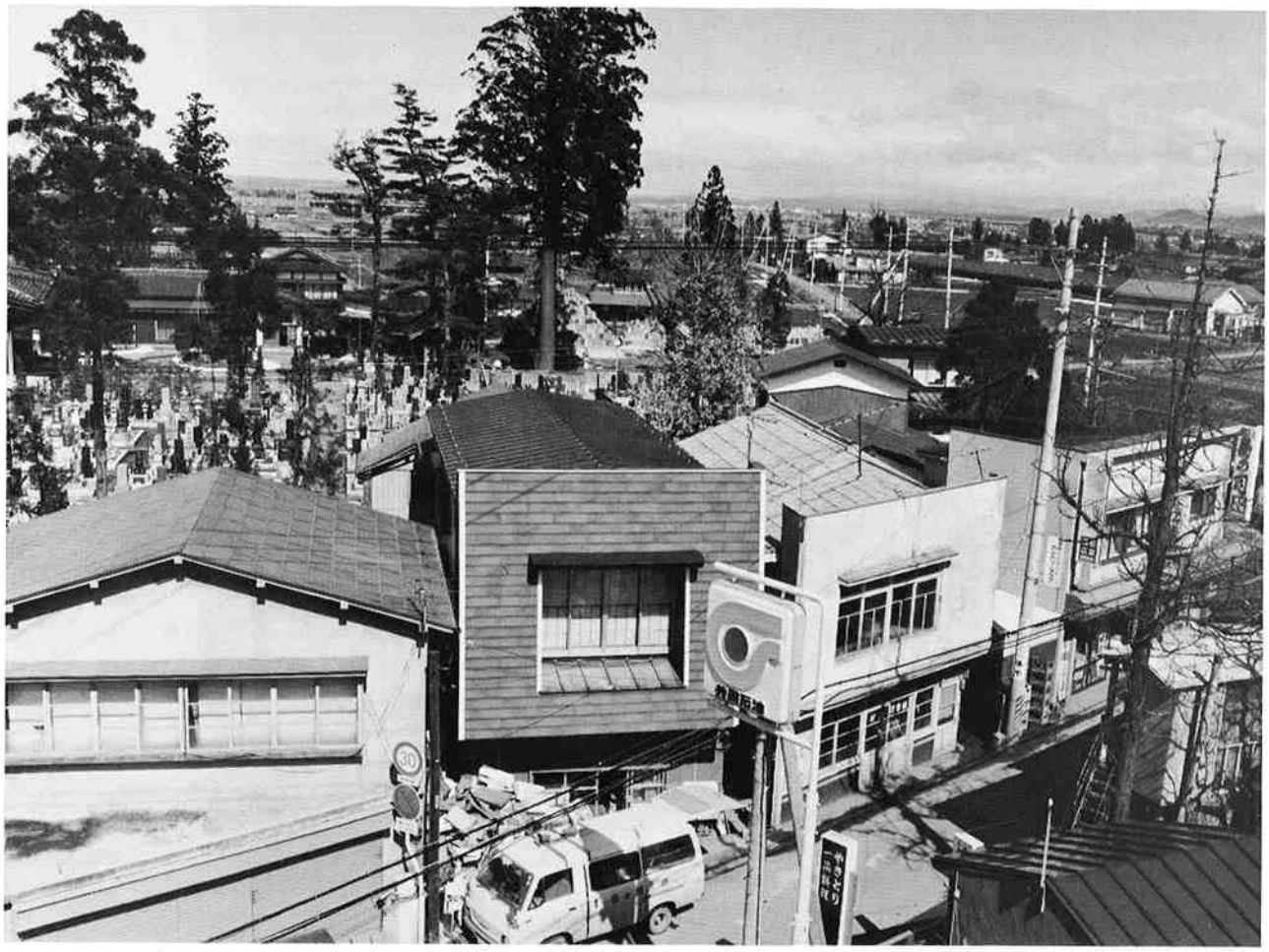


第31図　館遺跡の推定される縄張り

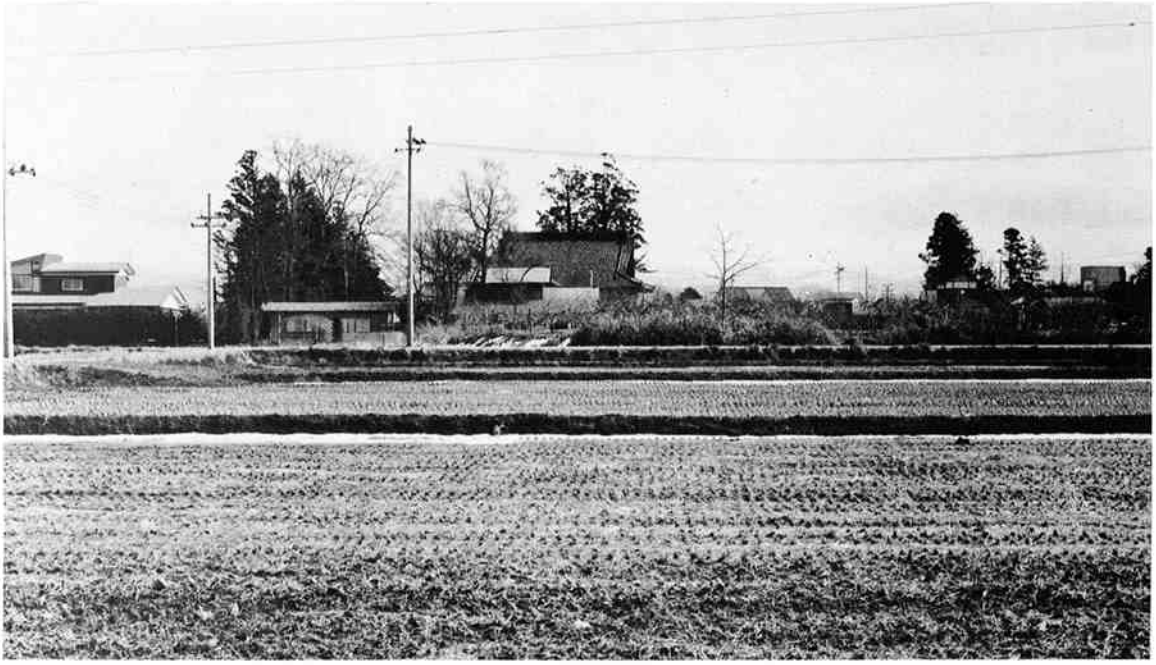
写　真　図　版



遺跡全景（南東から）



遺跡全景（南西から）



遺跡遠景

微地形
（西から）

微地形
（南西から）

微高地縁辺
（西から）

館 1 次調査
平安時代(1)
RA 001・002・003

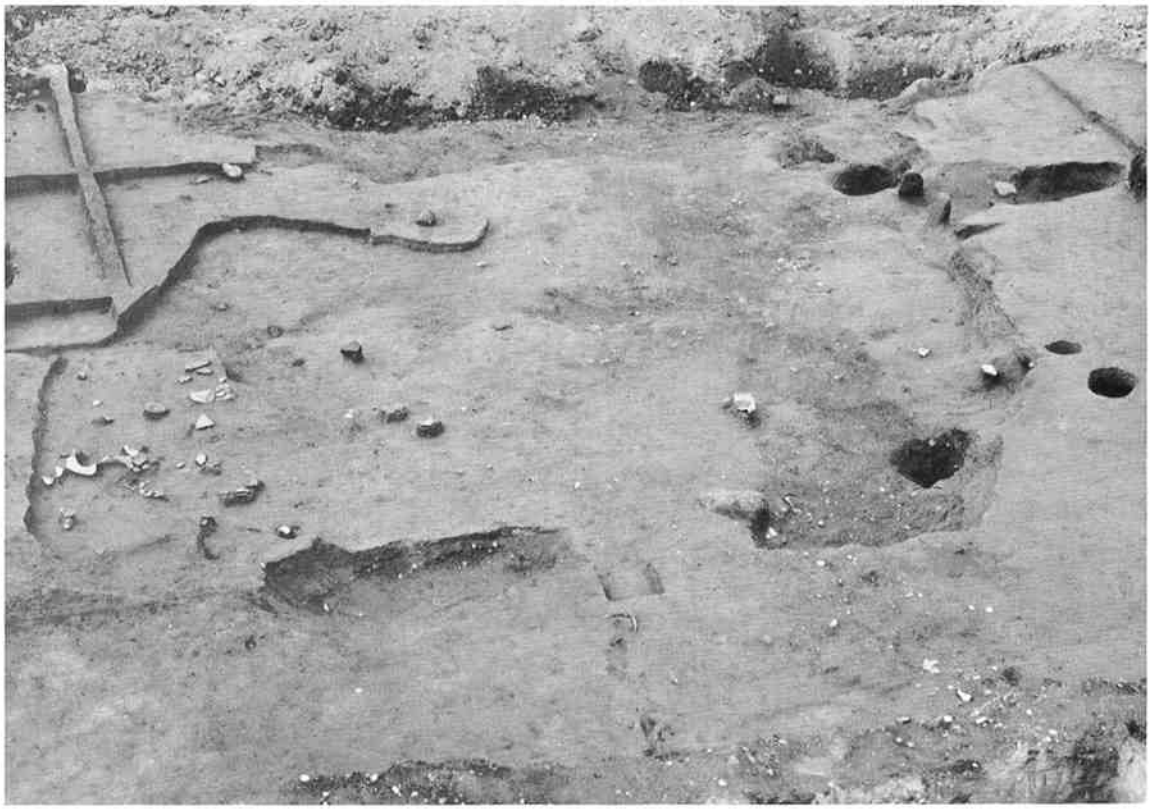
全　景
（西から）

全　景
（北から）

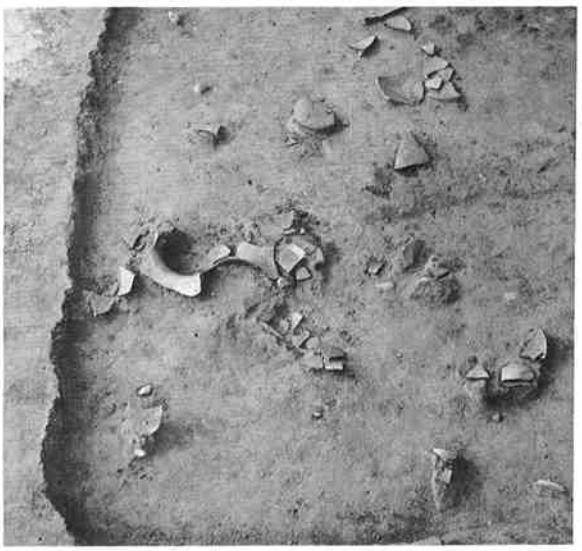
R A 003
竪穴住居跡
（南から）

館 1 次調査
平安時代(2)
RA 004・005

全　景
（西から）



全　景
（南から）

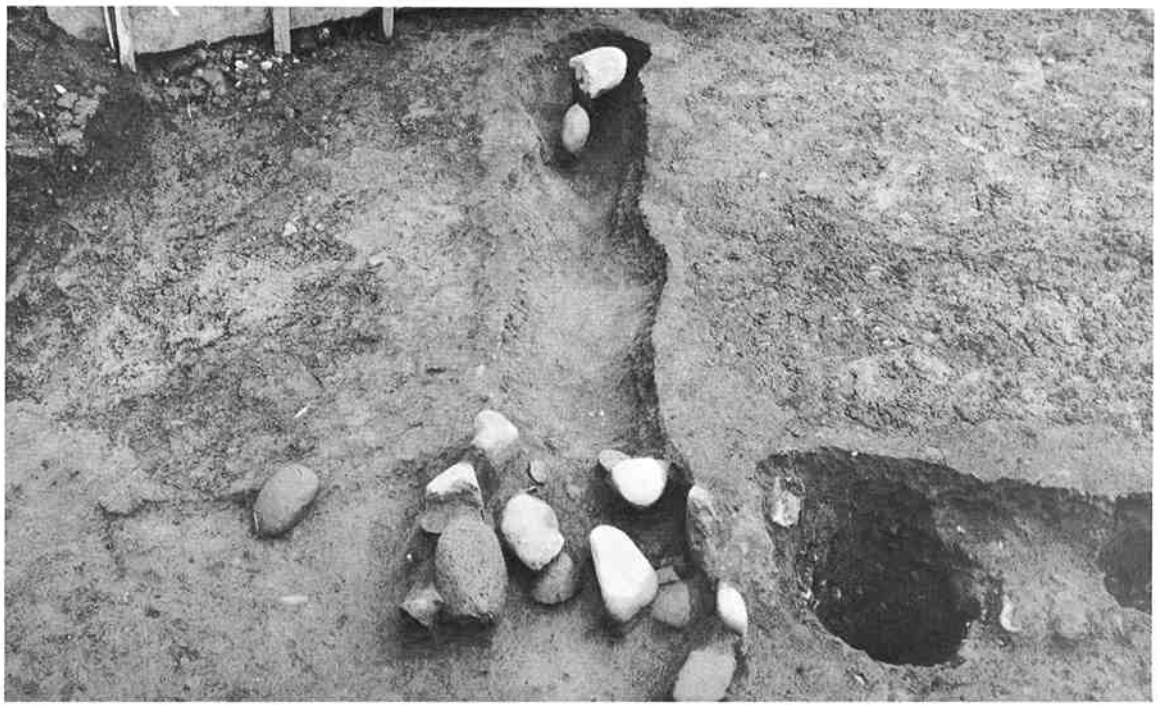


右 005遺物出土
状況（南から）
左 005かまど全
景（西から）

館 1 次調査
平安時代(3)
RA 006

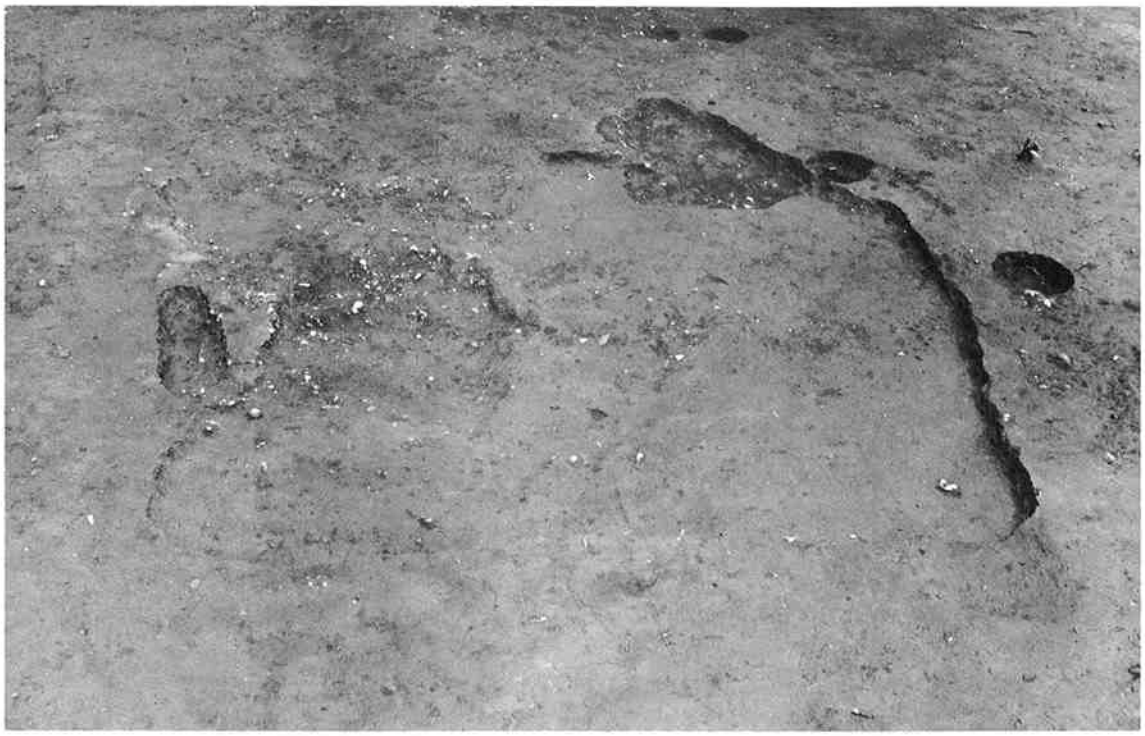
全　景
（北西から）

全　景
（西から）



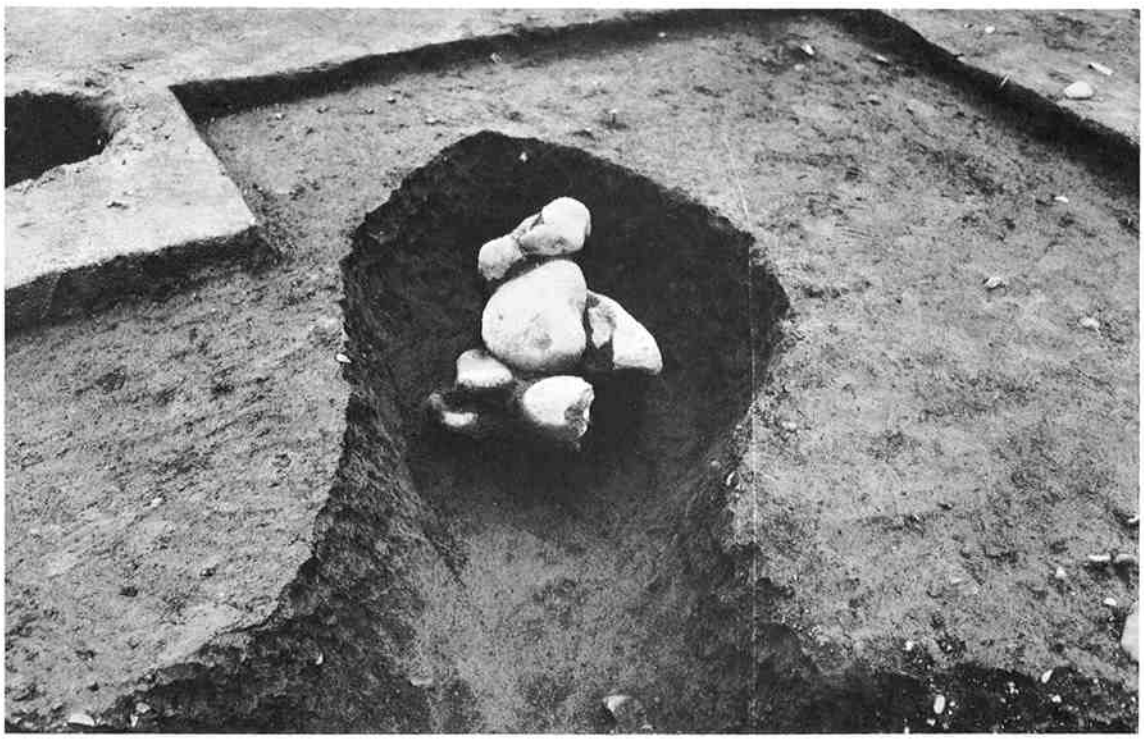
かまど全景
（北西から）

館 1 次調査
平安時代(4)
RF 007・RA 008



R F 007
全　景
（南から）

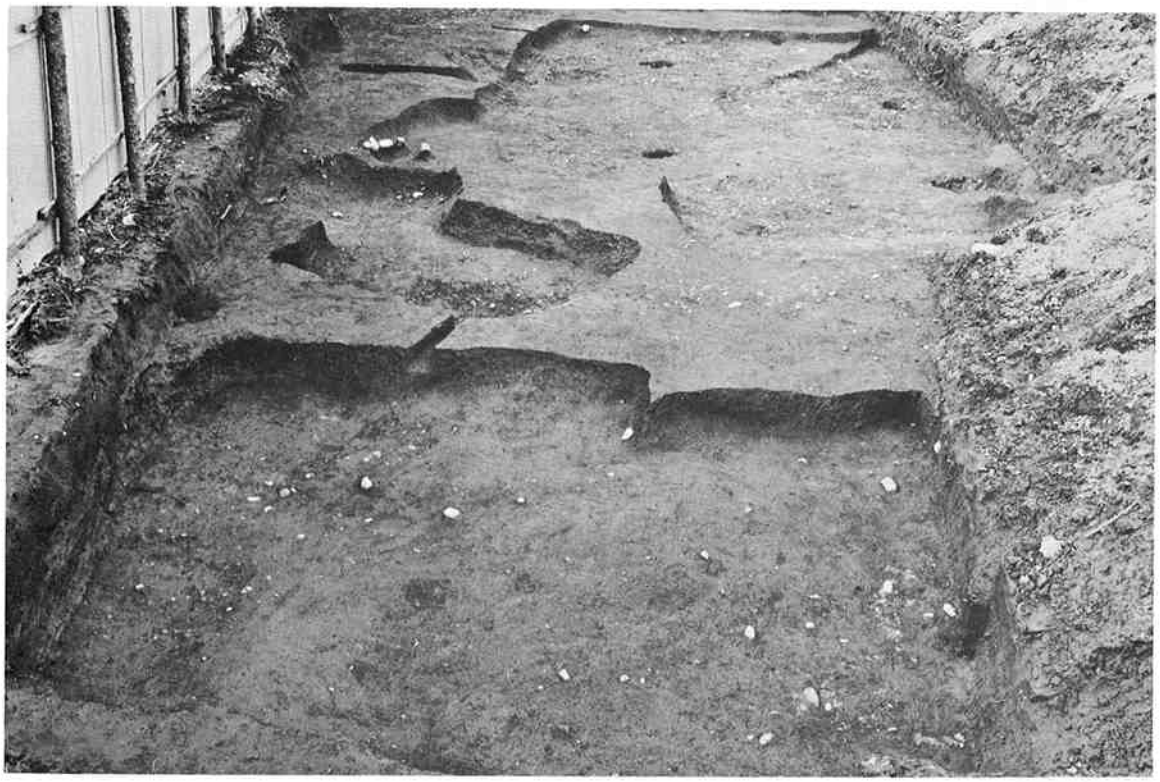
R A 008
全　景
（南から）



R A 008
煙出し
（北西から）

館 1 次調査
平安時代(5)
RA 009・011・011

全　景
（北から）

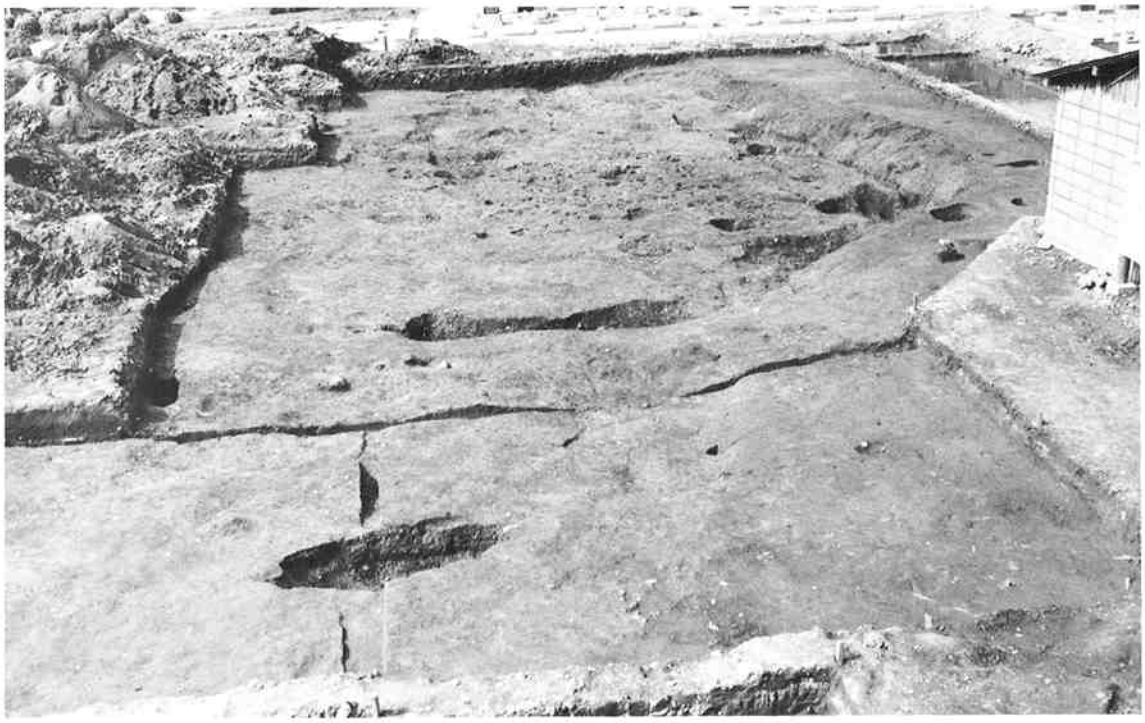


全　景
（南から）

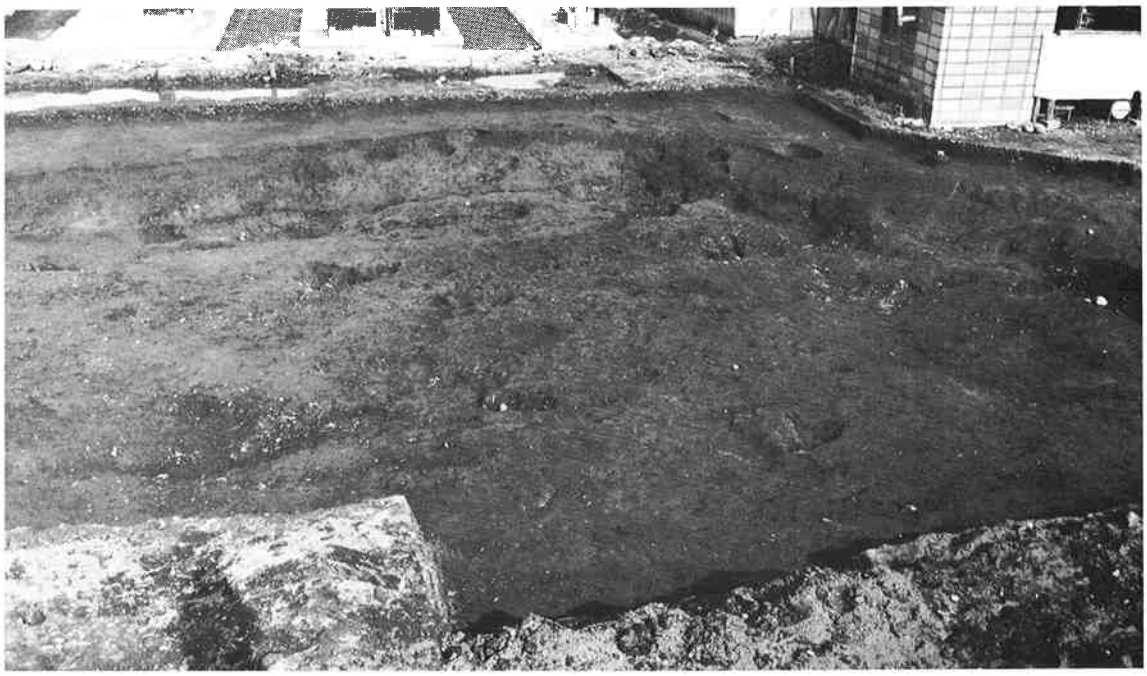
右ＲＡ009かまど
全景（東から）
左ＲＡ009遺物出
土状況

館 1 次調査
中世以降
調査区

全　景
（北から）

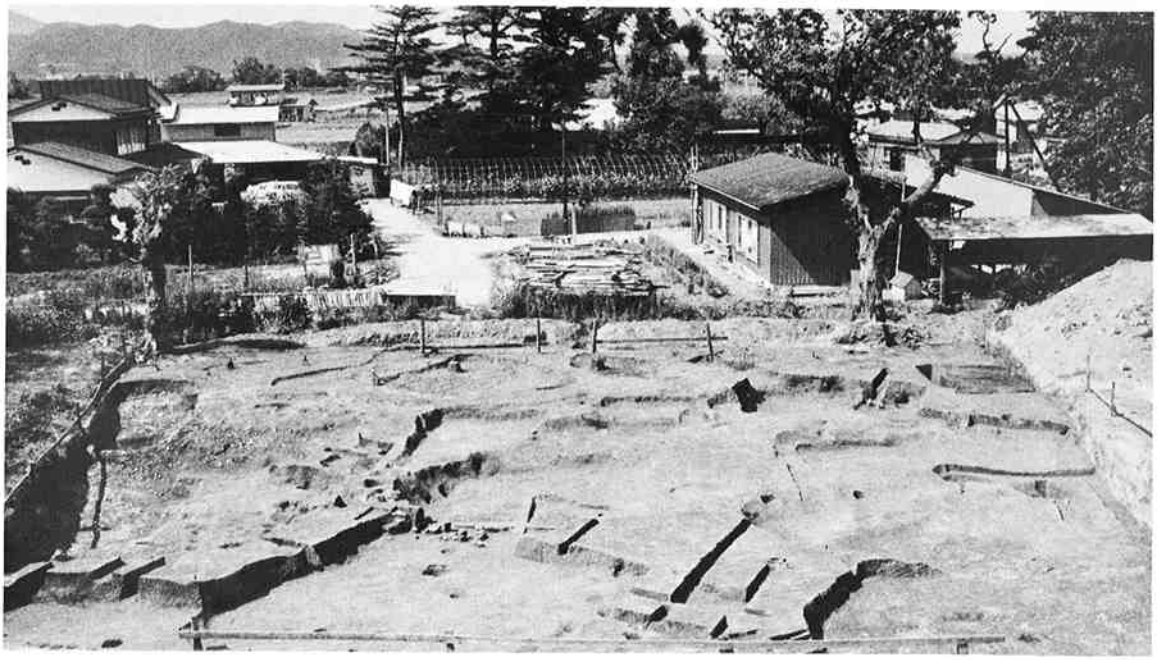


全　景
（南から）



全　景
（西から）

館 2 次調査
平安時代(1)
調査区



全　景
（南から）

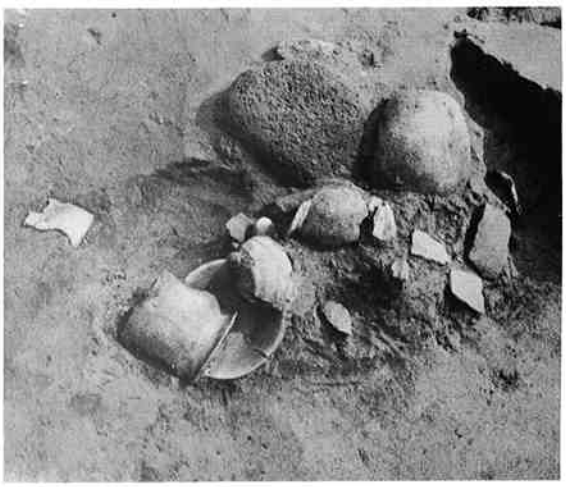
全　景
（西から）

全　景
（北東から）

館2次調査
平安時代(2)
RA 012

全　景
（北から）

全　景
（南から）

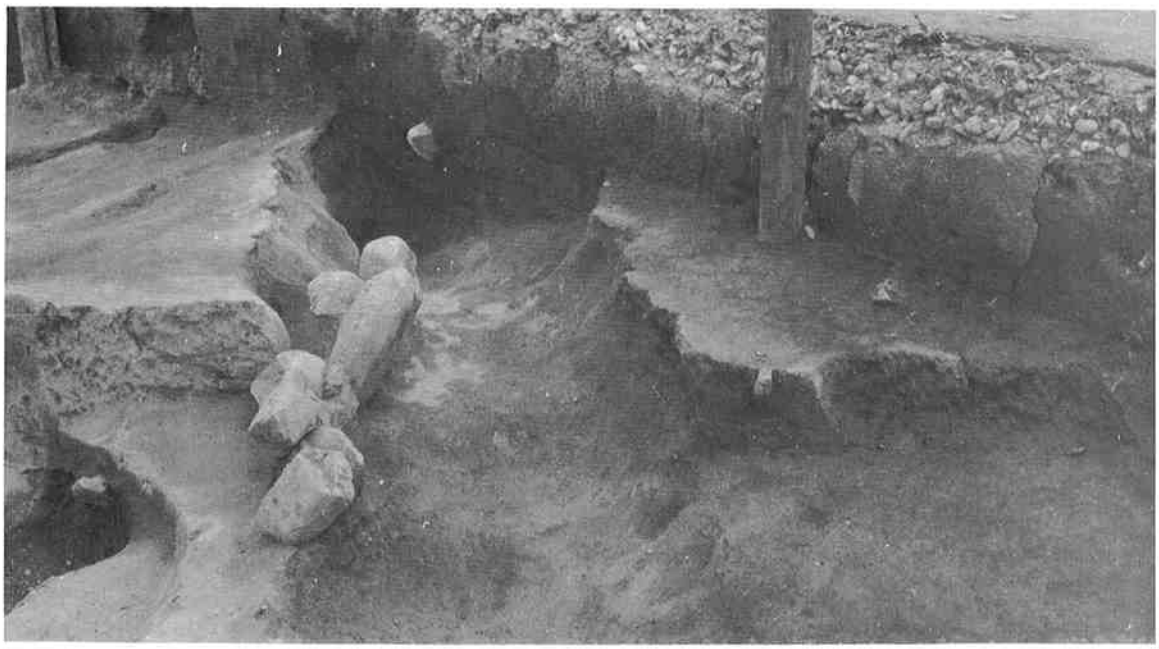


右　遺物出土状況
左　かまど全景

館 2 次調査
平安時代(3)
RA 013

全　景
（北西から）

全　景
（北東から）



南側かまど
（北西から）

館2次調査
平安時代(4)
RA014・015

RA014 全景
(東から)

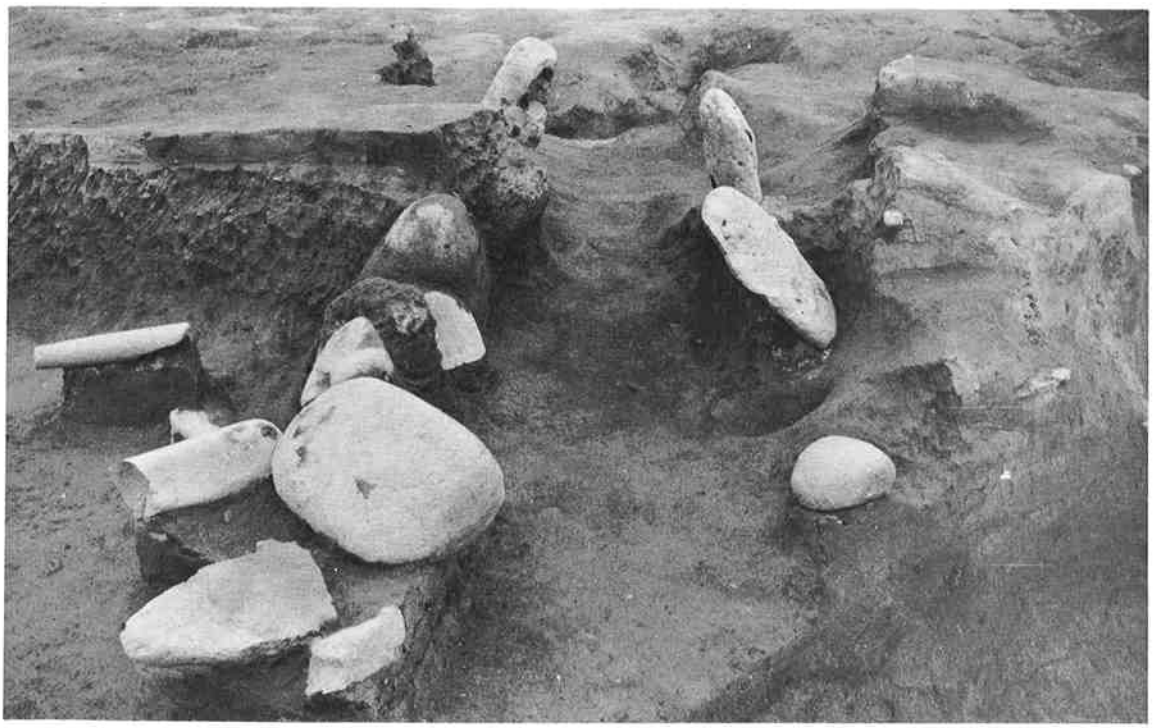
RA014 全景
(南から)

RA015 煙道
(南西から)

館2次調査
平安時代(5)
RA 016

全　景
（北から）

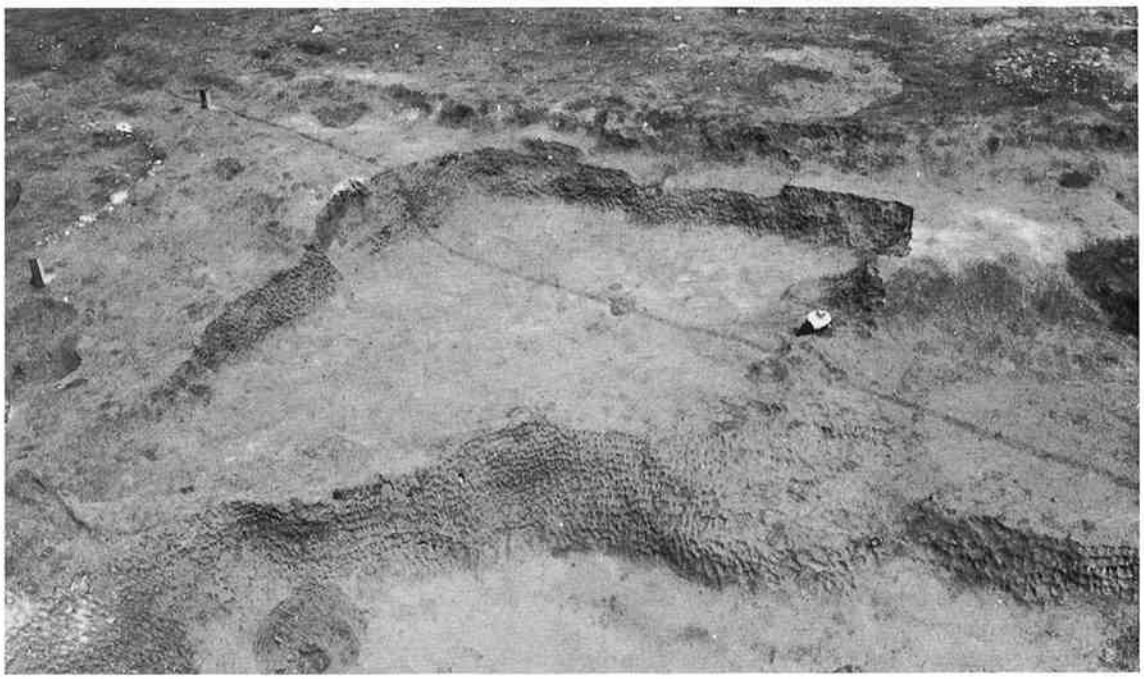
全　景
（北東から）



かまど全景
（北東から）

館 2 次調査
平安時代(6)
RA 017

全　景
（西から）

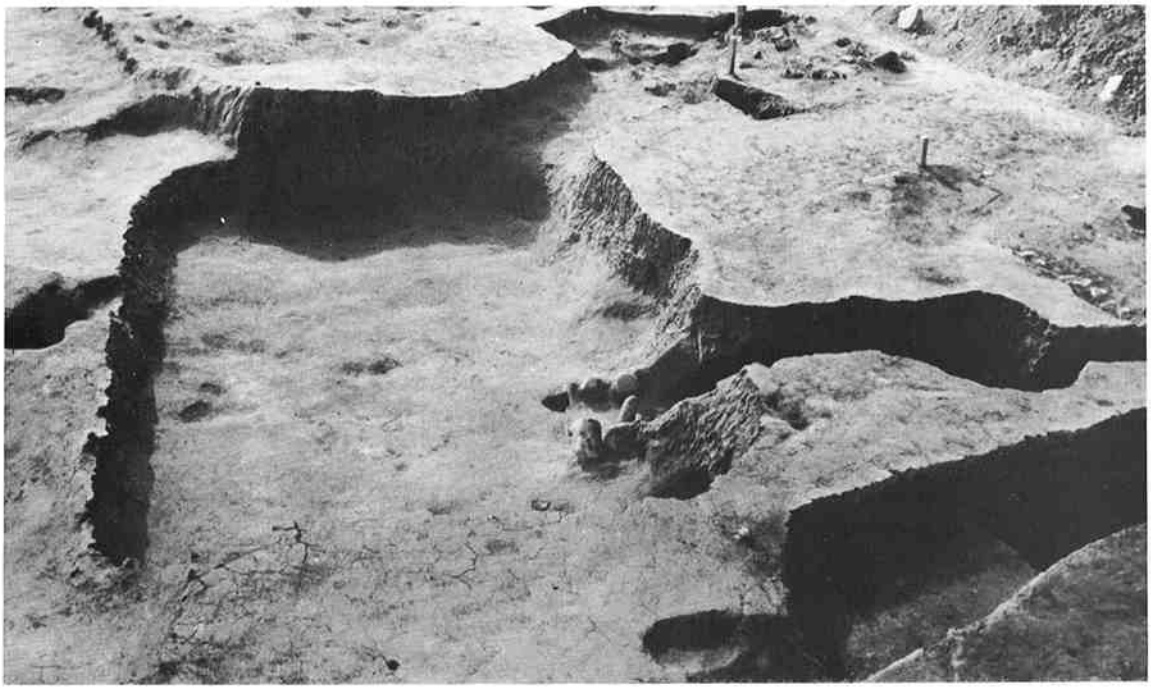


全　景
（南から）

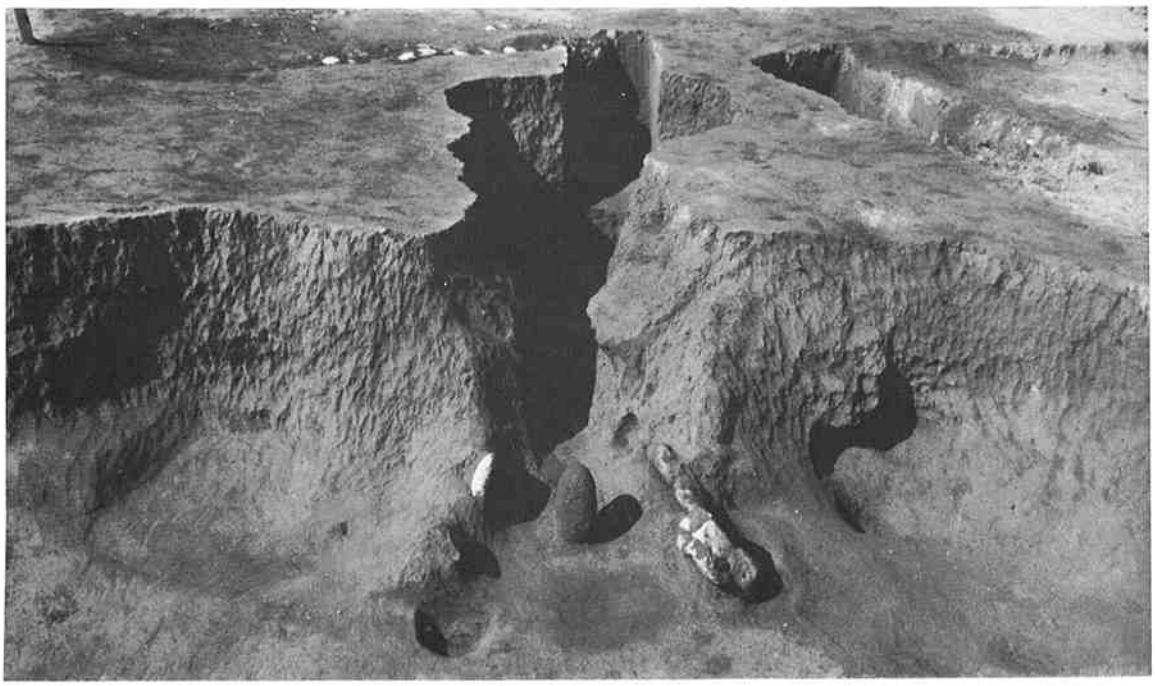
構築面全景
（西から）

館 2 次調査
平安時代(7)
RA 018・RG 001

全　景
（南西から）

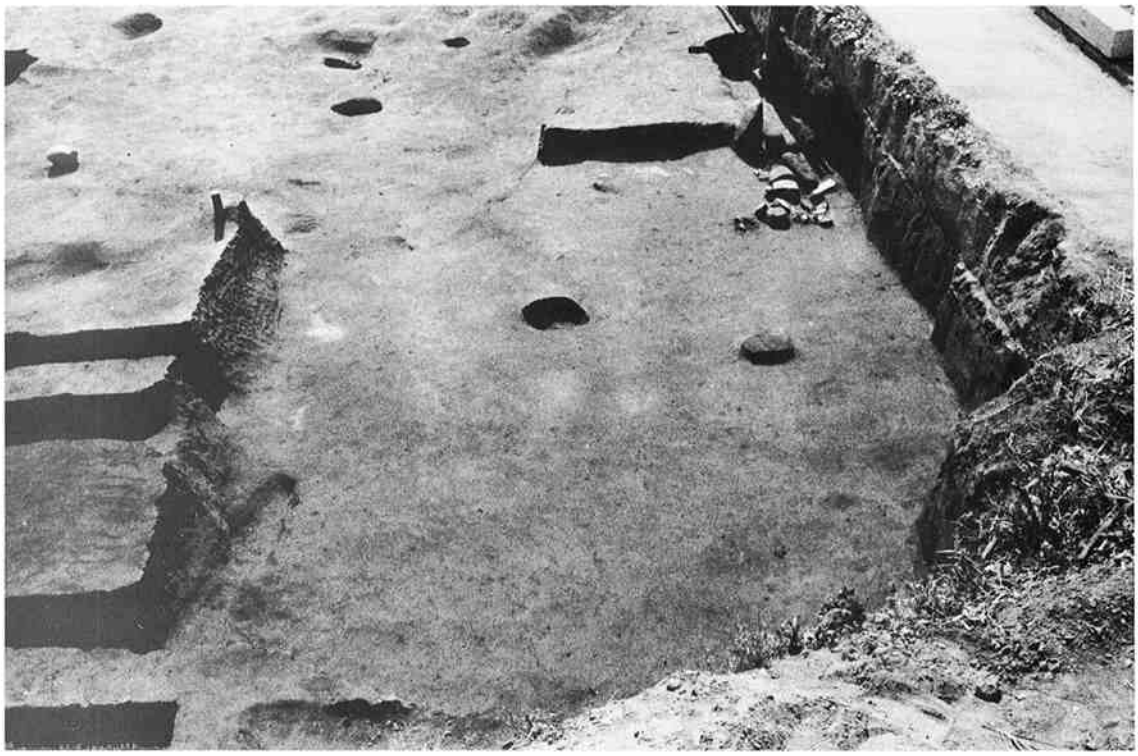


全　景
（南東から）

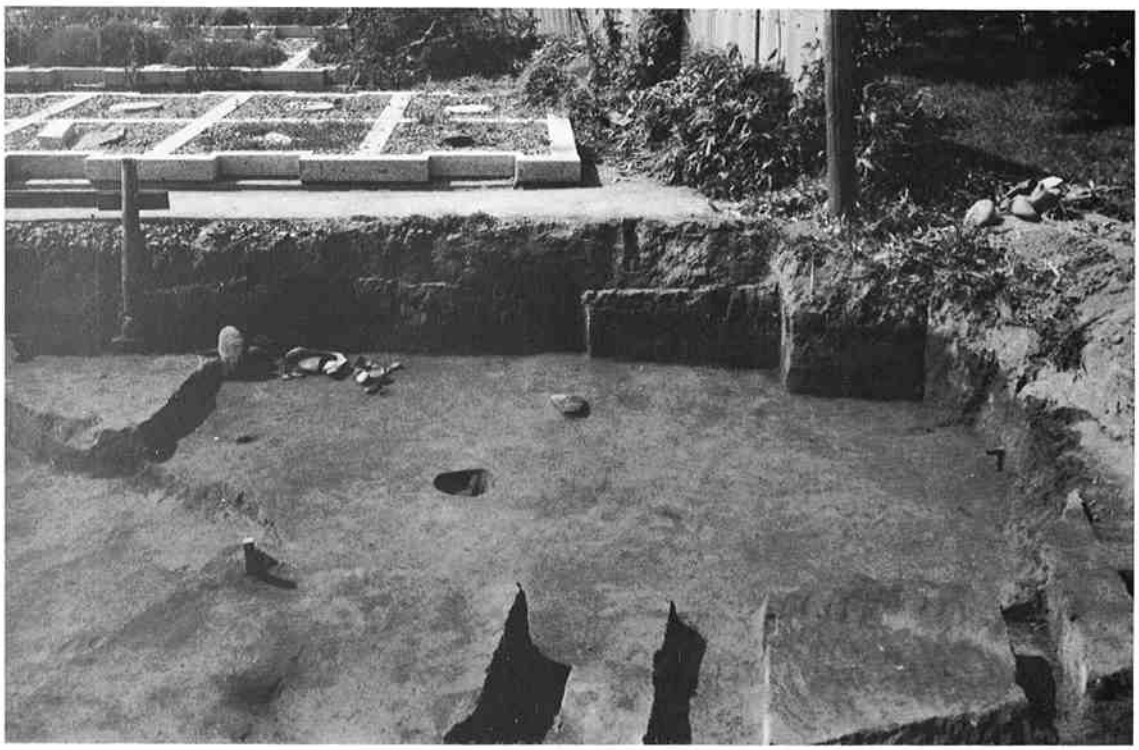


かまど全景
（南東から）

館 2 次調査
平安時代(8)
RA 020



全　景
（西から）

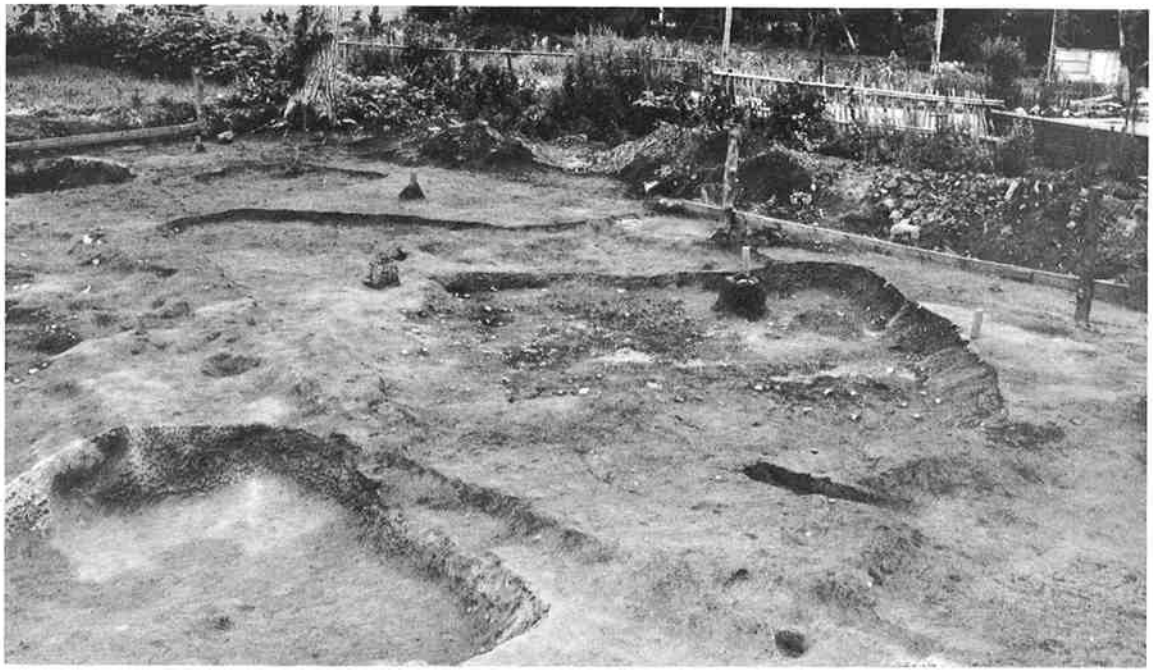


全　景
（北から）

右　かまど全景
（西から）
左　かまど構築面
（西から）

館 2 次調査
平安時代(9)
RA 021・RF 025
RD 003・004・005
・006・RG 001

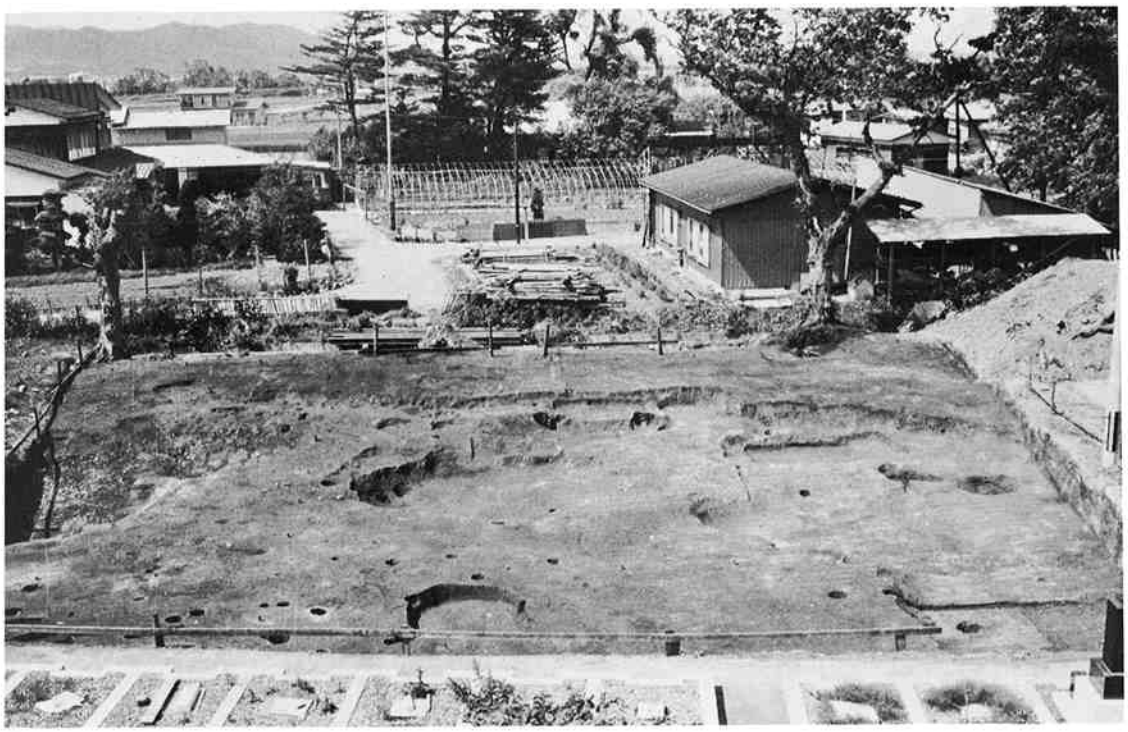
R A 021
全　景
（南西から）



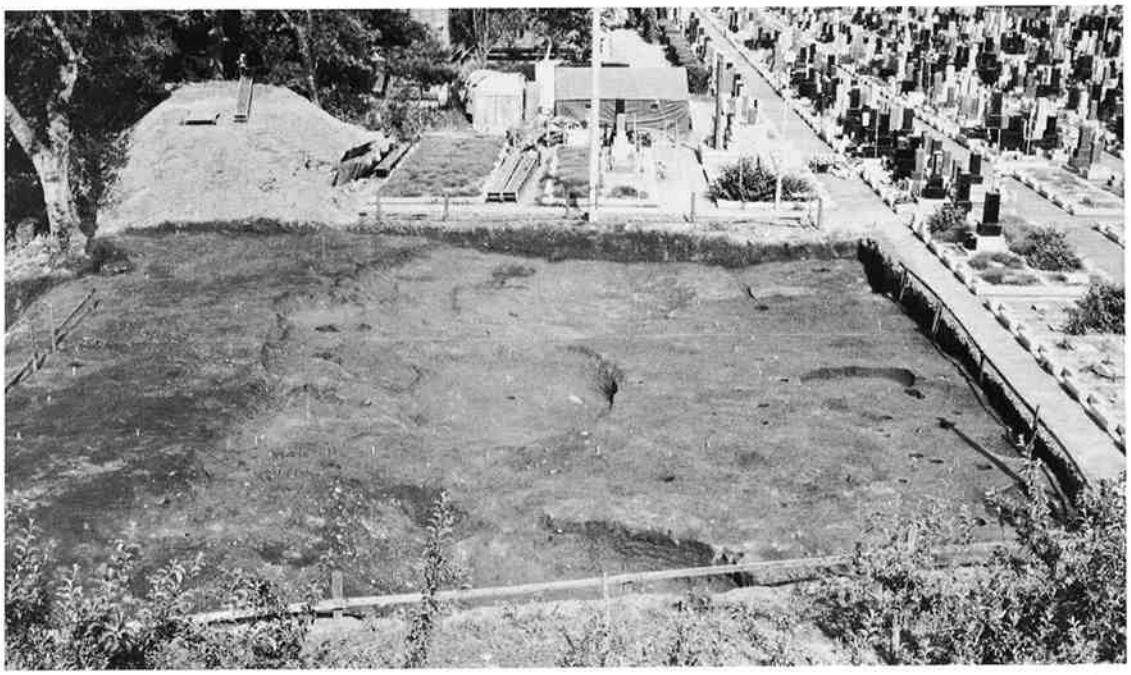
R F 025
R D 003・004・
005・006
全　景
（南東から）

R G 001
全　景
（南東から）

館 2 次調査
中世以降(1)
調査区



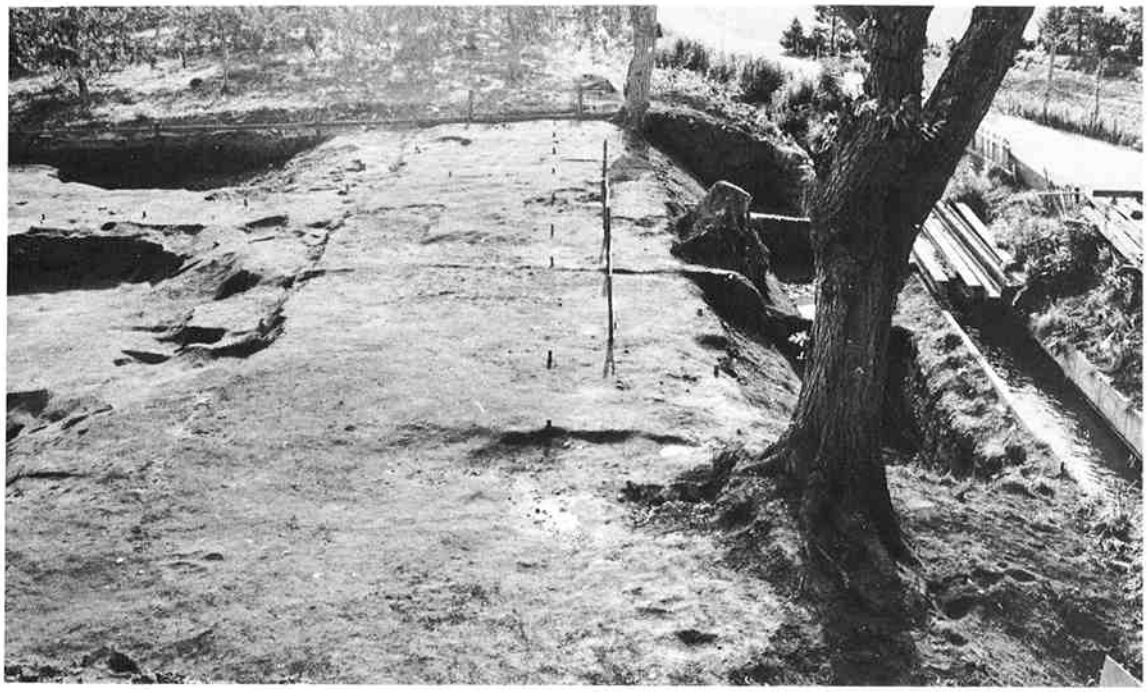
全　景
（南から）



全　景
（西から）

全　景
（北東から）

館２次調査
中世以降(2)
調査区

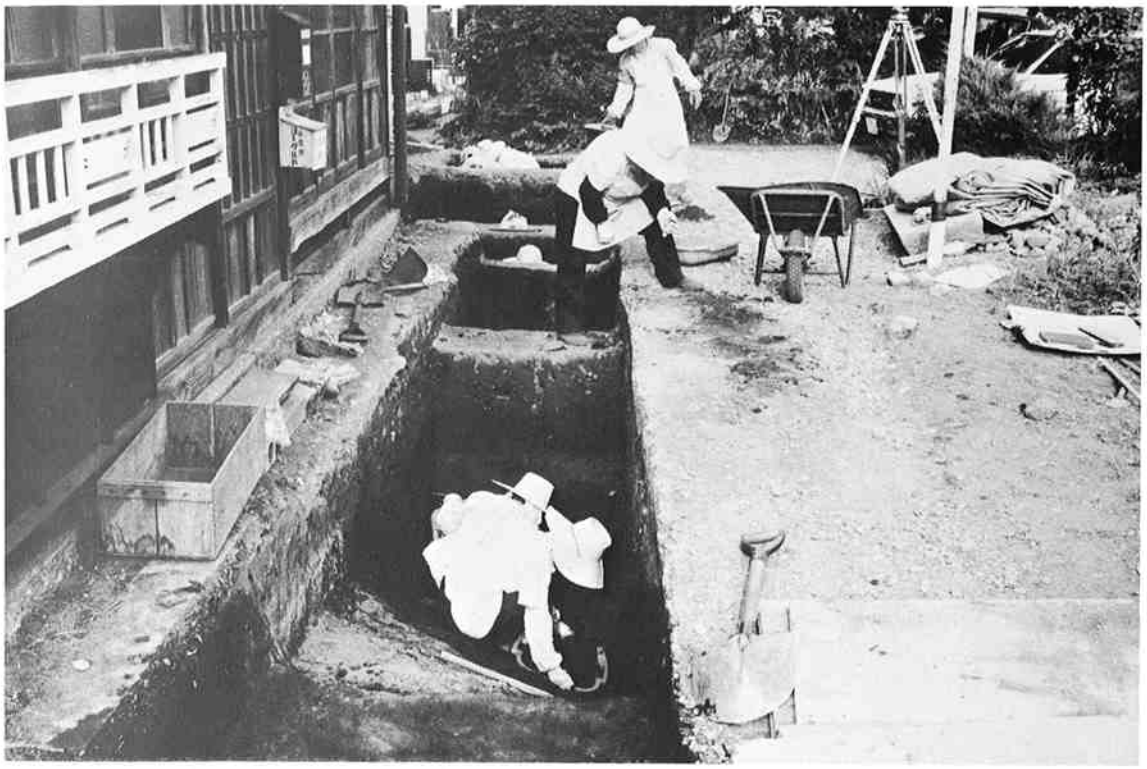


ＳＤ002・ＳＦ001
全　景
（東から）

ＳＤ002
全　景
（東から）

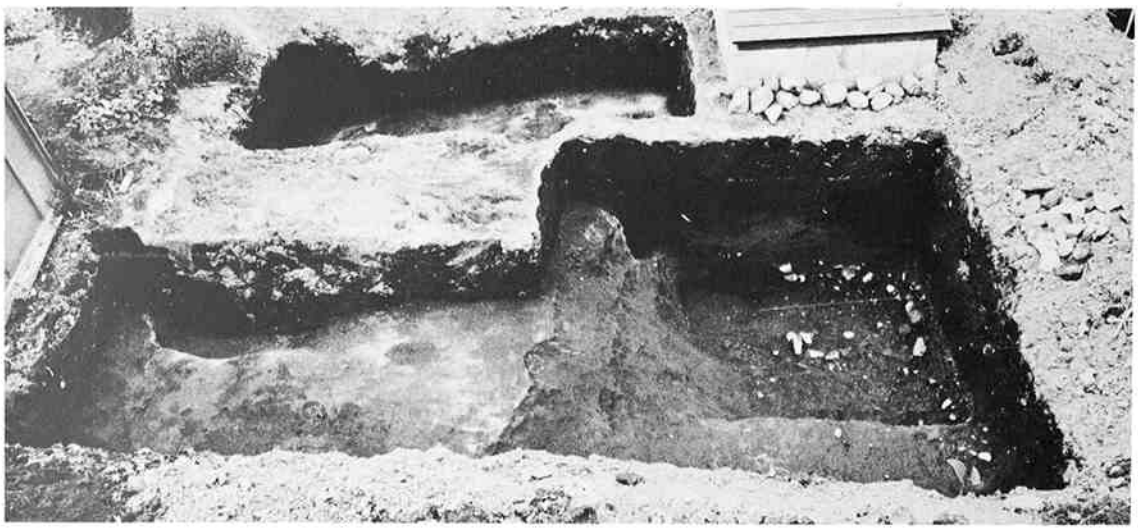
ＳＦ001・ＳＫ002
全　景
（南西から）

館 3・4・5 次調査
中世以降・近世



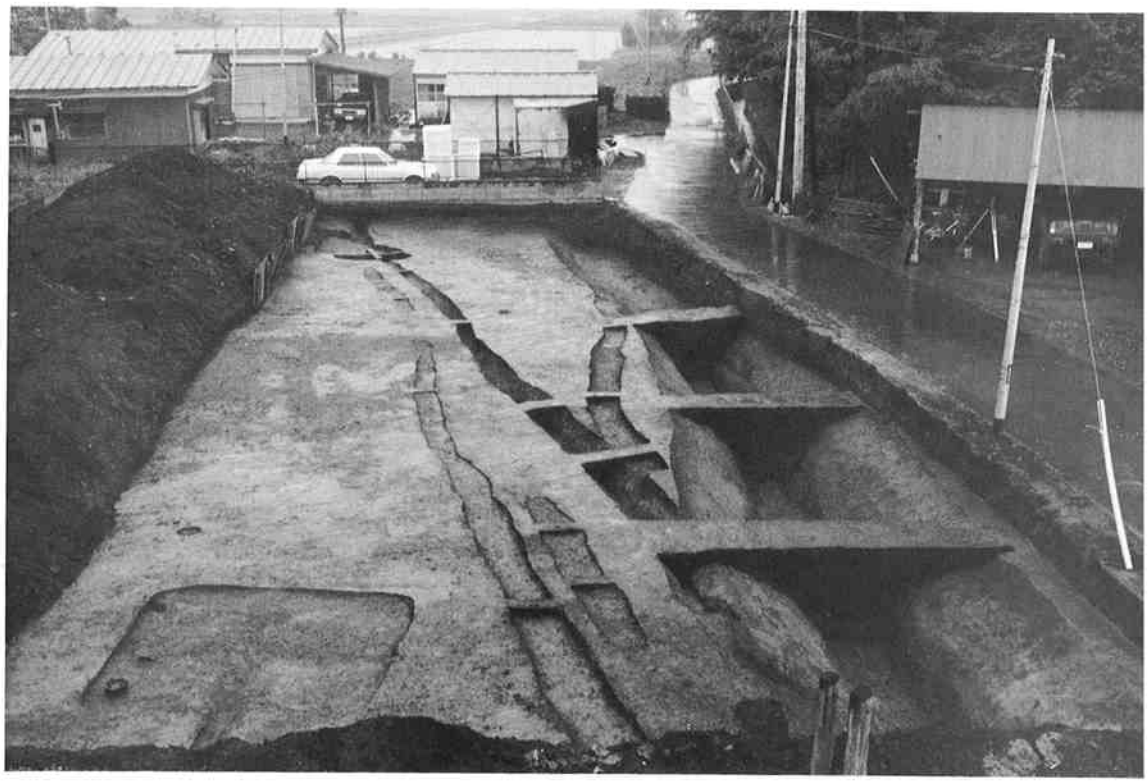
3 次調査
調査状況
（西から）

4 次調査
土層断面
（北東から）



5 次調査
全　景
（東から）

松ノ木６次調査
平安時代・中世
以降

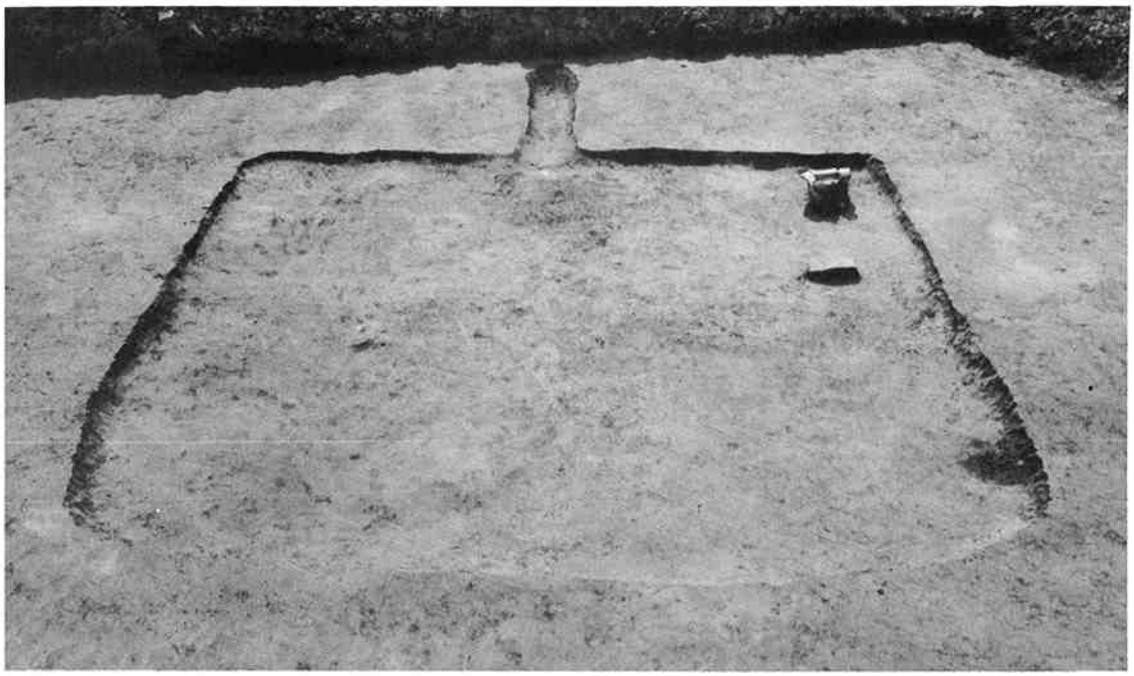


南半全景
（西から）

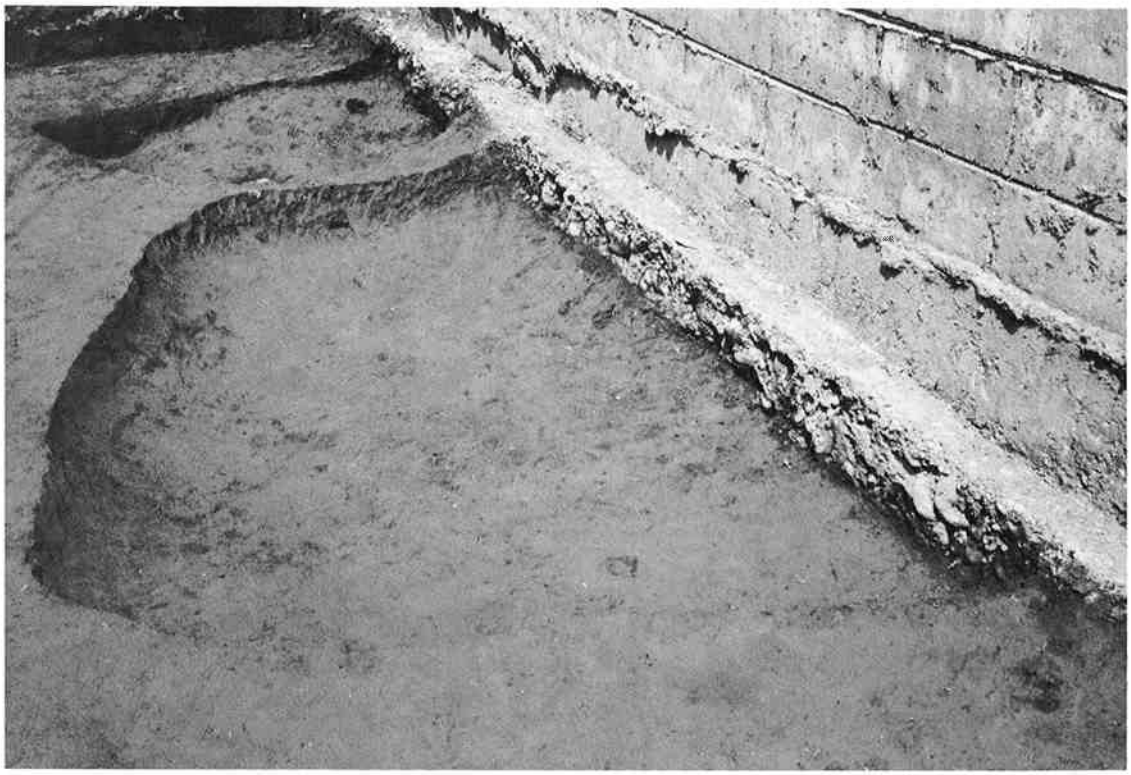
ＳＤ008堀跡
土層断面
（南東から）

北半全景
（南西から）

松ノ木6次調査
奈良・平安時代
RA026・027・029
・030・RD007



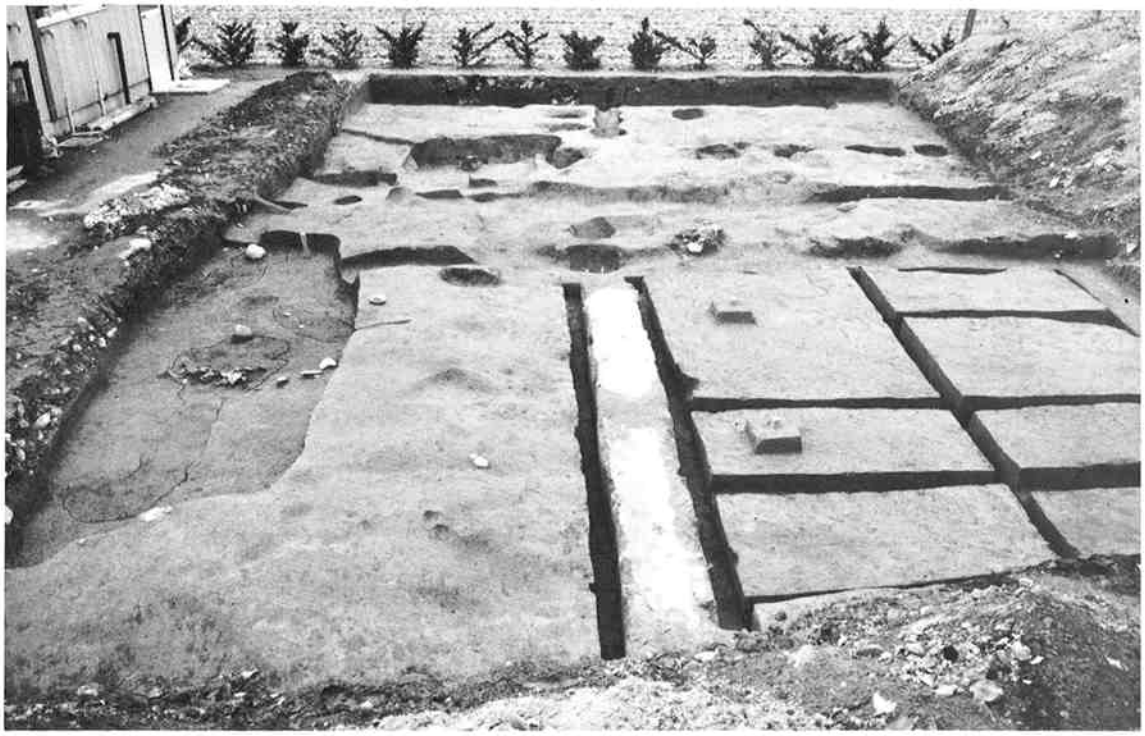
RA026
全　景
（東から）



RA027
全　景
（南東から）

RA029・030
RD007
全　景
（南西から）

松ノ木 7・8 次調査
奈良・平安時代
中世以降



7 次調査
全　景
（東から）

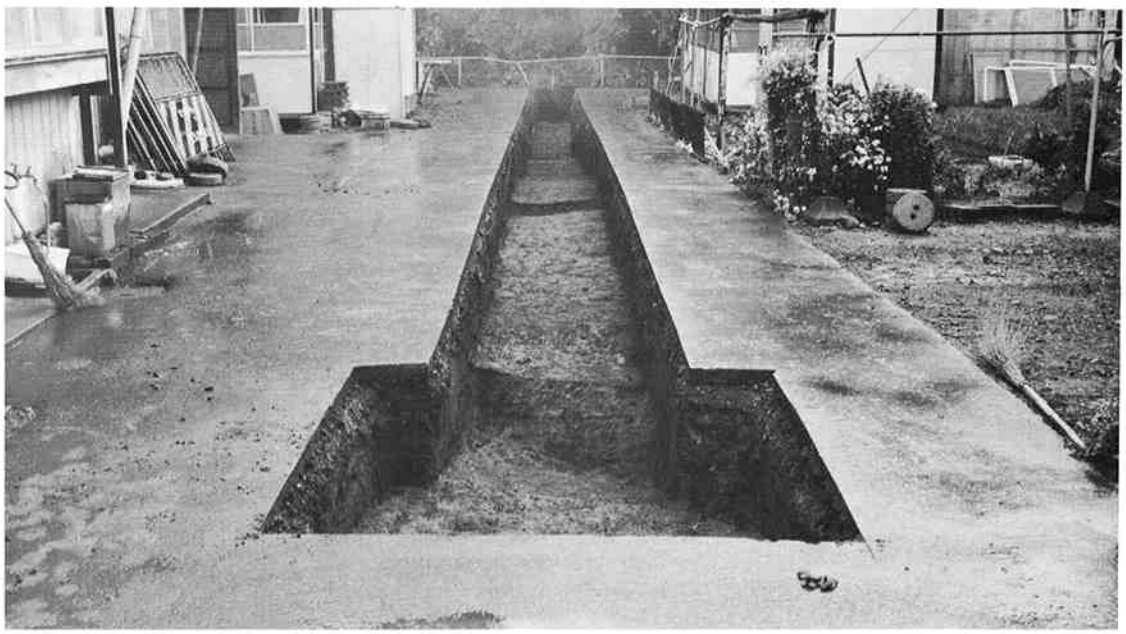
8 次調査
S D013・014
（西から）

8 次調査
S D015
（西から）

館 9 次調査
中世以降

S D013
土層断面
（北西から）

S D013
（東から）

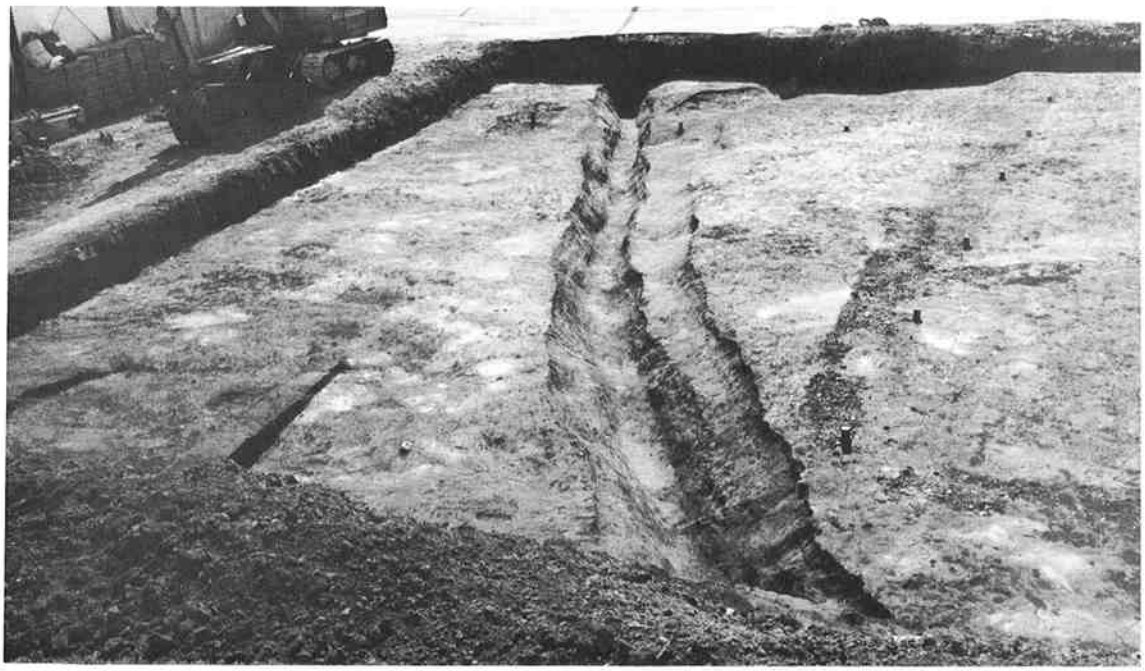


S D016・017・018
（南から）

館10・11次調査
松ノ木12次調査
平安時代
中世以降

10次調査
全　景
（北から）

11次調査
ＲＡ036・037
（北西から）



12次調査
ＳＤ022・ＳＫ025
（北東から）

館・松ノ木遺跡

――古代の遺構編――

平成4年3月31日発行

発行　盛岡市教育委員会

〒020 盛岡市内丸12番2号

印刷　協業組合　岩手印刷センター

〒020 盛岡市志家町5番28号